戶階陛左右、皆王僚の親戚也。王僚夾立して侍り、皆長鈹を持つ。酒既に酣なり。公子光詳つて足疾と爲し、窟室の中に入る。專諸をして匕首を魚炙の腹中に置いて之を進めしむ。既に王の前に至る。專諸、魚を擘き、因つて匕首を以て王僚を刺す。王僚立に死す。左右も亦專諸を殺す。王の左右人擾亂す。公子光、其伏甲を出し、以て王僚の徒を攻め、盡く之を滅ぼし、遂に自立して王と爲る。是を闔閭と爲す。闔閭乃ち專諸の子を封じて以て上卿と爲す。其後七十餘年にして晉に豫讓の事あり。

豫讓は、晉の人也。故嘗て范中行氏に事へたりしも、名を知らるゝ無し。去つて智伯に事ふ。智伯甚だ之を尊寵す。智伯趙襄子を伐つに及び、趙襄子、韓魏と謀を合はせ、智伯を滅ぼし、智伯の後を滅ぼして、其地を三分す。趙襄子、最も智伯を怨み、其頭に漆して以て飲器を爲る。豫讓、山中に逃逃す、曰く、嗟乎、士は己を知る者の爲めに死し、女は己を說ぶ者の爲めに容る。今、智伯、我を知る。我必ず智伯の爲めに讎を報いて死せん。以て智伯に報いば、則ち吾が魂魄、愧ぢじと。乃ち名姓を變

じて刑人と爲り、宮に入り廁中に漆り塗ルナリ、匕首を挾んで、以て襄子を刺さんと欲す。襄子、廁に如き、心動く胸騷ギス。執へて廁を塗るの刑人を問へば、則ち豫讓、內に乃兵首を持てり。曰く、智伯の爲めに仇を報いんと欲すと。左右之を誅せんと欲す。襄子曰く、彼は義人なり。吾謹んで之を避けん耳。且つ智伯亡びて後無くして、其臣の爲めに仇を報いんと欲す。此れ天下の賢人也と。卒に釋して之を去らしむ。居ること之を頃し、豫讓又身に漆して厲癩病と爲り、炭を呑んで啞と爲り、形狀をして知る可からざらしめ、行々市に乞ふ。其妻識らざる也。行いて其友を見る。其友之を識つて曰く、汝は豫讓に非ずやと。讓曰く、我は是れ也と。其友爲めに泣いて曰く、子の才を以て、質を委して襄子に臣とし事へば、襄子必ず子を近幸せん。子を近幸せば、乃ち欲する所を爲せ。顧ふに易からずや。何ぞ乃ち身を殘ひ形を苦しめ、以て襄子に報ゆるを求めんと欲する。亦難からずやと。豫讓曰く、既に已に質を委し人に臣事して、之を殺さんを求めば、是れ二心を懷き以て其君に事ふる也。且つ吾が爲す所は極

めて難き耳。然れども此を爲す所以は、將に以て天下後世の人臣と爲つて二心を懷き以て其君に事ふる者を愧ぢしめんとする也と。既にして去る。之を頃し、襄子、出づるに當つて、豫讓襄子ノ當に過ぐべき所の橋下に伏す。襄子、橋に至る、馬驚く。襄子曰く、此れ必ず是れ豫讓ならんと。人をして之を問はしむれば、果して豫讓也。是に於て襄子乃ち豫讓を數めて曰く、子は嘗て范中行氏に事へずや。智伯盡く之を滅ぼせるに、而るに子范中行氏ノ爲めに讎を報いずして、反つて質を委して智伯に臣となれり。智伯亦已に死す。而して子獨り何を以て之が爲めに讎を報ゆるの深きやと。豫讓曰く、臣、范中行氏に事へたりしも、范中行氏は皆衆人として我を遇す。我、故に衆人として之に報ゆ。サレド智伯に至つては、國士として我を遇す。我、故に國士として之に報ゆるなりと。襄子喟然として歎息して泣いて曰く、嗟乎豫子、子が智伯の爲めにする、名既に成り、而して寡人の子を赦すも亦已に足る。子其れ自ら計覺悟を爲せ。寡人復た子を釋さずと。兵をして之を圍ましむ。豫讓曰く、臣聞く、明主は人の美を掩はずし

て、忠臣は名に死するの義ありと。前に君已に臣を寛赦す。天下、君の賢を稱せざるは莫し。今日の事は、臣固より誅に伏せん。然れども願はくは君の衣を請うて之を擊ち、以て讎を報ゆるの意を致さば、則ち死すと雖も恨みじ。敢て望む所に非ざる也。敢て腹心を布く敢テ心ノ腹ヲ打明ケルト也と。是に於て襄子大に之を義とし、乃ち使をして衣を持し豫讓に與へしむ。豫讓劒を拔き三たび躍つて之を擊つて曰く、吾以て下、智伯に報ゆ可きなりと。遂に劍に伏して自殺す。死するの日、趙國の志士之を聞いて皆爲めに涕泣す。其後四十餘年にして軹に聶政の事あり。

聶政は、軹の深井里の人也。人を殺して仇を避け、母姉と齊に如き、屠狗豚等ヲ屠ルコトを以て事と爲す。之を久しうし、濮陽の嚴仲子なるものあり、韓の哀侯に事へて、韓の相ナル俠累と郤隙也あり。嚴仲子、誅を恐れ、亡げ去つて游び、人の以て俠累に報ゆ可き者を求め、齊に至る。齊人或は曰ふ、聶政は勇敢の士なるも、仇を避け、屠者の間に隱ると。嚴仲子、門に至つて逢ハンコトヲ請ひ、數々反往復す。然る後酒を具へ、自ら聶政の母の

前に暢飲す。酒酣にして、嚴仲子、黃金百鎰を奉じ、前んで聶政の母の壽を爲す（健康ヲ祝スル也）。聶政其厚きを驚怪し、固く嚴仲子に謝す。嚴仲子固く進む。聶政謝して曰く、臣幸に老母あり。且家貧にして客游す。以爲へらく、狗屠は以て旦夕甘旨（美味ノ物）を得以て親を養ふ可しと。親の供養備はる。敢て仲子の賜に當らずと。嚴仲子人を辟け、因つて聶政に言を爲して曰く、臣、仇あり、而して（其仇ヲ擊ツテ呉ル人モガナト）諸侯に行游する（遊キモ未ダ恰好ノ人無シ）。然るに齊に至るや、竊に足下の義甚だ高きを聞く。故に百金を進むるは、將に用つて夫人（聶政ノ母ヲ指ス）の麤糲（粗服糲米）の費（費用）と爲し、以て足下の驩に交はるを得んとするなり。豈に敢て以て求望する有らんやと。聶政曰く、臣、志を降し身を辱しめ市井に居りて屠する所以は、徒に以て老母を養ふを幸とすればなり。老母在（イマ）す、政が身未だ敢て以て人に許さゞる也と。嚴仲子固く讓るも、聶政竟に受くるを肯んぜざる也。然れども嚴仲子卒に賓主の禮を備へて去る。之を久しうし、聶政の母死す。既に已に葬り服（喪服）を除く。聶政曰く、嗟乎、政は乃ち市中の人、刀を鼓して以て屠り、而して嚴仲子は乃ち

諸侯の卿相なるを、千里を遠しとせず、車騎を枉げて臣に交はる。而（ニ）臣の之を待つ所以、至つて淺鮮、未だ大功の以て稱す可き者あらず。而るに嚴仲子、百金を奉じ親（カクノコト）の壽を爲す。我受けずと雖も、然れども是きは徒に深く政を知ればなり也。夫れ賢者（嚴仲子ヲ云フ）の感慨憤惋（自ラ奮ゲ相怡フ貌）の意あるを以てして、窮僻の人（聶政自ラ云フ）を親信す。而るを政獨り安くんぞ嘿然默然として已むを得んや。且つ前日、政を要す、政徒に老母を以て辭す。而（ニ）老母、今、天年を以て終る。政將に己を知る者の爲めに用ひられんとすと。乃ち遂に西、濮陽に至り、嚴仲子に見えて曰く、前日、仲子に辭さゞりし所以は、徒に親在せしを以てなり。而（ニ）今不幸にして母、天年を以て終る。仲子が仇を報いんと欲する所のものは誰とか爲す。請ふ事に從ふを得んと。嚴仲子具（フツナ）に告げて曰く、臣の仇は、韓の相（ナ）俠累なり。俠累は又韓君の季父にして、宗族は盛多、居處は兵衛甚だ設く。臣、人をして之を刺さしめんと欲せしも、乘終に能く就（ナ）す莫し。今、足下、幸にして乘て肯んぬば、請ふ其車騎壯士の足下の輔翼と爲る可き者を益さんと。聶政曰く、韓の衛も

相去る、中間甚だ遠からず。今、人の相を殺す、而相は又國君の親なり、此れ其勢、多人を以てす可からず。多人は計策得失に就テ異論を生ずる無き能はず。得失を生せば、則ち語泄れ、語泄れば、是れ韓、國を舉げて仲子と讎と爲らん。豈に殆ふからずやと。遂に車騎人徒を謝絶す。聶政乃ち辭シテ出發す。獨行して劒を杖き韓に至る。韓の相俠累方に府上政府ノ階上に坐す。兵戟を持して衛侍する者甚だ衆し。聶政、直ちに入つて階に上り、俠累を刺殺す。左右大に亂る。聶政大に呼び、擊殺せし所の者數十人。因つて自ら面を皮ぎ眼を決抉也り、自ら屠つて腸を出し、遂に以て死せり。韓、聶政の屍を取り市に暴して、購問賞ヲ懸ケテ問フナリするに、誰が子たるを知るヿ莫し。是に於て韓之を購縣賞ヲ懸ケテ知ル者ヲ募ル也すらく、能く相俠累を殺したる者を言ふものあらば、千金を予へんと。之を久しうして、知る莫き也。政の姉ナル榮、人の韓相を刺殺せし者あり、賊を得ず、國、其名姓を知らず、其尸を暴して、之に千金を縣くと聞き、乃ち於邑悲傷して曰く、其れ是れ吾が弟か。嗟乎、嚴仲子、吾が弟を知ると。立に起つて韓の市に如けば、死者は

果して政なり。尸に伏して哭する極めて哀し。曰く、是れ軹の深井里の所謂聶政なる者也と。市行の者諸の衆人皆曰く、此の人、吾が國の相を暴虐ナフす。王、其名姓を千金に懸け購ふ。夫人聞かざるか。何すれぞ敢て來つて之を識れりとするやと。榮之に應へて曰く、之を聞く。然れども政が汚辱を蒙り市販市廛の間に自棄自分ヲ委棄スル也せし所以は、老母の幸に恙無く妾の未だ嫁せざるが爲めなりしも、親は既に天年を以て下世し、妾は已に夫に嫁す。嚴仲子乃ち察し、吾が弟を困汚困窮汚辱の中に舉げて、之に交はり、澤恩澤厚ければ、奈何す可き。士は固已を知る者の爲めに死す。今乃ち妾尚ほ在るの故を以て、重ねて自刑し自ラ顔ヲ皮ギ眼ヲ抉リシヲ謂フ以て妾從從也を絶つ。妾其れ奈何ぞ身を殁するの誅を畏れて、終に賢弟の名を滅ぼさんやと。大に韓の市人を驚かす。乃ち大に天を呼ぶもの三たび、卒に於邑悲哀して政の旁に死す。晉楚齊衛之を聞き、皆曰く、獨り政の能のみに非ず、及其姉も亦烈女也と。鄉に政をして誠に其姉の濡忍性ヲ溫潤ニシテ含忍スルヲ謂フの志無く、又恢を暴すの難きを重らず、必ず險を絶ること千里、以て其名を列べ、姉弟俱に

韓の市に僇(ハヅカ)しめらるゝを知らしめば、亦未だ必ずしも敢て身を以て嚴仲子に許さゞりしならん。嚴仲子も亦人を知り能く士を得たりと謂ふ可し。其後二百二十餘年、秦に荊軻の事有り。

荊軻は、衞の人也。其先祖は乃ち齊の人なり。荊軻衞に徙る。衞人之を慶卿と謂ふ。而して燕に之く、燕人之を荊卿と謂ふ。荊卿、讀書擊劍を好み、術を以て衞の元君に說く。衞の元君用ひず。其後、秦、魏を伐つて、東郡を置き、衞の元君の支屬を野王に徙す。荊軻嘗て游んで榆次を過ぎ、蓋聶と劍を論ず。蓋聶怒つて之を目す。荊軻出づ。人或は言ふ、復た荊卿を召べと。蓋聶曰く、曩者吾與に劍を論ず、稱(カナ)はざる者あり、吾之を目す。試みに往け、是れ宜しく去つて、敢て今迄留まらざるべしと。使をして之が主人所に往かしむ。果シテ荊卿則ち已に駕して榆次を去れり。使者還り報ず。蓋聶曰く、固より去らん。吾曩者(ナヤニ)之を目攝(目視、怒視スル也)すと。荊軻、邯鄲に游ぶ。魯句踐、荊軻と博(博奕)し、道を爭ふ。魯句踐怒つて之を叱す。荊軻默(默也)して逃れ去り、遂に復た會せず。荊

軻、既に燕に至る、燕の狗屠(狗殺)及び善く筑(樂器ノ名)を擊つ者高漸離を愛す。荊軻、酒を嗜み、日に狗屠及び高漸離と燕の市に飲む。酒酣にして以往、高漸離、筑を擊ち、荊軻和して市中に歌ひ、相樂しむ。已にして相泣き、旁、人無き者の若し。荊軻、酒人(飲酒ノ人)と游ぶと雖も、然れども其の人と爲り沈深にして書を好み、其の游ぶ所の諸侯、盡く其賢豪長者と相結ぶ。其の燕に之くや、燕の處士田光先生も亦善く之を待つ。其の庸人に非ざるを知れば也。居る之を頃(シバラク)して、燕の太子丹、秦に質たりしを亡げて燕に歸るに會ふ。燕の太子丹は、故(モト)嘗て趙に質たり、而して秦王政は趙に生れ、其少時、丹と驩す。政立つて秦王となるに及んで、丹、秦に質たり。秦王の燕の太子丹を遇するも善からず。故に丹怨んで亡げ歸り、歸つて、爲めに秦王に報ゆる者を求むるも、燕國小にして、力能はず。其後、秦、日に兵を山東に出し、以て齊、楚、三晉を伐ち、稍(ナヤウヤ)く諸侯を蠶食し、且に燕に至らんとす。燕の君臣皆禍の至らんを恐る。太子丹之を患へ、其傅(守役)鞠武に問ふ。武對へて曰く、秦の地は天下に徧く、韓魏趙氏を威脅す。北

に甘泉、谷口の固めあり、南に涇渭の沃土あり、巴蜀の饒地を擅にし、隴蜀の山を右にし、關殽の險を左にし、民衆ぐして士厲しく、兵革武器餘あり。意、出づる所あれば、則ち長城の南、易水以北は、未だ定まる所あらざる也。奈何ぞ睨がるるの秦を以て、其逆鱗を批たんとは欲すると。丹曰く、然らば則ち何にか由らんと。樛武對へて曰く、請ふ大息セラレ、臣之を圖らんと。居る間あり、秦の將樊於期、罪を秦王に得、亡げて燕に之く。太子樊於期ヲ受けて之を舍せしむ。樛武諫めて曰く、不可なり。夫れ秦王の暴を以てして、怒を燕に積む、寒心するに足る。又況んや樊將軍の在る所を聞くをや。是れを肉を委して餓虎の往來スル蹊徑に當ると謂ふ也。禍必ず振はれじ。管晏管仲晏嬰ありと雖も、之が謀を爲す能はざらん。願はくは太子疾く樊將軍を遣り匈奴に入れて以て口を滅せよ。請ふ西、三晉に約し、南、齊楚を連ね、北、匈奴單于に勝講和せん。其後迺ち圖る可き也と。太子曰く、太傅の計は曠日彌久なり日ヲ曠シク過シ久シキ二卿、我が心惛然昏ムとして、須臾ノ間モ猶環する能はざるを恐る。且つ獨り此れのみに非ざる也。夫の樊將軍は天下に窮困し、身を丹に歸す。丹終に、彊秦に迫らるゝを以てして、哀憐する所の交を棄てて、之を匈奴に置かじ。是れ固に丹の命卒るの時也。願はくは太傅更に之を慮れと。樛武曰く、夫れ危ふきを行うて安きを求めんと欲し、禍を造して福を求むるは、計淺くして怨深し。一人の後交を連結して、國家の大害を顧みず、此れを怨を資けて禍を助くると謂ふなり。夫れ秦ノ燕ヲ滅ボスヲ喩フレバ鴻毛を以て、燃炭の上に燎くが如、必ず容易ニシテ何ノ事モ無けん。且つ鵰クマタカ鷙ワシの如キ秦を以て、怨讐の怒を行ふ、豈に道ふに足らんや。燕に田光先生あり、其人となり智深深智にして勇沈沈勇、與に謀る可しと。太子曰く、願はくは太傅に因つて田光先生に交はるを得ん、可ならんかと。樛武曰く、敬んで諾すと。樛武出でゝ田光先生に見えて道ふ、太子、國事を先生に圖らんと願ふと。田光曰く、敬んで教を奉ぜんと。乃ち道る。太子逢迎出迎し、却行して導案内を爲し、跪いて席を蔽ふ。田光坐定まる。左右人なし。太子、席を避けて請うて曰く、燕秦兩立せず、願はくは先生、意を留めよと。田光曰く、臣聞く駿驥裏盛壯の時は、

一日にして千里を馳するも、其衰老に至つては、駑馬最下之に先だつと。今、太子、光の盛壯の時を聞いて、臣が精力の已に消亡せるを知らず。然りと雖も光敢て以て國事を圖らざらんや。善くする所の荊卿、使ふ可き也と。太子曰く、願はくは先生に因つて交を荊卿に結ぶを得ん、可ならんかと。田光曰く、敬んで諾すと。即ち起つて趨り出づ。太子送つて門に至り、戒めて曰く、丹が報せし所、先生の言へる所の者は、國の大事也。願はくは先生泄す勿れと。田光俛して笑つて曰く、諾と。僂行（背ヲ曲ゲテ歩行スル也）して荊卿を見て曰く、光の子と相善きは、燕國知らざる莫し。今、太子は光が盛壯の時を聞いて、吾が形の已に遺ばざるを知らず。幸にして之に教へて曰く、燕秦兩立せず、願はくは先生意を留めよと。光竊に自ら（足下ヲ）外疏（カ）にせず、足下を太子に言へり。願はくは足下、太子に宮に過（ヨギ）れと。荊軻曰く、謹んで教を奉ぜんと。田光曰く、吾之を聞く、長者の行ひを爲すや、人をして之を疑はしめずと。今、太子は光に告げて曰く、言ひし所の者は國の大事也、願はくは先生泄す勿れと。是れ太子は光を疑ふ也。夫れ行を

爲して人をして之を疑はしむるは、節俠（節操アル任俠）に非ずと。自殺して以て荊卿を激まさんと欲す。曰く、願はくは足下、急に太子に過り、光、已に死せりと言ひ、言はざるを明かにせよと。因つて遂に自刎（自刎）して死す。荊軻遂に太子に見え、田光の已に死せるを言ひ、光の言を致す。太子再拜して跪き、膝行して流涕す。頃（シバラク）あつて後、言つて曰く、丹の田先生に言ふ毋れと誡めたる所以は、以て大事の謀を成さんと欲すれば也。今、田先生、死を以て言はざるを明かにす、豈に丹の心ならんやと。荊軻、坐定まる。太子、席を避け頓首して曰く、田先生、丹の不肖を知らず、足下（ノ）前に至りて敢て道ふ所あるを得しむ。此れ天の、燕を哀れんで其孤を棄てざる所以也。今、秦は利を貪ぼるの心あつて、欲足る可からず。天下の地を盡し海内の王を臣とするに非ずんば、其意厭かじ。今、秦已に韓王を虜にして、盡く其地を納れ、又兵を舉げて南、楚を伐ち、北、趙に臨み、王翦、數十萬の衆に將として、漳鄴に距（フセ）ぎ、而して李信は太原、雲中に出づ。趙、秦を支ふる能はず、必ず入つて秦臣（ニ）たらん。趙入つて臣たらば、則ち禍

必ズ燕に至らん。燕は小弱にして數々兵に困しむ。今、計るに國を擧ぐるも以て秦に當るに足らず、諸侯は秦に服して、敢て合從する莫し。丹の私計、愚、以爲へらく、誠に天下の勇士を得て秦に使はし、闘するに重利を以てせば、秦王貪ぼり、其勢必ず願ふ所を得んと。誠に秦王を劫かすを得、悉く諸侯の侵地を反さしむる、曹沫の齊の桓公に與けるが若くならしめば、則ち大に善し、則ち不可ならば、因つて之を刺殺せんのみ。彼の秦の大將、兵を外に擅にして、內、亂有らば、則ち君臣相疑はん。其間を以て諸侯合從するを得ば、其の秦を破ること必せり。此れ丹の上願なれども、命を委する所人を知らず。唯だ荊卿、意を留めよと。之を久しうして、荊軻曰く、此れ國の大事なれば、臣の駑下、任使するに足らざるを恐ると。太子前み頓首して、固く請ふ、讓る毋れと。然る後(州軻)許諾す。是に於て荊軻を尊んで上卿と爲し、上舍に舍せしむ。太子、日に門下に造り、太牢を供へ、異物を具へ、ッ間に車騎美女を進め、荊軻の欲する所を恣にせしめ、以て其意に順適す。之を久しうして、荊軻未だ行く意あらず。

秦の將王翦、趙を破り、趙王を虜にし、盡く其地を收入して、兵を進め北、地を略して、燕の南界に至る。太子丹恐懼し、乃ち荊軻に請うて曰く、秦の兵旦暮(朝カ曉カニトノ義)易水を渡らば、則ち長く足下に侍せんと欲すと雖も、豈に得可けんやと。荊軻曰く、太子の言微きも、臣之を謁げんを願ふ。今行くとも信毋くんは、則ち秦未だ親しむ可からざる也。夫の樊將軍は、秦王之を金千斤、邑萬家に購ふ。誠に樊將軍の首と、燕の督亢の地圖とを得て、秦王に奉獻せば、秦王必ず說んで臣を見ん。臣乃ち以て報ゆるあるを得んと。太子曰く、樊將軍窮困し、來つて丹に歸す。丹、己の私を以てして長者の意を傷るに忍びず。願はくは足下更に之を慮れと。荊軻、太子の忍びざるを知り、乃ち遂に私に樊於期に見えて曰く、秦の將軍を遇する、深しと謂ふ可し。父母宗族皆爲めに戮沒(殺戮沒收)せらる。今又聞く、將軍の首を金千金、邑萬家に購ふと。將に奈何せんとすると。於期、天を仰いで太息し涕を流して曰く、於期、之を念ふごとに、常に骨髓に痛む。顧ふに計の出づる所を知らざる耳と。荊軻曰く、今、一言以て燕國の患

を解き、將軍の仇を報ゆ可き者あり、何如と。於期乃ち前んで曰く、之を爲す奈何と。荆軻曰く、願はくは將軍の首を得て以て秦王に獻せん。秦王必ず喜んで臣を見ん。臣、左手に其袖を把り、右手に其匈(胸)を揕(サ)さん。然らば則ち將軍の仇報いて、燕陵がるゝの愧除かん。將軍、豈に意あるかと。樊於期、偏袒(片肩脱ガル也)扼腕(腕ヲ握ル也)して進んで曰く、此れ臣の日夜、切齒(齒ヲクヒシバル)腐心するところ、乃ち今、教を聞くを得たりと。遂に自刎す。太子之を聞くや、馳せ往いて、屍に伏して哭すること極めて哀し。既に已に奈何ともす可からず。乃ち遂に樊於期の首を函に盛つて之を封ず。是に於て太子豫め天下の利匕首を求めて、趙人徐夫人(男子名ノ)の匕首を得、之を百金に取り、工(工人)をして藥(毒藥)を以て之を燂(ト)めしめ、以て人を試むるに、切(少タ)創(口ノ)血、縷(糸ニ)筋を濡(ス程)は流(ス)出せば、人立(クチドコロ)に死せざる者なし。乃ち裝うて爲めに荆卿に遣(オク)る。燕國に勇士秦舞陽あり、年十三、人を殺す。人敢て忤(サカ)ひ視ず。乃ち秦舞陽をして荆軻(ノ)副たらしむ。荆軻、待つて與に俱にせんと欲する所(ノ)人あり。其人遠きに居て未だ來らざるに、治行を爲す(旅裝調ヒシナリ)。之を頓(ヒバク)して

未だ發せず。太子之を遲しとして、其改悔せんを疑ひ、乃ち復た請うて曰く、日已に盡く。荆卿豈に意ありや。丹請ふ先づ秦舞陽を遣はすを得んと。荆軻怒り太子を叱して曰く、何ぞや太子の遣はすとは。往いて反らざる者は豎子(秦舞陽ヲ指ス)也。且つ一匕首を提げて不測の彊秦に入る。僕が留まる所以は、吾が客を待つて與に俱にせんとすればなり。(而ルニ)今、太子、之を遲しとす。請ふ辭決(辭訣シテ出立)せんと。遂に發す。太子及び賓客の其事を知る者、皆白衣冠(葬禮ニ用フルモノニシテ以テ之ヲ送ル。神ヲ祭ル也)して道を取る。高漸離、筑を擊ち、荆軻和して歌ひ、變徵(チ)の聲(悲聲)を爲す。士皆涙を垂れて涕泣す。又前んで歌うて曰く、風蕭蕭(風ノ音)として易水寒し。壯士一たび去つて復た還らずと。復た羽聲(怒聲)を爲して忼慨(慷慨)す。士皆目を瞋(イカ)らし、髮盡く上つて冠を指す。是に於て荆軻、車に就いて去る。終に已に顧みず。遂に秦に至り、千金の資幣物を持し、厚く秦王の寵臣中庶子蒙嘉に遺る。嘉爲めに先づ秦王に言つて曰く、燕王誠に大王の威を振怖し、敢て兵を擧げ以て軍吏に逆はず、國を擧げ内臣と爲つて、

諸侯の列に比び、貢職を給すること郡縣の如くにして、先王の宗廟を奉守するを得んを願ひ、恐懼して敢て自ら陳せず、謹んで樊於期の頭を斬り、及燕の督亢の地圖を獻じ、函封して、燕王、庭に拜送し、使をして大王に以聞せしむ。唯だ大王之に命せよと。秦王之を聞いて大に喜び、乃ち朝服して九賓（周禮ノ九儀）を設け、燕の使者を咸陽宮に見る。荊軻、樊於期の頭（ノ入ツタ）函を奉げ、而して秦舞陽、地圖の匣を奉げ、次を以て進む。陛（キザハシ）に至るや、秦舞陽、色變じ振恐す。群臣之を怪しむ。荊軻、舞陽を顧みて笑ひ、前み謝して曰く、北蕃蠻夷の鄙人、未だ嘗て天子を見ず、故に振慴す。願はくは大王少しく之を假借し、使を前に畢ふるを得しめよと。秦王、軻に謂つて曰く、舞陽が持つ所の地圖を取れと。軻既に圖を取り之を奏す。秦王、圖を發く。圖窮まつて匕首見はる。因つて左手に秦王の袖を把りて、右手に匕首を持つて之を拾す。未だ身に至らず。秦王驚き、自ら引いて起つ。王袖絶つ。劍を拔く。劍長し。其室（鞘）也を操る。時に惶急にして、劍堅し。故に立（クチドロ）に拔く可からず。荊軻、秦王を追ふ。秦王、柱を

環つて走る。群臣皆愕く。卒（兵）として不意に起り、蓋く其度を失ふ。而して秦の法、群臣殿上に侍（シヘ）る者は、尺寸の兵（兵刃）を持つを得ず、諸郎中は兵（兵刃）を執つて、皆殿下に陳（陣）也し、詔ありて召すに非ざれば、上るを得ず。今急時に方り、下の兵を召すに及ばず。故を以て荊軻乃ち秦王を追ふ。而して卒かに惶急にして、以て軻を擊つもの無し。而して手を以て其に之を搏つ。是の時、侍醫夏無且、其の奉ずる所の藥囊を以て荊軻に提（ナゲウ）つ。秦王方に柱を環つて走る、卒かに惶急にして、爲す所を知らず。左右乃ち曰く、王、劍を負へ（劍ヲ背ヘバ拔キ易キ也）と。秦王劍を負ひ、遂に拔いて以て荊軻を擊ち、其左股を斷る。荊軻廢（タフ）る。乃ち其匕首を引き、以て秦王に擿（ナゲウ）也つ。中らず。桐柱（銅柱）に中る。秦王、復た軻を擊つ。軻、八創を被る。軻自ら事の就らざるを知り、柱に倚つて笑ひ、箕踞（兩足ヲ前ニ投ゲ出シテ箕ノ如クスルヲ謂フ）して以て罵つて曰く、事の成らざりし所以は、以て生かして之を劫かし、必ず約契を得て以て太子に報せんと欲したればなり也。是に於て左右既に前んで軻を殺す。秦王怡ばざるもの良久し。已にして功を論じて群臣を賞し、及び坐（連坐）に當

る者各々差あり。而して夏無且に黄金二百鎰を賜うて曰く、無且、我を愛す、乃ち藥囊を以て荆軻を提てりと。是に於て秦王大に怒り、益々兵を發して趙に詣らしめ、王翦の軍に詔して以て燕を伐ち、十月にして薊城を拔く。燕王喜、太子丹等、盡く其精兵を率ゐ、東、遼東を保つ。秦の將李信、燕王を追擊すること急なり。代王嘉乃ち燕王喜に書を遺つて曰く、秦の尤も燕を追ふ急なる所以は、太子丹の故を以て也。今、王、誠に丹を殺し之を秦王に獻せば、秦王必ず解けて、燕社稷幸に血食するを得んと。其後李信、丹を追ふ。丹、衍水川名の中に匿る。燕王乃ち使をして太子丹を斬らしめ、之を秦に獻せんと欲す。秦、復た兵を進め之を攻む。後五年、秦、卒に燕を滅ぼし、燕王喜を虜にす。其明年、秦、天下を幷せ、號を立て、皇帝と爲る。

是に於て秦、太子丹、荆軻の客を逐ふ。皆亡ぐ。高漸離、名姓を變じ、人の爲めに庸保期ヲ約シテ人ニ傭ハル、也し、匿れて宋子縣名に作傭作す。之を久しうして、作に苦しむ。一日其家の堂上の客の筑を擊つを聞き、傍徨心迷フ也として去る能はず、毎ニ言を出して曰く、彼れ善

所キあり、不善善カラヌ所ありと。從者、以て其主に告げて曰く、彼の庸傭人乃ち音を知り、竊に音聲ノ是非を言ふと。家丈人長老ノ稱召し前メて筑を擊たしむ。一坐ノ者善しと稱し、酒を賜ふ。而して高漸離念ふ、久しく隱れ畏約畏縮節約するも窮まる時なけんと。乃ち退いて、其裝匣の中より筑と其善衣晴著とを出し、容貌を更めて前む。坐客を舉げて皆驚き、下つて與に抗禮對等ノ禮し、以て上客と爲し、筑を擊つて歌はしむ。客、流涕して去らざる者なし。宋子縣中ノ者傳へて之を客とす。秦の始皇に聞ゆ。秦の始皇、召して見る。人識る者あり、乃ち曰く、高漸離也と。秦の皇帝、其の善く筑を擊つを惜み、重んじて之を赦し、乃ち其目を矐嫐也べて瞽者ト、ナシ、筑を擊たしむ。未だ嘗て善しと稱せずんばあらず。稍ク益々之を近づく。高漸離乃ち鉛を以て筑中に置き、復た進み近くを得、筑を擧げて秦の皇帝を朴撲也つ。中らず。是に於て遂に高漸離を誅し、終身復た諸侯の人客を近づけず。魯勾踐、已に荆軻の秦王を刺せるを聞き、私に曰く、嗟乎惜しいかな、其の刺劍の術を講せざりしや。甚しいかな、吾の人を知らざるや。曩者吾之を叱す、彼乃

ち我を以て人に非ずと爲しならんと。

太史公曰く、世言ふ、荊軻、其の太子丹の命を稱するや、天は粟を雨らし、馬は角を生じたりきと。太だ過れり。又言ふ、荊軻、秦王を傷けたりと。皆非也。始め公孫季功、董生（董仲舒）は、夏無且と游び（ケレ、パ）、具に（ツブサ）其事を知り、余が爲めに之を道ふこと是（如述）の如し。曾沫より荊軻に至るまで五人、此れ其義或は成り或は成らず、然れども其の意を立つる較然（明カナル也）として、其志を欺かず。名ヲ後世に垂る、豈に妄ならん哉。

李斯列傳 第二十七

李斯は、楚の上蔡の人也。年少き時、郡の小吏と爲り、（或時）吏舍の厠中の鼠、不潔（穢也）を食ひ、人犬に近き、數々之に驚恐するを見る、（又或時）斯、倉に入りて、倉中の鼠、積粟を食ひ、大廡（軒也）の下に居り、人犬（ニ害セラル、）の憂を見ざるを觀る。是に於てか李斯乃ち歎じて曰く、人の賢不肖は、譬へば鼠の如く、自ら處（ク）る所に在る耳と。乃ち荀卿に從ひ、帝王の術を學ぶ。學已に成る。楚王の事ふるに足らずして、六國皆弱く、爲めに功を建つ可き者無きを度り、西、秦に入らんと欲す。荀卿に辭して曰く、斯聞く、時を得れば怠る無かれと。今、萬乘方に爭ふの時（ニシテ）、游者（游說者）事（諸侯ノ國事ヲ）を主る。今、秦王、天下を呑み帝と稱して治めんと欲す、此れ布衣馳騖（バウ 獨ホ奔走スルノゴトシ）するの時にして、游說者の秋也。卑賤の位に處りて計つて（榮達ヲ）爲さゞる者は、此れ禽鹿（禽獸）肉を視ながら人ノ面して能く彊行する（利ヲ視テセズ強ヒテ人間ラシク裝フヲ謂フ）者耳。故に詬（ハヂ）は卑賤より大なるは莫くして、悲は

窮困より甚しきは莫し。久しく卑賤の位、困苦の地に處り、世を非りて利を惡み、自ら無爲に託す。此れ士の情に非ざる也。故に斯將に西、秦王に說かんとすと。

秦に至れば、莊襄王卒するに會ふ。李斯乃ち求めて秦の相文信侯呂不韋の舍人と爲る。不韋之を賢とし、任じて以て郎官と爲す。李斯因つて以て秦王說くを得たり。秦王に說いて曰く、晉人小人は、其幾機を去り失、大功を成す者は、瑕釁に因つて附ケ入テル也遂に之を忍ぶ敢テ爲スに在り。昔者秦の穆公の霸たる、終に東、六國を幷せざりしは、何ぞや。諸侯尙ほ衆く、周德未だ衰へず、故に五伯迭に興り、更々周室を尊びたればなり。而ルニ秦の孝公より以來は、周室卑微にして、諸侯相兼ね、關東、六國となる。秦の、勝に乘じ諸侯を役する、蓋し六世なり。今諸侯の秦に服する、譬へば郡縣の若し。夫れ秦の彊、大王の賢を以てすれば、由猶ほ竈上の騷除掃除のごとく、以て諸侯を滅ぼし、帝業を成し、天下の一統を爲すに足る。是れ萬世の一時也機失フ可カラザルチイフ。今怠つて急に就さず、諸侯復た彊く、相聚り從を約せば、黃帝の賢ありと雖も、幷す

る能はざる也と。秦王乃ち斯を拜し長史と爲し、其計を聽いて、陰に謀士を遣り、金玉を齎持し以て諸侯に游說せしむ。諸侯の名士の、下すに財を以てす可き者は、厚く遺つて之に結び、肯んせざる者は、利劍ヲ以テ之を刺し、其君臣の計を離す。秦王乃ち其良將をして其後に隨はしむ。

秦王、斯を拜して客卿と爲す。會々韓の人鄭國、來つて秦を間し以て注溉の渠田ニ水ヲ注ゲ爲メを作る。已にして覺はる。秦の宗室大臣皆秦王に言つて曰く、諸侯の人の來つて秦に事ふる者は、大抵其主の爲めに秦に游ビ間する耳。請ふ一切客を逐はんと。李斯議せられて亦逐ヒ拂ハレントスル者ノ數ノ中に在り。斯乃ち上書して曰く、臣聞く、吏、客を逐ふを議すと。竊に以爲へらく過てりと。昔繆公は士を求めて、西、由余を戎に取り、東、百里奚を宛に得、蹇叔を宋に迎へ、不豹、公孫支を晉に求む。此五者は、秦に產せずして、繆公之を用ひ、國を幷すること二十、遂に西戎に霸たり。孝公は商鞅の法を用ひ、風を移し俗を易へ、民以て殷盛、國以て富彊、百姓、用を樂しみ、諸侯親服し、楚魏

の師を獲、地を擧ぐること千里、今に至るまで治彊なり。惠王は張儀の計を用ひ、三川の地を拔き、西、巴蜀を幷せ、北、上郡を收め、南、漢中を取り、九夷を包ね、鄢郢を制し、東、成皐の險に據り、膏腴の壤を割き、遂に六國の從を散じ、之をして西面して秦に事へしめ、功施して今に到る。昭王は范雎を得、穰侯を廢し、華陽を逐ひ、公室を彊くし、私門を杜ぎ、諸侯を蠶食し、秦をして帝業を成さしむ。此四君は、皆客の功を以てす。此に由つて之を觀れば、客何ぞ秦に負かんや。向に四君をして客を却けて內れず、士を疏んじて用ひざらしめば、是れ國をして富利の實無くして、秦をして彊大の名無からしめたりしならん。今、陛下、昆山の玉を致し、隨和の寶あり、明月の珠を垂れ、太阿の劍を服し、纖離（駿馬ノ名）の馬に乘り、翠鳳の旗（翠羽ヲ以テ鳳形ヲ爲リタルヲ旗飾トセル旗）を建て、靈鼉（龍ニ似タルモノ）の鼓（鼉ノ皮ニテ張リシ鼓）を樹つ。此數寶は、秦、一をも生せずして、陛下之を說ぶは、何ぞや。必ず秦國の生せし所ノモノにして然る後可ならば、則ち是れ夜光の璧は朝廷に飾らず、犀象の（骨角ニテ作レル）器は玩好ノ具とならず、鄭衞の女は後宮に充てずして、駿良駃（ケツ）

騠（ケイ名馬）は外廐に實たず、江南の金錫は用を爲さず、西蜀の丹青は采を爲さじ。後宮を飾り、下陳（後列トイハンガ如シ奥仕ヘナリ）に充て、心意を娛ましめ、耳目を說ばす所以の者、必ず秦に出で、然る後可ならば、則ち是れ宛珠（隨珠）の簪、傅璣の珥（璣（圓カラヌ珠）ヲ傅（附）ケタ珥（ミヽダマ））、阿縞（齊ノ東阿ノ縞ヨリ出ツル紹帛也）の衣、錦繡の飾は、王ノ前に進まずして、俗（土地風俗）に隨つて雅化する佳冶窈窕（ヤサシカ）たる趙女は、王側に立たじ。夫れ甕（ミカ）を擊ち缶（ホトギ）を叩き、箏を彈じ髀（股）を搏ちて、歌呼嗚嗚（歌フ聲）として耳目を快うする者は、眞に秦の聲也。鄭衞ノ二國、桑間ノ歌、昭（紹）虞武象（聖人ノ作リシ正樂ノ名）は、異國の樂也。今、甕を擊ち缶を叩くを棄てゝ、鄭衞に就き、箏を彈ずるを退けて、昭虞を取る。是の若きは何ぞや。快意、前に當り觀に適へば而已。今、人を取るは則ち然らず、可否を問はず、曲直を論せず、秦に非ざる者は去り、客たる者は逐ふ。然らば則ち是れ重んずる所のものは、色樂珠玉に在つて、輕んずる所の者は、人民に在るなり。此れ海內に跨り諸侯を制する所以の術に非ざるなり。臣聞く、地廣ければ粟多く、國大なれば人衆く、兵彊ければ則ち士勇むと。是を以て太山は土

壤を讓らず、故に能く其大を成し、河海は細流を擇ばず、故に能く其深を就し、王者は衆庶を却けず、故に能く其德を明かにす。是を以て地に四方無く、民に異國無く、四時、美を充て、鬼神、福を降す。此れ五帝三王の敵無き所以也。今乃ち黔首人民を棄てゝ以て敵國を資け、賓客を却けて以て諸侯を業け、天下の士をして退いて敢て西秦に向はず、足を裹んで秦に入らざらしむ。此れ所謂寇に兵を藉して盜に糧を齎す者也。夫れ物、秦に產せずして、而寶とす可き者多く、士、秦に產せずして、而忠を願ふ者衆し。今、客を逐うて以て敵國を資け、民を損して以て讎を益し、內、自ら虛にして、外、怨を諸侯に樹う。國の危ふきなきを求むとも、得可からざらんと。

秦王乃ち逐客の令を除き、李斯の官を復し、卒に其の計謀を用ふ。李斯官、廷尉に至る。二十餘年、竟に天下を幷せ、主を尊んで皇帝となし、斯を以て丞相と爲す。郡縣の城を夷げ、其兵刃を銷し、復た用ひざるを示す。秦をして尺土の封無く、子弟を立てゝ王と爲し、功臣を諸侯と爲さゝらしめしは、後に戰攻の患無からしめんとてなり。

始皇三十四年、咸陽宮に酒を置す。博士僕射ナル周青臣等、始皇の威德を頌稱す。齊人淳于越進み諫めて曰く、臣之を聞く、殷周の王たる千餘歲、子弟功臣を封じ、自ら支輔と爲せりと。而今、陛下は海內を有つて、子弟は匹夫たり。卒に田常や六卿智氏、范氏、中行氏、韓氏、魏氏、趙氏の如キ患あるも、臣に輔弼ノ臣なくば、何を以てか相救はんや。事、古を師とせずして、能く長久なる者は、余聞ク所に非ざる也。今、青臣等又面諛顏色ヲ覗ヒ阿諛スル也して以て陛下の過を重ぬ、忠臣に非ざる也と。始皇、其議を丞相に下す。丞相、其說を謬れりとし、其辭を紬繹同ジトく。乃ち上書して曰く、古者天下散亂し、能く相一にするノ莫し。是を以て諸侯並び作り、語皆古を道ひ以て今を害とし、虛言を飾り以て實を亂し、人は其の私に學ぶ所を善しとし、以て上の建立する所を非れり。今、陛下天下を幷有し、白黑を辨つて、一尊一人ノ尊を定む。而るに私學は乃ち相與に法敎の制を非り、令の下るを聞けば、即ち各々其私學を以て之を議し、入つては則ち心に非り、出でては則ち巷に議し、主を非りて以て名を爲し、趣を異にして以て高しと爲し、群

下を率ゐて以て訪を造す。此の如くにして禁せずんば、則ち主勢、上より降り、蔑與、下に成らん。之を禁ずる便なり。臣請ふ諸の文學詩書百家の語ある者は、獨除ノ少シ（城ノ周圍ヲ掃除スル懲役人）て之を去らん。令到り、三十日に滿ちて（其等ノ書物ヲ）去らずんば、（其人々ヲ抑ヘ）黥入盛して城旦（懲役）と爲さん。去らざる所の者（書物）は、醫藥卜筮種樹の書のみ。若し學ばんと欲するモノあらば、吏を以て師と爲さんと。

始皇、其議を可とし、詩書百家の語を收め去り、以て百姓を愚にし、天下をして古を以て今を非る無からしむ。法度を明かにし、律令を定むる、皆始皇を以つて起る。文書制令を同じうし、離宮別館を治めて、天下に周徧（アマネク）し、明年、又巡狩し、外、四夷を攘ふ、斯（李斯）皆力あり。斯の長男由、三川の守と爲り、諸男は皆秦の公主に尙（天子ノ女ニ配偶スルヲ謂フ）し、女は悉く秦の諸公子に嫁す。三川の守李由、咸陽に告歸（休暇ヲ乞ウテ歸省スル也）す。李斯、家に置酒す。百官の長、皆前んで壽を爲し、門廷の車騎、千を以て數ふ。李斯喟然として歎じて曰く、嗟乎、吾之を荀卿に聞く、曰く、物は太だ盛なるを禁ずと。夫れ斯

は乃ち上蔡の布衣、閭巷（村里）の黔首なり。上、其の愚下を知らず、遂に擢んで、此に至る。當今人臣の位、臣の上に居る者なし、富貴極まると謂ふ可し。物極まれば則ち衰ふ。吾未だ愚を稅（解ト也）く所（休息ヲ云）を知らざる也と。

始皇三十七年十月、行（行幸）し出でて會稽に游び、海上に並（ナラ）うて、北、琅邪（ラウヤ）に抵る。丞相斯、中車府令（ナリ）趙高、符（ワリ）璽（印璽）令の事を兼行し、皆從ふ。始皇三十餘子あり、長子扶蘇、數々上を直諫するを以て、上、兵を上郡に監せしむ。蒙恬、將たり。少子胡亥愛せられ、從はんと請ふ。上之を許す。餘子從ふモ莫し。其年七月、始皇帝、沙丘に至り病むこと甚し。趙高をして書を爲り公子扶蘇に賜はしめて曰く、兵を以て蒙恬に屬し、喪と咸陽に會して葬れと。書已に封じて、未だ使者に授けず、始皇崩ず。書及び璽は皆趙高の所に在り。獨り子胡亥、丞相李斯、趙高及び幸（セラレカ）宦者五六人のみ、始皇の崩ぜしを知り、餘の群臣は皆知る莫き也。李斯以爲へらく、上、外に在りて崩じ、眞の太子なしと。故に之を祕す。始皇を載（オ）いて轀輬車（窓牖ノ開閉ニヨツテ溫涼窓ノ如クナル廣大ニシテ羽飾附ノ車）中に居

き、百官、事を奏し、食を上つること故の如くし、宦者輙ち轀輬車中より諸の奏事を可く。趙高因つて扶蘇に賜ふ所の璽書を留めて、公子胡亥に謂つて曰く、上崩ずるも、詔して諸子を封王する無くして、獨り長子に書を賜ふ。長子至らば、即ち立つて皇帝となりて、子は尺寸の地無けん。之を爲す奈何と。胡亥曰く、固より也。吾之を聞く、明君は臣を知り、明父は子を知ると。父、命を捐てゝ諸子を封せず。何ぞ言ふ可き者あらんと。趙高曰く、然らず。方今天下の權天下ノ存亡は、子と高及び丞相とノ意ノ儀に在る耳。願はくは子之を圖れ。且つ夫れ人を臣とすると、人に臣とせらるゝと、人を制するとゝ、人に制せらるゝとは、豈に同日にして道ふ可けんやと。胡亥曰く、兄を廢して弟を立つるは、是れ不義也。父の詔を奉ぜずして死を畏るゝは、是れ不孝也。能薄くして材譾淺也く、强ひて人の功に因るは、是れ不能也。三者は逆德なり、天下服せず、身殆んど傾危し、社稷血食せざらんと。高曰く、臣聞く、湯武は其主を殺して、天下、義と稱し、不忠と爲さず、衞君は其父を殺して、衞國、其德を載き、孔子は之を書ニ著

はし、不孝と爲さりきと。夫れ大行は小謹せず、盛德は鮮讓せず、鄉曲鄉里(ムラサト)ニモ各々宜しき所ありて、百官は功を同じうせず。故に小を顧みて大を忘るれば、後必ず害あり、狐疑猶豫すれば、後必ず悔あり、斷じて敢て行へば、鬼神も之を避け、後成功あり。願はくは子之を遂げよと。胡亥喟然として歎じて曰く、今、大行天子ノ崩御ヲ謂フ未だ發表せず、喪禮未だ終へず、豈に宜しく此事を以て丞相に干むべけんやと。趙高曰く、時なるかな、時なるかな。間、謀るに及ばず迫ニ容レザルヲイフ、粮を贏ひ馬を躡らし、唯だ時に後るゝを恐ると。胡亥既に高の言を然りとす。高曰く、丞相と謀らずば、恐らくは事成る能はじ。臣請ふ子の爲めに丞相と之を謀らんと。高乃ち丞相斯に謂つて曰く、上崩じ、長子に書を賜ひ、喪と咸陽に會せしめて立てゝ嗣と爲す。書未だ行かず、今、上崩じ、未だ知る者あらず。長子に賜ふ所の書、及び符璽は皆胡亥の所に在り。太子を定むる、君侯と高との口に在る耳。事將に何如せんとすると。斯曰く、安くにか亡國の言を得たる。此れ人臣の當に議すべき所に非ざる也と。高曰く、君侯自ら料るに能

オ能蒙恬に孰與ぞ。功の高き、蒙恬に孰與ぞ。遠を謀つて失せざる、蒙恬に孰與ぞ。天下に怨なき、蒙恬に孰與ぞ。長子、固故として之を信ずる、蒙恬に孰與ぞと。斯曰く、此五者、皆蒙恬に及ばず。而して君の之を責むる何ぞ深きやと。高曰く、高は固内官の厮役賤役也。幸に刀筆の文を以て進んで秦宮に入るを得、事を管ることこと二十餘年なり、未だ嘗て秦の免能したる丞相功臣の、封の二世に及びたる者あるを見ざる也、卒に皆以て誅亡せらる。皇帝の二十餘子、皆君の知る所なり。長子は剛毅にして武勇、人を信じて士を奮はす。長子位に即かば、必ず蒙恬を用ひて丞相と爲さん。君侯終に卿ナ得テ通侯列侯の印を懷きて鄉里に歸らるを得ざるや明かなり。高、詔を受け胡亥を教習し、學ばしむるに法事を以てすること數年、未だ嘗て過失を見ず、慈仁篤厚、財を輕んじ士を重んじ、心に辯にして口に訥納也に、禮を識し士を敬す。秦の諸子未だ此に及ぶ者あらず、以て嗣と爲す可し。君計つて之を定めよと。斯曰く、君其れ位に反れ。斯は主の詔を奉じ、天の命を聽かん。何をか慮つて之れ定む可きやと。高曰く、安きは危く

す可きなり、危きは安くす可きなり天下ニ一定ノ安危ナシ唯之ヲ定ムル人アリテ後安シ。安危定まらずんば、何を以てか聖智を貴ばんと。斯曰く、斯は上蔡の閭巷小里の布衣なりしを、上幸に擢んで、丞相とし、封じて通侯となす、又子孫皆尊位重祿に至りたるは、故將に國ノ存亡安危を以て臣に屬せんとしたれば也。豈に負く可けんや。夫れ忠臣は死を避けて庶幾他望するをせず、孝子は勤勞して危きを見るをせず。人臣は各々其職を守る而已。君其れ復た言ふ勿れ。將に斯をして罪を得しめんとすと。高曰く、蓋し聞く聖人は遷徙シテ常無く、變に就ひて時に從ひ、末を見て本を知り、指ザスを觀て歸着スル所を視ると。物固より之れあり、安くんぞ常法を得んや。方今天下の權命、胡亥に繫る。而シテ高能く胡亥ノ志を得たり。且つ夫れ外より中を制する、之を惑と謂ひ、下より上を制する、之を賊と謂ふ、李斯、胡亥ヲ制セント欲スル。ト也其勢ヒナラザルヲ云フ故に秋霜降れば草花落ち、水搖動春ニ至リテ水解クルヲ云フすれば萬物作る、此れ必然の效也。君何ぞ見るの晚きと。斯曰く、吾聞く、晉ノ獻公は太子申生を易へて、獻公、惠公、文公三世安からず、齊桓齊桓公は兄弟小白ト公子糾位を爭うて、身死し戮僇と爲り、紂は

親戚を殺し、諫者に聽かず、國、丘墟と爲り、遂に社稷を危くせりと。三者は天に逆ひ、宗廟血食せず。斯は其れ猶ほ人たらんかな（人道ヲ守ルナイフ）、安くんぞ謀逆を爲すに足らんと。高曰く、上下合同すれば、以て長久なる可く、中外一の若くなれば、事、表裏なし。君、臣の計を聽かば、即ち長く封侯を有ち、世世孤と稱し、必ず喬松（王子喬赤松子）の如き孔墨（孔子墨子）の如き智あらん。今、此を釋て、從はずんば、禍、子孫に及び、以て寒心を爲すに足るものあらん。善者は禍に因つて福と爲す。君何れにか處ると。斯乃ち天を仰いて歎じ、涙を垂れ太息して曰く、嗟乎、獨り亂世に遭ひ、既に以て死する能はず、安くに命を託せんや（趙高ノ計ニ從ハズンバ身命ヲ託スル所ナクン）と。是に於て斯乃ち高に聽く。

高乃ち胡亥に報じて曰く、臣、太子の明命を請ひ奉じ、以て丞相に報ず、丞相斯、敢て命を奉せざらんやと。是に於て、乃ち相與に謀り、詐つて、始皇の詔を受けたりと爲し、丞相、子胡亥を立てゝ太子と爲す。更めて書を爲り、長子扶蘇に賜うて曰く、朕、天下を巡り、名山の諸神を禱祠して、以て壽命を延ぶ。今、扶蘇、將軍蒙恬と、

師數十萬を將ゐ以て邊に屯すること十有餘年、進んで前む能はず、士卒多く耗り、尺寸の功無きに、乃ち反つて數々上書して直言し、我が爲す所を誹謗し、能め歸つて太子たるを得ざるを以て、日夜怨望す。扶蘇、人の子と爲つて不孝なり。其れ劒を賜ふ。以て自裁（自殺）せよ。將軍恬、扶蘇と外に居ながら（之ヲ）匡正せず。宜しく其謀を知るべし。是（レ）人臣と爲つて不忠なり。其れ死を賜ふ。兵を以て裨將王離に屬せよと。其書を封ずるに皇帝の璽を以てし、胡亥の客をして書を奉じ扶蘇に上郡に賜はしむ。使者至る。書を發く。扶蘇泣いて、內舍に入り、自殺せんと欲す。蒙恬、扶蘇を止めて曰く、陛下、外に居り、未だ太子を立てず、臣をして三十萬の衆に將として邊を守らしめ、公子、監たり。此れ天下の重任也。今一使者來り、即ち自殺す、安くんぞ其の詐に非ざるを知らん。請ふ復び請はん。復び請うて後死するも、未だ晚（オソ）からざる也と。使者敗ら之を趣（ウナガ）す。扶蘇、人となり仁なり。蒙恬に謂つて曰く、父にして子に死を賜ふ、尙ほ安くんぞ復び請はんと。即ち自殺す。蒙恬肯て死せず。使者即ち以て吏に屬し、陽周

地名に繫ぐ。使者還り報ず。胡亥、斯、高等大に喜び、咸陽に至り、喪を發す。

太子立ち、二世皇帝と爲る。趙高を以て郎中令となし、常に内に侍り事を用ひしむ。

二世燕居安居し、乃ち高を召し與に事を謀り謂つて曰く、夫れ人生れて世間に居るや、譬へば猶ほ六驥を駟せて決隙を過ぐるがごとし其ノ疾ク過ギ易キヲ謂フ。吾既に已に君ト天下に臨む。耳目の好む所を悉し、我が心志の樂しむ所を窮め、以て宗廟を安んじて萬姓を樂しましめ、長く天下を有ち、吾が年壽を終へんと欲す。其道可ならんかと。高曰く、此れ賢主の能く行ふ所にして、昏亂の主の禁ずる所也。臣請ふ之を言ひ、敢て斧鉞の誅を避けじ。願はくは陛下少しく意を留めよ。夫れ沙丘の謀は、諸公子及び大臣皆焉を疑ふ。而して諸公子は盡く帝の兄にして、大臣は又先帝の置く所也。今、陛下初めて立つ。此れ其屬、意怏怏樂シマザル貌として皆服せず。恐らくは變を爲さん。且つ蒙恬は已に死したれども、蒙毅、兵を將ゐて外に居り。臣、戰戰栗栗として、唯だ終らざるを恐る。且つ陛下安くにか此樂を爲すを得んと。二世曰く、之を爲す奈何と。趙高曰く、法を

嚴にして刑を刻深にし、罪ある者をして相坐誅して、收族するに至らしめ、大臣を滅ぼして骨肉を遠ざけ、貧者は之を富まし、賤者は之を貴くし、盡く先帝の故臣を除去し、更めて陛下の親信する所の者を置いて之を近づけよ。此れ則ち陰德、陛下に歸し、害除いて姦謀塞がり、群臣陛下潤澤を被り厚德を蒙らざる莫く、陛下則ち枕を高うし志を肆にして寵樂せん。計此れに出づるもの莫けんと。二世、高の言を然りとし、乃ち更めて法律を爲る。是に於て群臣諸公子、罪あれば、輒ち高に下して之を鞫治拷問せしむ。大臣蒙毅等を殺し、公子十二人を咸陽の市に僇死僇殺し、十公主を杜に磔死磔殺ハリツケニシテ殺スル也し、財物を縣官に入る。相連坐する者勝げて數ふ可からず。公子高、奔らんと欲す、收族せられんを恐れ、乃ち上書して曰く、先帝恙無かりし時、臣入つては則ち食を賜ひ、出でては則ち輿に乘り、御府の衣、臣之を賜ふを得、中廄の寶馬、臣之を賜ふを得たり。臣當に從死殉死すべくして能はず、人の子と爲つて不孝、人の臣と爲つて不忠。不忠なる者は名の以て世に立つなし。臣請ふ從死せん。願はくは酈山の足に葬

れ。唯だ上、幸に之を哀憐せよと。書上つる。胡亥大に說び、趙高を召して之を示して曰く、此れ急と謂ふ可きかと（刑急ニシテ或ハ變ヲ激スベキカノ意）。趙高曰く、人臣、死を憂へて暇あらざるに當り、何の變亂をか之れ謀るを得んと。胡亥、其書を可とし、錢十萬を賜ひ以て葬る。法令誅罰、日に益々刻深なり。群臣人人自ら危ふみ、畔かんと欲する者衆し。又阿房の宮を作り、直馳道（直道馳道）を治め、賦斂愈々重く、戍徭（戍役）已むなし。是に於て楚の戍卒（ナル）陳勝、吳廣等、乃ち亂を作して、山東に起り、傑俊相立ち、各々自ら置いて侯王と爲り秦に叛く。兵、鴻門に至つて却く。

李斯數々帝（ノ）間を請うて諫めんと欲すれども、二世許さず。而して二世、李斯に責問して曰く、吾、私議あり、而して韓子に聞く所ありたり、曰く、堯の天下を有つや、ノ堂高き三尺、采椽（樸（イチキノ木）ノ椽（タルキ））斲（削）らず、屋根ニ茅茨（用ヒシ）（カヤ）翦（切）らず、逆旅の宿（旅宿）と雖も、此より勤儉約ならず。冬日は鹿裘（鹿ノ皮衣）し、夏日は葛衣し、粢糲の食（麤粟飯）、藜藿（豆ノ葉）の羹、土匏（土瓢、土製ノ飯器也）に飯ひ、土鉶（土製ノ羹器）に啜る、監門（門番）の養（生活）と雖も、此より殺薄（カスノ薄キ）からず。

禹は龍門（山）を鑿ち、大夏（河）を通じ、九河を疏（疏通）し、九防（九個ノ堤防）を曲らし、淳（滯セル）水を決し、之を海に致して、其ノ股に胈（小）毛無く、脛に毛無く、手足胼胝（ヘンチ）（タコガ出來）、面目黎黑（日ニ焼ケテ黑キナリ）、遂に以て外に死し、會稽に葬らる、臣虜の勞も、此より烈しからず。然らば則ち夫の天下を有つに貴ぶ所のものは、豈に形を苦しめ神を勞し、身、逆旅の宿に處り、口、監門の養（食物）を食ひ、手、臣虜の作（勞動）を持するを欲するにあらんや。此れ不肖人の勉むる所にして、賢者の務むる所には非ざるなり。彼の賢人の天下を有つや、專ら天下を用つて己に適せしむる而已。此れ天下を有つを貴ぶ所以也。夫の所謂賢人は、必ず能く天下を治めんとす。故に吾は志を肆にし欲を廣め、長く天下を享けて害無きを願はんとす。之を爲す奈何と。

李斯の子ノ由、三川の守たり、群盜吳廣等、西、地を略し過ぎ去れども、禁ずる能はず、章邯以（已）（ステ）に廣等の兵を破逐し、使者、三川を覆案（反覆吟味スルナリ）して相屬く、斯を誚讓す

らく、三公の位に居ながら、如何ぞ盜をして此の如くならしむると。李斯恐懼すれども、爵祿を重んじ、出づる所を知らず。乃ち二世の意に阿り、容れらるゝを求めんと欲し、書を以て對へて曰く、夫れ賢主は、必ず且に能く道を全うして督責（明ナ察シ刑罰ヲ以テ責ムル）の術を行はんとする者也。之を督責すれば、則ち臣（タル）者敢て能を竭し以て其主に徇（シタガ）はずんばあらず。此（カ）く臣主の分定まり、上下の義明かなれば、則ち天下の賢不肖、敢て力を盡し任を竭し以て其君に徇はざるは莫し。是の故に主獨り天下を制して、制せらるゝなく、能く樂の極を窮む、（コレ）賢明の主也。察せざる可けんや。故に申子（申不害）曰く、天下を有つて恣睢（我儘）せざる、之を命（ナヅ）けて、天下を以て桎梏（足ガセ手ガセ）と爲すと曰ふ（申子）とは、他無し、督責する能はずして、顧（カヘ）つて其身を以て天下の民に勞する、堯禹の若く然り、故に之を桎梏と謂ふ也。夫れ申韓（申不害韓非子）の明術を修め、督責の道を行ひ、專ら天下を以て自適する能はずして、徒に務めて形を苦しめ神を勞し、身を以て百姓に徇ふは、則ち是れ黔首（黎民）の役にして、天下を畜ふ者に非ざる也、何ぞ貴ぶに足らんや。

夫れ人を以て己に徇へば、則ち己貴くして人賤しく、己を以て人に徇へば、則ち己賤しくして人貴し。故に人に徇ふ者は賤しくして、人の徇ふ所の者は貴し。古より今に及（ム）るまで、未だ然らざる者有らざる也。凡そ古の賢を尊びし所爲（ユエン）は、其の貴きが爲めにして、不肖を惡みし所爲は、其の賤しきが爲め也。而して堯禹は身を以て天下に徇（シタガ）ひし者、因つて隨つて之を尊べば、則ち亦賢を尊ぶ所爲の心を失ふ。夫れ大に繆（アヤマ）れりと謂ふ可し。之を桎梏と爲すと謂ふ、亦宜ならずや。是レ督責する能はざるの過也。故に韓子曰く、慈母に敗子（ヤクザ子息）ありて、嚴家に格虜（主人ニ抵抗スル奴隷）無し（韓子ノ語）とは、何となれば則ち能く罰の加ふる必すれば也。故に商君の法（デハ）、灰を道に棄つる者を刑す。夫れ灰を棄つるは薄罪にして、刑せらるゝは重罰也。彼の唯だ明主は能く深く輕罪を督するを爲す。夫の罪輕きも且つ督する深し、而るを況んや重罪あるをや。故に民敢て犯さざる也。是の故に韓子曰く、布帛尋常（其ノ少キヲ謂フ）なるも、庸人（普通ノ人ハ拾ッテ）釋てず、鑠金（美金）百鎰なるも、盜跖（韓子ノ語）搏らず とは、庸人の心、尋常の利を重んずる深くして、盜跖の欲淺き

に非ず、又盜跖の行を以て百鎰の重きを輕しと爲すにあらず。搏れば必ず手に隨つて刑せらるれば、則ち盜跖、百鎰を搏らず、而して罰必ずしも行はざるや、則ち庸人尋常をも釋てざるなり。是の故に城の高さ五丈なるも、樓季（古ノ捷足ノ人）輕々しく犯さゞる也、泰山の高さ百仞なるも、跛牂（ビッコノ羊飼）其上に牧す。夫れ樓季にして、五丈の限りを難んじ、豈に跛牂にして、百仞の高きを易しとせんや、隋（嗜殺）堅（平堅）の勢異なれば也。明主聖王の能く久しく尊位に處り、長く重勢を執つて、獨り天下の利を擅にする所以は、異道あるに非ず、能く獨斷して督責を審にし、深罰を必するにあり。故に天下敢て犯さゞる也。（而ルニ）今犯さゞる所以を務めずして、慈母の子を敗ふ所以を事とするは、則ち亦聖人の論を察せざるなり。夫れ聖人の術を行ふ能はざれば、則ち舍て、天下の役と爲る。（是レ）何事ぞや、衰れまざる可けんや。且つ夫れ儉節仁義の人、朝に立てば、則ち荒肆の樂輟み、諫說論理の臣、側に（居テ口チ）開けば、則ち流漫の志詘き、烈士節に死するの行ひ世に顯はるれば、則ち淫康の戾廢（タノシミスタレル）る。故に明主は能く此三者を外にして、獨り主術を操（アヤツ）りて以て聽從の臣を制して其明法を修む、故に身尊くして勢重きなり。凡そ賢主は、必ず將に能く世に拂（サカ）ひ俗に摩（ソム）きて、其の惡む所を廢し、其の欲する所を立てんとす。故に生きては則ち尊重の勢あり、死しては則ち賢明の謚ある也。是を以て明君は獨り斷ず、故に權、臣に在らざる也。然る後能く仁義の塗（途）を滅ぼし、馳說の口を掩ひ、烈士の行ひを困しめ、聰を塞ぎ明を拚ひ、內獨り視聽す。故に外、傾くるに仁義烈士の行ひを以てす可からずして、內、奪ふに諫說忿爭の辯を以てす可からず。故に能く犖然（超然）として獨り恣睢の心を行ふも、之に敢て逆ふもの莫し。此の若くして然る後、能く申韓の術を明かにして商君の法を脩めたりと謂ふ可し。法修まり術明かにして天下亂るゝものは、未だ之を聞かざる也。故に曰く、王道は約（簡約）にして操（ト）り易きも、唯だ明主能く之を行ふを爲すと。此の若きは、則ち督責の誠と謂ふ、則ち臣、邪無し、臣邪無ければ、則ち天下安し、天下安ければ、則ち主嚴尊なり、主嚴尊なれば、則ち督責必す、督責必すれば、則ち求むる所を得、求むる所を得れば、則ち國家

富む、國家富めば、則ち君、樂豐なり。故に督責の術設くれば、則ち欲する所得ざる無く、群臣百姓、過を救うて給らず、何の變か之れ敢て圖らん。此の若きは、則ち帝道備はる、而して能く君臣の術を明かにすと謂ふ可く、申韓復た生ずと雖も、加ふる能はざる也と。

書奏す。二世悅ぶ。是に於て督責を行ふ益々嚴なり。民に稅する深き者を明吏となす。二世曰く、此の若きは、則ち能く督責すと謂ふ可しと。刑者道に相半して、死人日に市に積堆を成す。人を殺す衆き者を忠臣と爲す。二世曰く、此の若きは、則ち能く督責すと謂ふ可しと。初め趙高、郎中令たり、殺す所及び私怨を報ゆる衆多なり。大臣の入朝して事を奏し之を毀惡せんを恐れ、乃ち二世に說いて曰く、天子の貴き所以は、但聲を聞いて群臣、其面を見るを得る莫きを以てなり、故に天子號して朕朕兆也未ダと現レザル也と曰ふ。且つ陛下は春秋に富めば弱年ニシテ生、先長キヲ謂フ未だ必ずしも盡く諸事に通せず。今朝廷に坐し、譴舉當らざる者あらば、則ち短を大臣に見さん。神明を天下に示す所以に非

ざる也。且く陛下深く禁中に拱し、臣及び侍中の法に習ふ者と事を待ち、事來らば以て之を揆れ。此の如くならば則ち大臣敢て疑事を奏せず、天下、聖主と稱せんと。二世其計を用ひ、乃ち朝廷に坐して大臣を見ず、禁中に居る。趙高常に中に侍して事を用ふ。事皆趙高に決す。

高、李斯以て言を爲すと聞き、乃ち丞相に見えて曰く、關東、群盜多し。今、上、急に繇役を發し阿房宮を治め、狗馬ノ如キ無用の物を聚む。臣諫めんと欲すれども欲スルノミニテ諫メザルハ、位賤しきが爲めなり。此れ眞に君侯の事なり。君何ぞ諫めざると。李斯曰く、固より也。吾之を言はんと欲すること久しきも、今時、上、朝廷に坐せず、上、深宮に居る。吾、言はんとする所の者あるも、傳ふ可からざる也。見えんと欲すれども間無しと。趙高謂つて曰く、君誠に能く諫めば、請ふ君の爲めに上の間を候ひ君に語げんと。是に於て趙高、二世の方に燕樂酒宴して婦女、前に居るを待ち、人をして丞相に告げしむ、上方に閒なり、事を奏す可しと。丞相、宮門に至り上謁す。此の如く

するもの三たび。二世怒つて曰く、吾常に問日多きに、丞相來らず。吾方に燕私すれば、丞相輒ち來つて事を請ふ。丞相豈に我を少(ワカ)とするか、且た我を固(固陋)とするかと。趙高因つて曰く、此の如きは殆ふし。夫の沙丘の謀、丞相與る。今、陛下、已に立つて帝たるも、丞相の貴は益さず。此れ其意亦地を裂いて王たるを望むならん。且つ陛下、臣に問はざれば、臣敢て言はざりしも、丞相の長男李由、三川の守たり、楚の盜陳勝等は、皆丞相の傍縣の子、故を以て、楚の盜公行し、三川を過ぐれども、城守して肯て擊たず。夫ノ(ミカ)高、其文書相往來すと聞けるも、未だ其の審なるを得ず、故に未だ敢て以聞せず。且つ丞相、外に居り、權、陛下よりも重しと。二世以て然りと爲す。丞相ノ(即)を案ぜんと欲すれども、其の審ならざるを恐れ、乃ち人をして三川の守ガ盜と通ずる狀を案驗せしむ。

李斯之を聞く。是の時二世、甘泉に在り、方に獬抵(カクテイ角抵、角力也)優俳(役者)の觀を作(ナ)す。李斯、見ゆるを得ず、因つて上書し趙高の短を言ふ。曰く、臣之を聞く、臣其君に疑はしき

は、國を危ふくせざる無く、妾其夫に疑はしきは、家を危ふくせざる無しと。今、大臣の陛下に於ける、利を擅にし害を擅にし、陛下と異なるなきあり。此れ甚だ便(ハナ)しからず。昔者(ムカシ)司城(姓)子罕(名)は宋に相として、身、刑罰を行ひ、威を以て之を行ひ、朞年にして遂に其君を劫かし、又田常は齊ノ簡公の臣となり、爵列、國に敵無く、私家の富、公家と均しく、惠を布き德を施し、下、百姓を得、上、群臣を得、陰に齊國を取り、獨人宰予を庭に殺し、即ち簡公を朝に弑し、遂に齊國を有てり。此れ天下の明かに知る所也。今、高、邪佚の志、危反の行あるは、子罕の宋に相たりしが如き也。私家の富は、田氏の齊に於けるが若きなり。田常子罕の逆道を兼ね行うて、陛下の威信を劫かす、其志、韓玘(イ)ガ韓安の相たりしが若きなり。陛下圖らずんば、臣、其の變を爲さんを恐るる也と。二世曰く、何ぞや。夫の高は故(モト)宦人也。然れども安きが爲めに志を肆にせず、危ふきを以て心を易へず、行を潔うし善を修め、自ら此に至らしめ、忠を以て進むを得、信を以て位を守る。朕實に之を賢とす。而るに君之を疑ふは、何ぞや。且つ

朕少うして先人を失ひ、識知する所なく、治民に習れず、而して君又老ゆ、朕天下と絶たんを恐る。朕、趙君に屬するに非ずんば、當に誰にか任ずべき。且つ趙君は人と爲り精廉彊力にして、下、人情を知り、上、能く朕に適ふ。君其れ疑ふ勿れと。李斯曰く、然らず。夫の高は故賤人也、理を識る無く、貪欲厭く無く、利を求めて止まず、勢を列ねて主に次ぎ、欲を求めて窮まりなし。臣故に曰く、殆ふしと。

二世、已に前に趙高を信ず。李斯の之を殺さんを恐れ、乃ち私に趙高に告ぐ。高曰く、丞相の患ふる所は獨り高のみ。高已に死せば、丞相即ち田常の爲し、所を爲さんと欲すと。是に於て二世曰く、其れ李斯を以て郎中令趙高に屬せよと。趙高、李斯を案治す。李斯、拘執束縛せられ、囹圄獄舍の中に居り、天を仰いで歎じて曰く、嗟乎、悲しい夫、不道の君、何ぞ計を爲す可けんや。昔者、桀、關龍逄を殺し、紂、王子比干を殺し、吳王夫差、伍子胥を殺す。此三臣は、豈に不忠なりしならん哉。然れども死を免かれず。身死するは忠する所の者其主ナリ云非なれば也。今、吾が智は三子に及ばずして、二世の無

道なるは、桀紂夫差に過ぐ。吾、忠を以て死するは宜なり。且つ二世の治、豈に亂れざらんや。日者其兄弟を夷げて自立し、忠臣を殺して賤人を貴び、阿房の宮を作爲し、天下に賦斂苛賦重斂す。吾、諫めざるに非ざる也、吾に聽かざりし也。凡そ古の聖王は、飲食に節あり、車器に數あり、宮室に度程あり、令を出し事を造すに、費を加へて民利に益無き者は禁ず。故に能く長久治安なりき。今、逆を昆弟兄弟に行ひ、其咎を顧みず、忠臣を侵殺して、其殃を思はず、大に宮室を爲り、厚く天下に賦し、其費を愛まず。三者已に行はれて、天下聽はず。今、反者已に天下の半を有てども、心尚ほ未だ寤らずして、趙高を以て佐輔佐となす。吾必ず、寇の咸陽に至り、麋鹿の朝に游ぶ國亡ビテを見んと。

是に於て二世乃ち高をして丞相の獄疑獄を案じ罪を治めしむ。斯與び子由が謀反の狀を責め、皆宗族賓客を收捕す。趙高、斯を治め、榜掠笞する千餘。李斯痛みに勝へず、自ら寃罪に誣服す。斯自ラ死せざる所以は、自ら其の辯にして功あり、實に反心無きを負み、

幸にして上書し自ら陳ずるを得て、二世の寤つて之を赦さんを幸倖すればなり。李斯乃ち獄中より上書して曰く、臣、丞相と爲り民を治むる三十餘年、秦地の陜隘なり時に逮ぶ。先王の時、秦の地は千里、兵は數十萬に過ぎざりしを、臣、薄材を盡し、謹んで法令を奉じ、陰に謀臣を行り、之に金玉を資し、諸侯に游說せしめ、又陰に甲兵を脩め、政教を飾也へ、鬪士を官にし、功臣を尊び、其爵祿を盛んにす。故に終に以て韓を脅かし魏を弱め、燕趙を破り、齊楚を夷げ、卒に六國を兼ね、其王を虜にし、秦を立て、天子と爲せり、罪一なり。地、廣からざるに非ざりしを、又北、胡貉を逐ひ、南、百越を定め、以て秦の彊を見はす、罪二なり。大臣を尊び、其爵位を盛にし、以て其親を固うす、罪三なり。社稷を立て、宗廟を脩め、以て主の賢を明かにす、罪四なり。剋畫刻畫ニシテ、尺衡等ノ目ヲ盛ルコトを更め、斗斛度量を平にし、文章は之を天下に布き、以て秦の名を樹つ、罪五なり。馳道を治め、游觀を興し、以て主の得意を見はす、罪六なり。刑罰を緩くし、賦斂を薄くし、以て主の衆の心を得るを遂げ、萬民、主を

戴き、死すとも忘れざらしむ、罪七なり。斯の臣たる若くんば、罪以て死するに足る、固に久し。上、幸に其能力を盡さしめ、乃ち今に至るを得たり。願はくは陛下之を察せよと。書上つる。趙高、吏をして書を棄去して奏せざらしむ、曰く、囚人安くんぞ書を上つるを得んと。

趙高、其客十餘輩をして、詐つて御史天子ノ側ニアリ事ヲ記スルノ官謁者事ヲ奏スル役也侍中と爲り、更々往いて斯を覆訊反覆訊問せしむ。斯、更に其實を以て對ふ。輒ち人をして復た之を榜たしむ。後、二世、人をして斯を驗せしむ。斯以爲へらく前の如しと、終に敢て更に言はず、辭服す。奏當獄具シテ當ニ某罪ニ處スベシト奏スルコト上つる。二世喜んで曰く、趙君微かりせば、朕幾んど丞相に賣られたりしならんをと。及二世人ヲシテ案せしめし所の三川の守は、使者至れば、則ち項梁已に之三川ノ守李由を擊殺せり。使者遲來る。曾々丞相、吏に下る。趙高、皆妄に反辭を爲る。二世二年七月、斯に五刑を具へ、論じて咸陽の市に腰斬す。斯、獄を出で、其中子と俱に執へられ、顧みて其中子に謂つて曰く、吾、若と復た黃犬を牽いて

俱に上蔡（斯ノ故郷）の東門を出で、狡兎を逐はんと欲すとも、豈に得可けんや（貴時ノ樂ヲ追懷スル也）と。遂に父子相哭して三族を夷げらる。

李斯已に死す。二世、趙高を拜して中丞相と爲し、事、大小と無く、輙ち高に決す。高自ら權の重きを知り、乃ち鹿を獻じて之を馬と謂ふ。二世、左右に問ふ、此れ乃ち鹿ならんと。左右皆曰く、馬也と。二世驚き、自ら以爲へらく惑へりと、乃ち太卜を召して之を卦せしむ。太卜曰く、陛下、春秋の郊祀ニ、宗廟鬼神を奉じて、齋戒する明かならず。故に此に至れり。盛德に依つて齋戒を明かにす可しと。是に於て乃ち上林に入つて齋戒し、日に游び弋獵（鳥ヲ射獸ヲ狩ル）す。行人、上林中に入るあり、二世自ら射て之を殺す。趙高、其女壻咸陽の令閻樂をして、何人なるかは知らざるも、人を賊殺して上林に移すと勃（彈勃）せしむ。高乃ち二世を諫めて曰く、天子、故無く不辜（罪ナキ也）の人を賊殺す。此れ上帝の禁也。鬼神享（ウ）けず、天且（マサ）に殃を降さんとす。當に遠く宮を避け以て之を禳（ハラ）ふべしと。二世乃ち出でて望夷の宮（離宮ノ名）に居り、留まる三日。趙高、詐りて

衛士（近衛ノ十卒）に詔し、士をして皆素服（白服）し兵（武器）を持して內に鄉（ムカ）はしめ、入つて二世に告げて曰く、山東の群盜の兵大に至ると。二世、觀（望樓）に上つて之を見、恐懼す。高即ち因つて劫かして自殺せしめ、璽を引いて自（ラ）之を佩ぶ。左右百官從ふ莫し。殿に上る、殿壞れんと欲する者三たび。高自ら天の與（クミ）せず群臣の許さゞるを知り、乃ち始皇の弟を召し、之に璽を授く。

子嬰、位に即きしも、之（趙高）を患へ、乃ち疾と稱して事を聽かず、宦者韓談及び其子と、高を殺すを謀る。高、上謁して病を謂（ト問）也ふ。因つて召し入れ、韓談をして之を刺殺せしめ、其三族を夷ぐ。子嬰立つて三月、沛公の兵、武關より入つて、咸陽に至る。群臣百官、皆畔いて適（ユ）かず。子嬰、妻子と、自ら其頸に係（ケ）くるに組（ヒモ）を以てし、軹道の旁に降る。沛公因つて以て吏に屬す。項王至つて之を斬る。遂に以て天下を亡ふ。

太史公曰く、李斯は閭閻（村里ノ出）を以て諸侯を歷、入つて秦に事へ、因つて（秦國）瑕釁を以て、以て始皇を輔けて、卒に帝業を成し、斯、三公と爲る。尊用せられたりと謂ふ可

し。斯、六藝の歸趣を知りながら、政を明かにし以て主上の缺を補ふを務めず、霸道の重きを持しながら、阿順（オモネリ）従（ヒ）て也（ナリ）苟合（假ニ合フナリ）し、威を嚴にし刑を酷にし、高の邪說を聽いて、適嗣（ハツ）を廢し庶孽（妾腹ノ子）を立つ。諸侯已に畔（ソム）いて、斯乃ち諫爭せんと欲す。亦末（オソ）からずや。人臣以（ハ）へらく斯は忠を極めて五刑を蒙り死すと。其本を察するに、乃ち俗議と之れ異なり。然らずんば、斯の功は、且（ソ）に周召（周公召公）と列せんとす。

蒙恬列傳 第二十八

蒙恬は、其先は齊の人也。恬の大父蒙驁、齊より來（テ）秦の昭王に事へ、官、上卿に至る。秦の莊襄王元年、蒙驁、秦の將と爲り、韓を伐つて城皐、滎陽を取り、三川郡を作置す。二年、蒙驁、趙を攻めて三十七城を取る。始皇三年、蒙驁、韓を攻めて十三城を取る。五年、蒙驁、魏を攻めて二十城を取り、東郡を作置す。始皇七年、蒙驁卒す。驁の子を武と曰ひ、武の子を恬と曰ふ。恬嘗て獄（ノ官）たり、獄官文學を典（ツカサド）る。始皇二十三年、蒙武、秦の裨將軍（副將ノ軍）と爲り、王翦と楚を攻めて大に之を破り、項燕を殺す。二十四年、蒙武、楚を攻め楚王を虜にす。蒙恬の弟は毅。始皇二十六年、蒙恬、家世に因つて秦の將と爲るを得、齊を攻めて大に之を破り、拜せられて內史と爲る。秦已に天下を幷せ、乃ち蒙恬をして三十萬の衆に將として、北、戎狄（北ノ夷ヒス）を逐ひ、河南を收めしむ。蒙恬長城を築き、地形に因り、險を用ひて塞を制（製）す。臨洮より起り、遼東

に至る。延袤萬餘里。是に於て河を渡り陽山に據り、逶蛇（屈曲ノ貌）として北し、師を外に舉す十餘年、上郡に居る。是の時蒙恬の威、匈奴に振ふ。始皇甚だ蒙氏を尊寵し、信任して之を賢とす、而して蒙毅を親近し、位、上卿に至る。（蒙毅）出づれば則ち參乘（車ヲ同ジ）し、入れば則ち前に御（侍御ス）す。恬は外事に任じて、毅は常に內謀を爲す。名づけて忠信と爲す。故に諸將相と雖も、敢て之と爭ふ莫し。

趙高は、諸趙の疏遠屬（遠緣ノ族）也。趙高の昆弟數人、皆隱宮（被宮刑者ノ居ル所）に生る。其母刑僇せられ、世世卑賤なり。秦王、高の强力（ニシテ且ツ）獄法（法令）に通ずるを聞き、舉げて以て中車府の令と爲す。高即ち私に公子胡亥に事へ、之に決獄（法律）を喻す。高、大罪あり。秦王、蒙毅をして法もて之を治めしむ。毅敢て法に阿（ナビク曲）らず、高の罪を死に當し、其官籍を除く。帝、高の事に敦き（勉强スル）を以て、之を赦し、其官爵を復す。

始皇、天下に游ばんと欲し、九原に道し、直ちに甘泉に抵（イタル）る。（定ノ像）乃ち蒙恬をして道を通じ、九原より甘泉に抵らしむ。恬山を塹り谷を堙（クツ）むる、千八百里、道未だ就（ナ）らず。

始皇三十七年冬、行いて會稽に出游す。海上に竝（ブ）うて、北、琅邪に走（ムカ）ふ。道にて病む。蒙毅をして還り山川に禱らしむ。（蒙毅）未だ反（リ來）らず、始皇、沙丘に至つて崩ず。之を秘す。群臣知る莫し。是の時丞相李斯、（始皇ノ）少子胡亥、中車府の令趙高常に從ふ。高雅（素也）より胡亥に幸愛（寵）せらるゝを得（タレ）、之（胡亥）を立てんと欲し、又蒙毅の法もて之を治めて己が爲めにせざりしを怨む、因つて（蒙毅ニ對シテ）賊心あり。乃ち丞相李斯、少子胡亥と、陰に謀り胡亥を立てゝ太子と爲す。太子已に立つ。使者を遣り罪を以て公子扶蘇、蒙恬に死を賜ふ。扶蘇已に死す。蒙恬、疑うて復た之を請ふ。使者、蒙恬を以て吏に屬し、又更置す（置キ更ヘル也）。胡亥、李斯の舍人を以て護軍使者と爲し、還り報せしむ。胡亥已に扶蘇死すと聞き、即ち蒙恬を釋さんと欲す。趙高、蒙氏（ガ）復た貴ばれて事を用ひ、之（趙高）を怨むるを恐る。毅還り至る。趙高因つて胡亥に忠計（忠義ラシキ計）するを爲（マホ）し、以て蒙氏を滅ぼさんと欲す。乃ち言つて曰く、臣聞く、先帝の賢を舉げ太子を立てんと欲したるや久し。而るに毅諫めて曰へらく、不可なりと。若し（毅、太子ノ）賢を知つて愈（ヨ）えて（久シカラズル）

義ノ立ヒざるは、則ち是れ不忠にして主を惡はす也。臣の愚意を以てするに、之を誅するに若かずと。胡亥之を聽いて蒙毅を代に繫ぐ。

前に已に蒙恬を陽周に囚ふ。始皇ノ喪柩咸陽に至り、已に葬り、太子立つて二世皇帝と爲る。而して趙高親近せられ、日夜蒙氏を毀惡し、其罪過を求め、之を擧劾列擧彈劾す。

子嬰進み諫めて曰く、臣聞く、故の趙王遷は其良臣李牧を殺して、顏聚を用ひ、燕王喜は陰に荊軻の謀を用ひて、秦の約に倍き、齊王建は其故世の忠臣を殺して、后勝の言を用ひたりと。此三君は、皆各々古者を變ずるを以て、其國を失うて、殃、其身に及べり。今蒙氏は、秦の大臣謀士也。而るを先主、一旦に之を棄去せんと欲す。臣竊に以て不可と爲す。臣聞く、輕慮する者は、以て國を治む可からず、獨智の者は、以て君を存す可からずと。忠臣を誅殺して節行無きの人を立つ、是れ內、群臣をして相信せざらしめて、外、闘士の意をして離れしむる也。臣竊に以て不可と爲すと。胡亥聽かずして、御史曲宮を遣り、傳驛に乘り代に之き、蒙毅に令傳せしめて曰く、先主、

太子を立てんと欲して、而して卿之を難せり。今、丞相、卿を以て不忠と爲す、罪、其宗族に及ぶ。朕忍びず、乃ち卿に死を賜ふ、亦甚だ幸なり。卿其れ之を圖れと。毅對へて曰く、臣を以て、先主の意を得る能はずとせば、則ち臣少きより宦し、先主世に從ひて順幸せらる。先主ノ意を知ると謂ふ可し。又臣を以て太子の能を知らずとせば、則ち臣多クノ諸公子ノ中ニテ太子獨リ先主ニ從ツテ、天下に周旋巡リ歩クコトす、太子ノ才能諸公子を去ること絕だ遠き、臣疑ふ所無し。夫れ先主の太子を擧用せんとする、數年以來の積積也。臣乃ち何をか言ひ之れ敢て謀めん、何をか慮り之れ敢て謀らん。斯ク言ヘバトテ敢て辭を飾り以て死を避けんとするに非ず、先主の名を累はさんを羞づるが爲めなり。願はくは太夫曲宮慮りを爲せ。臣をして情實實狂ニアラザルヲ云フに死するを得しめよ。且つ夫れ成全功成リ名全キヲ謂フに順ふは、道の貴ぶ所也、刑殺は、道の卒衰也くる所也。昔者秦の穆公は、三良三個ノ良臣を殺して死せしめ、百里奚を罪したれども、皆其罪に非ず、故に號を立て、繆穆音繆ニ通ズ繆ハ謬ルト訓ズ、之を謂ふ。又昭襄王嬴武安君白起を殺し、楚の平王は伍奢を殺し、吳王夫差は伍子胥

を殺す。此四君は、皆大失を爲し、而して天下之を非とし、其君を以て不明となす。是を以て其名諸侯間に籍く。故に曰く、道を用つて治むる者は無罪を殺さずして、罰、無辜に加へずと。唯だ大夫、心を留めよと。使者、胡亥の意を知り、蒙毅の言を聽かず、遂に之を殺す。

二世、又使者を遣り、陽周に之き、蒙恬に令して曰く、君の過や多し。而して卿の弟毅、大罪あり、法則に内史恬に及ぶと。恬曰く、吾が先人より子孫に至るに及ぶまで、功信を秦に積むこと三世。今、臣、兵三十餘萬に將たり。身、囚繫せらると雖も、其勢以て倍畔するに足る。然れども自ら必ず死するを知つて而も義を守るは、敢て先人の教を辱しめず、以て先主の恩を忘れざれば也。昔、周の成王初めて立つて、未だ襁褓を離れず、周公旦、王を負うて以て朝し、卒に天下を定めたりしが、成王病あり甚だ殆ふきに及ぶや、公旦自ら其爪を揃り以て河に沈めて誓つて曰く、王未だ幼稚にして何事を識るあらず、是れ旦、事を執る、若し罪殃あらば、旦、其不祥を受けんと。乃ち書し

て之を記府庫に藏む、信と謂ふ可し。王能く國を治むるに及び、賊臣あり、言ふ、周公旦が亂を爲さんと欲するや久し。王若し備へずんば、必ず大事あらんと。王乃ち大に怒る。周公旦走つて楚に奔る。成王、記府を見て、周公旦の沈書を得、乃ち流涕して曰く、孰か周公旦、亂を爲さんと欲すと謂ふやと。之を言ふ者を殺して、周公旦を招反せり。故に周書に曰く、必ず之を參三に詢し伍五大夫に相談すと。今、恬の宗族一、世々二心無し、而るに事卒に此の如し。是れ必ず孽臣趙高を指す逆亂し內に主を陵ぐの道手段也。夫の成王は失して而復た振拯也へば、則ち卒に昌えたり。桀は關龍逢を殺し、紂は王子比干を殺して悔いざれば、則ち身死し國亡びぬ。臣故に曰く、過は振ふ可くして諫は覺す可き也。參伍に察するは、上聖古の聖人の法也と。凡そ臣の言は、以て君を免かるゝを求めんとするに非ざるなり。將に諫を以て死せんとす。願はくは陛下、萬民の爲めに道に從ふを思へと。使者曰く、臣、詔を受けて法を將軍に行ふなれば、敢て將軍の言を以て上に聞せず上と。蒙恬、喟然として太息して曰く、我、天に何の罪あればか

過ち無くして死ずると。良久しうして、徐ろに曰く、恬が罪固より死に當す。臨洮に起り、之を遼東に亟す、城塹萬餘里。此中其れ地脈を絶つ無き能はざらんや。此れ乃ち恬の罪也と。乃ち藥を呑んで自殺す。

太史公曰く、吾、北邊に適き、直道より歸る、行々蒙恬が秦の爲めに築きし所の長城の亭障塞を觀るに、山を塹り谷を堙め、直道を通ず。固に百姓の力勞を輕んず。夫れ秦の初め諸侯を滅ぼす、天下の心未だ定まらず、疾傷者未だ瘳えず、而して恬は名將たり、此の時を以て强諫して、百姓の急を振ひ、老を養ひ孤を存し、務めて衆庶の和を修めずして、反ツテ始皇ノ意に阿り功土工を興す。此れ其兄弟誅に遇ふ、亦宜ならずや。何ぞ乃ち地脈を絶チシエ罪を歸せんや。

張耳陳餘列傳 第二十九

張耳は、大梁の人也。其少時、魏の公子毋忌信陵君に及至也つて客たり。張耳嘗て亡命避難して外黃地名に游ぶ。外黃の富人の女甚だ美し、庸奴日傭取に嫁せしも、其夫を亡げ、去つて父の客ノ家に抵る。父の客は素より張耳を知る、乃ち女に謂つて曰く、必ず賢夫を求めんと欲せば、張耳に從へと。女聽す。乃ち卒に女ノ爲めに決前ノ夫トノ離緣を請ひ、之を張耳に嫁す。張耳、是の時身を脫して游ぶ亡命シテ追捕スル者ナキヲ謂フ。女の家厚く張耳に奉給す。張耳、故を以て千里の遠キ客を致す。乃ち魏に宦任官し外黃の令と爲る。名、此より益々賢なり。

陳餘も、亦大梁の人也。儒術を好み、數々趙の苦陘地名に游ぶ。苦陘ノ富人公乘氏、其女を以て之に妻はす。亦陳餘の庸人凡庸ノ人に非ざるを知ればも也。餘、年少く、張耳に父事す。兩人相與に刎頸の交りを爲す。秦の、大梁を滅ぼすや、張耳、外黃に家す。高祖、

布衣たりし時、嘗て數々張耳に從つて游び、客たりしこと數月。秦、魏を滅ぼして數歲、已に此兩人の魏の名士なりしを聞くや、購求（懸賞シテ求ムル也）すらく、張耳を得るあらば千金、陳餘は五百金と。張耳、陳餘、乃ち名姓を變じて、俱に陳に之き、里の監門（門番）となり、以て自ら食す。（一日）兩人相對す、里吏嘗て過ちありて陳餘を笞つ。陳餘起たんと欲す、張耳之を蹈み、笞を受けしむ。吏去る。張耳乃ち陳餘を引き桑下に之いて、之を數（せ）めて曰く、始め吾、公と言ふは何如。今、小辱せられて、一吏に死せんと欲するかと。陳餘、之を然りとす。秦、詔書して兩人を購求す。兩人亦反つて門者（名）を用（も）つて、以て里中に令す。

陳涉、蘄に起るに、陳に入るに至り、兵數萬。張耳、陳餘（兩人）、陳涉に上謁す。涉及び左右、生平（平生）數々張耳・陳餘の賢を聞きしも、未だ嘗て見ず、見て即ち大に喜ぶ。陳中の豪傑父老、乃ち陳涉に說いて曰く、將軍、身づから堅甲（甲冑）を被り銳利（利刀）を執り、士卒を率ゐて以て暴秦を誅し、楚の社稷を復立す。亡を存し絕を繼ぐ、功德、宜しく王と

爲るべし。且つ夫れ天下の諸將に臨臨する、王と爲らずんば不可なり。願はくは將軍立つて楚王と爲れと。陳涉此を兩人に問ふ。兩人對へて曰く、夫れ秦、無道を爲し、人の國家を破り、人の社稷を滅ぼし、人の後世を絕ち、百姓の力を罷（つか）らし、百姓の財を盡す。（故ニ）將軍、目を瞋らし膽を張り、萬死に一生を顧みざるの計を出し、天下の爲めに殘（殘虐ナ秦）を除かんとする也。今始めて陳に至つて之に王たらば、天下に私（私心）を示すなり。願はくは將軍、王たる毋れ。急に兵を引いて西し、人をして六國の後を立てしめよ。自ら爲めに黨を樹てば、秦の爲めに敵を益す也。敵多ければ則ち力分れ、與衆ければ則ち兵强し。此の如くならば野に交兵無く、縣に守城無（敵スル者ナキヲ云）く、暴秦を誅し、咸陽に據り、以て諸侯に令せん。諸侯亡びて（復）立つを得ば、德を以て之に服せん。此の如くせば、則ち帝業成らん。今獨り陳に王たらば、恐らくは天下解けんと。陳涉聽かず、遂に立つて王と爲る。

陳餘、乃ち復た陳王に說いて曰く、大王、梁楚ノ兵を舉げて西す、務め關に入るにあれ

ども、未だ河北を收むるに及ばず。臣嘗て趙に游び、其豪傑及び地形を知る。願はくは奇兵を請ひ北、趙の地を略せんと。是に於て陳王、故の善くする所の陳人武臣(人名)を以て將軍と爲し、邵騷を護軍と爲し、張耳、陳餘を以て左右の校尉と爲し、卒三千人を予へ、北、趙の地を略せしむ。武臣等、自馬より河を渡つて、諸縣に至り、其豪傑に說いて曰く、秦、亂政虐刑を爲し以て天下を殘賊すること數十年、北に長城の役あり、南に五嶺(大庾、始安、桂陽、揚陽)の戍(衛戍地)あり、外內騷動し、百姓罷敝せるに、頭會箕斂(箕ニ一杯宛ノ課稅スルヲ謂フ)し、以て軍費に供す。財匱しく力盡き、民、生を聊んぜず。之に重ぬるに苛法峻刑を以てし、天下の父子をして各々相安からざらしむ。陳王、臂を奮ひ、天下の爲めに始めを倡へ、楚の地に王となるや、方二千里、響ニ應ズ、應せざるは莫く、家々自ら怒を爲し、人々自ら鬪を爲し、各々其怨を報いて其讎を攻め、縣は其令丞を殺し、郡は其守尉を殺(皆陳王ニ應ズ)す。今陳王已に大楚を張り(大楚ノ國ヲ立テ)、陳に王たり。吳廣、周文をして卒百萬に將とし西、秦を擊たしむ。此の時に於て封侯の業を成さゞる者は、人豪に非ざる也。諸君試みに相與に之を計れ。夫れ天下、心を同じうして秦に苦しむや久し。天下の力に因つて、無道の君を攻め、父兄の怨を報いて、地を割き土を有つの業を成す。此れ士の一時(二度ト遇ハ)レ難キ好機會也と。豪傑(長傑)皆其言を然りとす。乃ち行々兵を收め、數萬人を得、武臣を號して武信君と爲す。趙の十城を下す。餘は皆城守して下るを肯んずる莫し。乃ち兵を引いて東北、范陽を略つ。

范陽の人蒯通(ナル者)范陽の令に說いて曰く、縣に公の將に死せんとするを聞く、故に弔す。然りと雖も、公の通を得て生くるを賀すと。通對へて曰く、秦の法重く、足下、范陽の令たること十年、人の父を殺し、人の子を孤にし、人の足を斷ち、人の首を黥する、勝げて數ふ可からず。然れども茲父孝子ノ敢て刃を公の腹中に傳(刺)す莫きは、秦の法を畏るゝのみ。今、天下大に亂れ、秦の法施(布)かず。然らば則ち慈父孝子、且に刃を公の腹中に傳し以て其名を成さんとす。此れ臣の公を弔する所以也。今、諸侯、秦に畔き、武信君の兵且に至らんとす、

而して君、范陽を堅守す。少年皆爭ひ君を殺し、武信君に下らん。君急に臣を遣り武信君に見えしめば、禍を轉じて福と爲す可きは、今に在りと。范陽の令乃ち蒯通をして武信君に見えしめて曰く、足下必ず將に戰ひ勝つて然る後に地を略し、攻め得て然る後に城を下さんとせば、臣竊に以て過てりと爲す。誠に臣の計を聽かば、攻めずして城を降し、戰はずして地を略し、檄文を傳へて千里定まる可し。可ならんかと。武信君曰く、何の謂ぞやと。蒯通曰く、今、范陽の令、宜しく其士卒を整頓し以て守戰すべきものなるに、怯卑怯にして死を畏れ、貪欲つて富貴を重んず、故に天下に先だつて降らんと欲すれども、君ノ以て范陽ノ令サ秦の置く所の吏と爲し、誅殺すること前の十城の如くせんを畏るゝなり。而るに今、范陽の少年亦方に其令を殺し、自ら城を以て君を距がんとす。君何ぞ臣に命ジ侯の印を齎らしめて范陽の令を拜せざる。范陽の令は則ち城を以て君に下らん。少年も亦敢て其令を殺さじ。范陽の令をして朱輪朱塗ノ輪ノ華轂華美ヲ施セル轂(コシキ)ノ車に乘じて、燕趙の郊郊野に驅馳せしめば、燕趙の郊ニ在ル者之を見て、皆曰はん、此れ范陽の令先づ下る者也と。卽ち喜ばん。燕趙の城、戰ふ毋くして降す可けん。此れ臣の所謂檄を傳へて千里定まる者也と。武信君其計に從ひ、因つて蒯通をして范陽の令に侯の印を賜はしむ。趙の地之を聞き、戰はずして城を以て下る者、三十餘城。武信君邯鄲に至る。

張耳、陳餘人ノ兩、周章陳涉ノ將の軍、關に入り戲に至つて却くと聞き、又諸將ヲ陳王の爲めに地を狥ヘシ者、多く讒毀を以て罪を得て誅せられしと聞き、又陳王ノ其策也を用ひず、ヾ以て將とせずして、以て校尉としたるを怨み、乃ち武臣に說いて曰く、陳王、蘄に起り、陳に至つて王たり、必ずしも六國の後を立つるに非ず。將軍、今三千人を以て趙の數十城を下し、獨り河北に介居獨居す。王たらずんば以て之を塡鎭也する無けん。且つ陳王は讒を聽く。將軍特ノ還り報ずるも、恐らくは禍を脫れざらん。又其陳王ヲ指ス兄弟を立つるに如かずとせん。不ずんば卽ち趙の後を立てん。將軍、時を失ふ毋れ、時ノ聞は息を容れずと。武臣乃ち之を聽き、遂に立つて趙王と爲る。陳餘を以て大將軍と

爲し、張耳を右丞相と爲し、邵騷を左丞相と爲し、人をして陳王に報ぜしむ。陳王大に怒り、盡く武臣等の家を族し（家族ヲ誅スル也）て、兵を發して趙を擊たんと欲す。陳王の相國、宰相房君諫めて曰く、秦未だ亡びざるに武臣等の家を誅せば、此れ又一の秦を生ずる也。如かず因つて之を賀し、急に兵を引いて西、秦を擊たしめんにはと。陳王、之を然りとし、其計に從ふ。武臣等の家族（族ノ者）を宮中に徙繫し、張耳の子敖を封じて成都君と爲す。陳王、使者をして趙を賀せしめ、趣（ウナガ）して兵を發し西、關に入らしむ。張耳、陳餘（人ノ兩）、武臣に說いて曰く、王の趙に王たるは、楚の意（欲スル所）に非ざれども、特に計を以て王を賀す。（夫故ニ）楚已に秦を滅ぼさば、必ず兵を趙に加へん。願はくは王、兵を西せしむる毋れ。北、燕、代を徇へ、南、河內を收め、以て自ら（地ヲ）廣うせよ。趙は南は大河に據り、北には燕、代あり。楚、秦に勝つと雖も、必ず敢て趙を制せざらんと。趙王、以て然りと爲す。因つて兵を西せしめずして、韓廣をして燕を略し、李良をして常山を略し、張黶をして上黨を略せしむ。韓廣、燕に至る。燕人因つて廣を

立て、燕王と爲す。趙王乃ち張耳、陳餘と、北、地を燕の界に略す。趙王間出し、燕の軍の得る所と爲る。燕の將、之を囚へ、趙の地の半を與へ分たば、乃ち王を歸さんと欲す。使者往く。燕輒ち之を殺し以て地を求む。張耳、陳餘、之を患ふ。厠養（厠役厩養）の卒あり、其舍中（者）に謝（挨拶）して曰く、吾、公（張耳陳餘ヲ指ス）の爲めに燕に說き、趙王と與に載歸せんと。舍中（者）皆笑つて曰く、使者往く十餘輩なれども輒ち（イツセ）死す。若（ナンヂ）何を以てか能く王を得んと。厠養（厠役ノ卒）乃ち燕の壁（城壁）に走る。燕の將之を見る。燕の將に問うて曰く、臣何を欲するかを知るやと。燕の將曰く、若（ナンヂ）、趙王を得んと欲する耳と。曰く、君は張耳、陳餘の如何なる人たるを知るやと。燕の將曰く、賢人也と。曰く、其志何を欲するかを知るやと。曰く、其王を得んと欲する耳と。趙の養卒乃ち笑つて曰く、君未だ此兩人の欲する所を知らざる也。夫れ武臣、張耳、陳餘は馬箠（バスイ馬策）を杖（ツエツ）き、趙の數十城を下す。此れ亦各々南面して王たらんと欲す、豈に卿相と爲つて終に已むを欲せんや。夫れ臣と主と、豈に同日にして道ふ可けんや。願ふに其勢初めて定まり（タルコトヽテ）、未だ敢

て參分して王たらず、且(シバラク)く少長を以て先づ武臣を立てゝ王となし、以て趙の心(人)を持す。今、趙の地已に服す。此兩人も亦趙を分つて王たらんと欲すれども、時未だ可ならざる耳。今、君、乃ち趙王を囚ふ。此兩人、名は趙王を求むと爲すも、實は燕の之を殺さんを欲す。(サレバ)此兩人、趙を分つて自立せん。夫れ一の趙を以てすら尚ほ燕を易(アナド)る、況んや兩賢王を以て、左提右挈して王を殺すの罪を責めば、燕を滅ぼすこと易からんと。燕の將以て然りと爲し、乃ち趙王を歸す。養卒、御(御者)と爲りて歸る。

李良、已に常山を定め、還り報ず。趙王、復た良をして太原を略せしむ。(良)壺邑に至る。秦の兵、井陘を塞ぎ(タレバ)、(良)未だ前む能はず。秦の將詐つて二世の使人と稱し、李良に書を遺り、(其書ヲ)封せず。曰く、良、嘗て我に事へ(我ガ)顯幸を得たり。良誠に能く趙に反き秦の爲めにせば、良が罪を赦し良を貴くせんと。良、書を得、疑うて信ぜず、乃ち還り、邯鄲に之き、益々兵を請はんとす。未だ(邯鄲ニ)至らず、道に趙王の姊の、出でゝ(酒ヲ)飲み(驂乘ス)トシテ百餘騎を從ふるに逢ふ。李良、望み見て以て王と爲し、道旁に伏(伏)

す。王の姊、醉うて其將たるを知らず、騎をして李良に謝(挨拶)せしむ。李良素より貴し、起つて其從官に慙づ(拜謁シテ起チ其從官ヲ慙ヂルナリ)。從官一人あり、曰く、天下、秦に畔き、能者先づ立つ。且つ趙王は素(モト)將軍の下に出づ。(而ルニ)今、女兒、乃ち將軍の爲めに車を下らず。請ふ之を追殺せんと。李良已に秦の書を得、固より趙に反かんと欲し、未だ決せず、此怒に因つて、人をして王の姊を道中に追殺せしめ、乃ち遂に其兵を將(ヒキ)ゐて、邯鄲を襲ふ。邯鄲知らず。(李良)竟に武臣、邵騷を殺す。

趙人、張耳、陳餘の耳目たる者多し、故を以て(兩人)脫し出づるを得、其兵(趙ノ散兵)を收めて、數萬人を得たり。客、張耳に說くものあり、曰く、兩君、羈旅にして趙を附けんと欲す。獨立し難し。趙の後を立て、扶くるに義を以てせば、功を就(ナ)す可しと。乃ち求めて趙歇を得、立てゝ趙王と爲し、信都に居る。李良、兵を進め、陳餘を擊つ。陳餘、李良を敗る。李良走つて章邯に歸す。章邯、兵を引いて邯鄲に至り、皆其民を河內に徙し、其城郭を夷ぐ。張耳は趙王歇と走つて鉅鹿城に入る。王離、之を圍む。陳餘、北、

常山の兵を收めて、數萬人を得、鉅鹿の北に軍す。章邯、鉅鹿の南ナル棘原に軍し、甬道（敵ノ輜重ヲ奪フヲ恐レ牆垣ヲ築キタル道）を築き、河に屬し、王離に餉す（兵糧ヲ送ルナリ）。王離の兵、食多し、急に鉅鹿を攻む。鉅鹿の城中、食盡き兵少し。張耳、數々人をして召して陳餘（軍）を前ましむ。陳餘自ら度るに兵少くして秦に敵せずと。（夫故ニ）敢て前まざること數月。張耳大に怒り、陳餘を怨み、張黶、陳澤（人ノ兩）をして往いて陳餘を讓（責）めしめて曰く、始め吾、公と刎頸の交りをなす。今、王と耳と、旦暮（ヨナ）且に死せんとするに、公は兵數萬を擁しながら、相救ふを肯んせず。安くにか其の相爲めに死するものありや。（公ニシテ）苟も必ず信あらば、胡んぞ秦軍に赴き俱に死せざる。且に十に一二は相全（ウレナ）うするあらんとすと。陳餘曰く、吾度るに前むも終に趙を救ふ能はず、徒に盡く軍を亡（ウシナ）はん。且つ餘が俱に死せざる所以は、趙王及ビ張君の爲めに秦に報いんと欲すればなり。今必ず俱に死せば、肉を以て餓虎に委するが如し、何の益かあらんと。張黶、陳澤（人ノ兩）曰く、事已に急、要は以て俱に死して信を立てよ。安くんぞ後慮を知らんと。陳餘曰く、吾死すとも、願（ナモ）ふに以て

益なしと爲す。必ず公の言の如くんば、乃ち五千人を使はさんと。張黶、陳澤をして先づ秦の軍を嘗（試ミル也）みしむ。至り、皆沒す。是の時に當り、燕、齊、楚（國ノ諸）、趙の急を聞いて、皆來り救ふ。張敖（張耳ノ子）も亦北、代の兵を收め、萬餘人を得て來る。皆餘が旁に壁し、未だ敢て秦を擊たず。項羽の兵、數々章邯の甬道を絶つ。（其結果）王離の軍、食に乏し。項羽悉く兵を引いて河を渡り、遂に章邯を破る。章邯、兵を引いて解く（兵ヲ散ズルナリ）。諸侯の軍、乃ち敢て、鉅鹿を圍める秦の軍を擊ち、遂に王離を虜にす。涉間（秦將）自殺す。怨ケテ卒に鉅鹿を存したるは楚の力也。

是に於て趙王歇（ト）張耳、乃ち鉅鹿を出で諸侯に謝するを得。張耳、陳餘と相見、陳餘を責讓するに、趙を救ふを肯んせざりしを以てし、及（マタ）張黶、陳澤の所在を問ふ。陳餘怒つて曰く、張黶、陳澤、必死を以て臣を責む。臣（兩人ヲシテ）五千人に將とし先づ秦の軍を嘗みしめしが、皆沒して出でずと。張耳、信せず、以て之を殺したりと爲し、數々陳餘に問ふ。陳餘怒つて曰く、意はざりき君の臣を望（ウラ）むるの深きを。豈に臣を以て將（位）を

去るを重かるとするかと。乃ち印綬を脱解し張耳に推予す。張耳も亦愕いて受けず。陳餘起つて厠に如く。客、張耳に説くものあり、曰く、臣聞く、天の與ふるを、取らざれば、反つて其咎を受くと。今、陳將軍、君に印を與へ、君受けず。天に反くは不祥なり、急ぎ之を取れと。張耳乃ち其印を佩び、其麾下を收む。而して陳餘、還つて亦張耳の讓らざるを望み、遂に趨り出づ。張耳遂に其兵を收む。陳餘は獨り麾下の善き所のもの數百人と、河上の澤中に之いて漁獵す。此れにより陳餘、張耳、遂に郤隙あり。

趙王歇は復た信都に居り、張耳は項羽及び諸侯に從つて關に入る。漢の元年二月、項羽、諸侯王を立つ。張耳は雅素游ぶ人多く之が爲めに言ふ。項羽も亦素より數々張耳の賢を聞く。乃ち趙を分ち、張耳を立てゝ常山王となし、信都を治めしむ。信都を更めて襄國と名づく。陳餘の客、多く項羽に說いて曰く、陳餘、張耳は一體にして、趙に功ありと。項羽、陳餘の關に入るに從はず、其の南皮に在るを聞き、

即ち南皮の旁の三縣を以て、以て之を封じ、而して趙王歇を徙して代に王たらしむ。張耳、國に之く。陳餘、愈々益々怒つて曰く、張耳は餘と功等し。今、張耳は王たり、餘は獨り侯たり。此れ項羽の不平なりと。齊王田榮、楚に畔くに及び、陳餘乃ち夏說をして田榮に說かしめて曰く、項羽、天下の宰と爲つて、不平なり。盡く諸將を善地に王とし、故王を徙して惡地に王とす。今、趙王乃ち代に居る。願はくは王、臣に兵を假せ。請ふ南皮を以て扞蔽と爲さんと。田榮、燕を趙に樹て以て楚に反かんと欲す、乃ち兵をして陳餘に從はしむ。陳餘因つて三縣の兵を悉し、常山王張耳を襲ふ。張耳敗走す。念ふに諸侯歸す可き者なし。曰く、漢王は我と舊故あり、而れども項羽又彊くして我を立つ、我、楚に之かんと欲すと。甘公曰く、漢王の關に入るや、五星東井に聚る。東井は秦の分野也。先づ至るもの必ず霸たらん。楚彊しと雖も、後必ず漢に屬せんと。故に耳、漢に走る。漢王も亦還つて三秦を定め、方に章邯を廢丘に圍む。張耳、漢王に謁す。漢王厚く之を遇す。

陳餘已に張耳を敗り、皆復た趙の地を收め、趙王を代に迎へ、復た趙王と爲す。趙王、陳餘を德とし、立て、以て代王と爲す。陳餘、趙王の弱く、國初めて定まれるが爲めに、國に之かず、留まり趙王に傅たり。而して夏說をして相國を以て代を守らしむ。漢の二年、漢東、楚を擊たんとし、使をして趙に告げしめ、與に俱にせんと欲す。陳餘曰く、漢、張耳を殺さば乃ち從はんと。是に於て漢王、人の張耳に類する者を求めて之を斬り、其頭を持し陳餘に遺る。陳餘乃ち兵をして漢を助けしむ。漢の、彭城の西に敗るゝや、陳餘も亦復た張耳の死せざるを覺り、即ち漢に背く。漢の三年、韓信、已に魏の地を定む。漢王張耳と韓信とを遣り、趙の井陘を擊破せしめ、陳餘を泜水の上に斬り、趙王歇を襄國に追殺す。漢、張耳を立て、趙王と爲す。

漢の五年、張耳薨ず、謚して景王となす。子の敖、嗣いで立ち趙王となる。高祖の長女魯元公主、趙王敖の后と爲る。漢の七年、高祖、平城より趙を過る。趙王、朝夕、袒し（膝行ヲハメ前跪ニナル也）鞬蔽し（臂拐ヲハメ前跪ヲ掛ケルナリ）て、自ら食を上つる。禮甚だ卑く、子婿の禮あり。高

祖、箕倨（兩足ヲ投ゲ出シテ坐シ）して詈り、甚だ之を慢易（アナドル）す。趙の相貫高、趙午等、年六十餘、故の張耳の客也、生平（平生）氣（意氣）を爲す（人ニ下ラザル也）。乃ち怒つて曰く、吾が王は孱王（孱弱ナル王）也と。王に說いて曰く、夫れ天下の豪桀竝び起り、能者先づ立つ。今、王は高祖に事ふる甚だ恭し。而るに高祖は禮なし。請ふ王の爲めに之を殺さんと。張敖、其指を嚙み血を出して（至誠ヲ表スル也）曰く、君何ぞ言の誤れる。且つ先人、國を亡ひ、高祖に賴つて國を復するを得、（高祖ノ）德、子孫に流る。秋豪（秋毫）も皆高祖の力也。願はくは君復た口より出す無かれと。貫高、趙午等十餘人皆相謂つて曰く、（王ニ說キシハ）乃ち吾等非也。吾が王は長者なり、德に倍かず。且つ吾等義として（吾ガ王ガ）辱しめ（受クルヲ默視セ）られず、（サノバ）今、高祖の我が王を辱しめしを怨む。故に之を殺さんと欲すれども、何ぞ乃ち王を誇汙（ケガ）すを爲さん。事をして成らしめば、王に歸し、事敗れば、獨り身（卽ニ）坐せん耳と。漢の八年、上、東垣より還り趙を過ぐ。貫高等乃ち人を柏人（縣ノ宿舍）に壁（ノ中ニカクシ）し、之（上ヲ指ス）を要して置く。上過（ヨギ）つて宿せんと欲し、心動く（何トナク胸騷ギスルナリ）。乃チ問うて曰く、縣名は何とか爲すと。曰

く、柏人なりと。柏人とは人に迫る也とて、宿せずして去る。漢の九年、貫高の怨家、其貫高ヲ指ス謀を知り、乃ち變を上つり之を告ぐ。是に於て上皆趙王、貫高等を幷せ逮捕す。十餘人、皆爭うて自到す。貫高獨り怒り罵つて曰く、誰か公等をして之を爲さしむる。今、王は實に謀る無し、而るに幷せて王を捕ふ。公等皆死せば、誰か王の反かざるを白かにする者あらんと。乃ち轞車四膠致膠密閉ク車ニ致ス ヲ得ズ し、王と長安に詣る。張敖の罪を治めんとし、上乃ち詔すらく、趙の群臣賓客の敢て王に從ふ者あらば、皆族ヲ夷せん と。貫高、客ナル孟舒等十餘人と、皆自ら髡頭髪ヲ去ル鉗セ(クビカセ)ヲ嵌メル し、王家の奴と爲り、從ひ來る。貫高、至り、獄に對して曰く、獨り吾が屬ノ之を爲す。王は實に知らずと。吏、治して榜笞拷擊する數千、刺刺し貫高ノ身ニ鐵針ヲ突キサス也 て、身擊つ可き者なきも、貫高終に復た言はず。呂后、數々上ニ言ふ、張王は魯元公主呂后ノ女ニシテ張王ノ后 を以ての故に、宜しく此れあるべからずと。上怒つて曰く、張敖をして天下に據らしめば、豈に而の女(汝ヲ魯元公主ノコト)ノ如キ女を少カ闕ク也 かんや世間幾ラモアルトノ義 とて、聽かず。廷尉獄官、貫高の事辭を以て聞す。上曰く、壯

士なり。誰か貫高ヲ知る者ぞ。私情を以て之を問へと。中大夫泄公曰く、貫高ハ臣の邑子同邑ノ人 なり、臣素より之を知る。此れ固より趙國に名義を立てゝ侵されず、然諾を爲す諾ヲ許ス 君少メラ後ヘハ引カズ 所謂男ヲ立ツルヲイフ 者也と。上、泄公をして節を持し之に問はしむ。貫高筦輿竹輿して前ス み、仰ぎ視て曰く、泄公かと。泄公、勞苦貫高ノ痛苦ヲ勞イタハル也 する生平生の驩交驩 に語る。泄公問ふ、張王果して計謀ありや不やと。高曰く、人情、寧ろ各々其父母妻子を愛せざらんや。今、吾が三族は皆以て論死せらる。豈に王を以て吾が親に易へんや。顧ふに王は實に反せずして獨り吾等之を爲したるが爲めなりと。具に本指の爲緣也 る所以の者、王知らざるの狀を道ふ。是に於て泄公入り、具に以て上ニ報ず。上乃ち趙王を赦す。

上、貫高の人と爲り、能く然諾を立つるを賢とし、泄公をして具に之に告げしめて曰く、張王已に出づ。因つて貫高を赦すと。貫高喜んで曰く、吾が王審ニトに出でしかと。泄公曰く、然りと。泄公曰く、上、足下を多とす、故に足下を赦すなりと。貫高曰く、

責、前ニ死せずして一身皆傷ニセラレ完膚ナ餘すなき所以は、張王の反かざるを白かにせんとしたればは也。今、王、已に出で、吾が責め已に塞がる。死すとも恨みじ。且つ人臣、簒殺の名あり。何の面目か復た上に事へんや。縱ひ上、我を殺さざるも、我、心に愧ぢざらんやと。乃ち仰いで肮咽喉を絶ち、遂に死す。

此の時に當つて、貫高ノ名、天下に聞ゆ。張敖、已に出づ。魯元に尙配するの故を以て、封ぜられて宣平侯となる。是に於て上、張王の諸客の鉗奴を以て張王に從ひ關に入りしを賢とし、諸侯の相、郡守と爲さゞる者なし。孝惠、高后、文帝、孝景の時に及ぶや、張王の客の子孫は皆二千石一縣ノ令となるを得たり。張敖は高后の六年に薨じ、子の偃、魯の元王と爲る。偃ノ母は呂后の女たるの故を以て、呂后偃ヲ封じて魯の元王と爲しなり。元王弱く、兄弟少し。及張敖の他姬の子二人を封じ、壽を樂昌侯となし、侈を信都侯となす。高后崩ず。諸呂無道なり。大臣、之諸呂を誅す。而して魯の元王、及び樂昌侯、信都侯を廢す。孝文帝の位に即くや、復た故の魯の元王偃を封じて、南宮侯と爲し、張氏を續がしむ。

太史公曰く、張耳、陳餘は世の傳へて賢者と稱する所、其賓客厮役、天下の俊桀に非ざるは莫く、居る所の國、卿相を取らざる者なし。然れども張耳、陳餘、始め約束に居るの時、相然信す然諸シテ相信ズル也るに死を以てす。豈に互ニ顧問せんや回顧シテ再ビ問フヲ待タズシテ相信ズル也。國に據り權を爭ふに及び、卒に相滅亡す。何ぞ鄉者相慕ヒ用するの誠ありて、後には相倍くの戾乖戾なるや。豈に利を以てに非ずや。名譽高しと雖も、賓客盛んなりと雖も、由る所殆んど奚ノ太伯、延陵の季子カ國ヲ讓ッテ利ヲ計ラザリシと異なり。

魏豹彭越列傳 第三十

魏豹は、故の魏の諸公子(ノ一人)也。其兄魏咎、故の魏の時、封ぜられて寧陵君たり。秦、魏を滅ぼし、咎を遷して家人となす。陳勝の起つて王となるや、咎往いて之に從ふ。陳王、魏人(魏人)を相與に周市を立てゝ魏王と爲さんと欲す。周市曰く、天下昏亂して、忠臣乃ち見はる。今、天下共に秦に畔く。其義必ず魏王の後を立てば、乃ち可ならんと。齊趙(ノ兩國)、車各々五十乘を贈遣して周市を立て魏王となさしむ。市、辭して受けず、魏咎を陳に迎ふるを、五たび反る(使者五度ビ往復ス)。陳王乃ち咎を遣はし、立てゝ魏王と爲す。章邯、已に陳王を破るや、乃ち兵を進めて魏王を臨濟に擊つ。魏王、乃ち周市をして出でゝ、救を齊楚に請はしむ。齊楚、項它(楚ノ將)田巴(齊ノ將)を遣り、兵に將とし市に隨ひ魏を救はしむ。章邯、遂に擊破して周市等の軍を殺し、臨濟を圍む。咎、其民の爲めに降を約す。約定まる。咎自ら燒

殺す。魏豹亡げて楚に走る。楚の懷王、魏豹に數千人を予へ、復た魏の地を徇へしむ。項羽已に秦を破り、章邯を降す。豹、魏の二十餘城を下す。豹を立てゝ魏王と爲す。豹、精兵を引き、項羽に從つて關に入る。

漢の元年、項羽、諸侯を封じ、自ラ梁の地を有たんと欲す。乃ち魏王豹を河東に徙し、平陽に都せしめ、西魏の王となす。漢王還つて三秦を定め、臨晉を渡る。魏王豹、國を以て屬す。遂に從つて楚を彭城に擊つ。漢敗れ還り、滎陽に至る。豹、歸つて親(母)の病を視んと請ひ、國に至り、即ち河津を絶つて漢に畔く。漢王、魏豹の反するを聞く、方に東、楚を憂ふ、未だ擊つに及ばず。酈生に謂つて曰く、緩頰(頰ヲ緩ベル、卽チ餘リ氣色張ラヌヲ謂フ)して往いて魏豹に說け。能く之を下さば、吾、萬戶を以て若(ナンヂ)を封ぜんと。酈生、豹に說く。豹謝して曰く、人生一世の間は、白駒の隙を過ぐるが如き耳。今、漢王、慢(高慢)にして人を侮り、諸侯群臣を罵詈する、奴を罵るが如き耳。上下の禮節あること非す。吾復た見るに忍びざる也と。是に於て漢王、韓信を遣り、擊つて豹を河東に虜にし、

傳へて滎陽に詣り、豹の國を以て郡と爲す。漢王、豹をして滎陽を守らしむ。楚、之を圍むこと急なり、周苛遂に魏豹を殺す。

彭越は、昌邑の人也。字は仲、常て鉅野の澤中に漁し、群盜を爲す。陳勝、項梁の起るや、少年或は越に謂つて曰く、諸豪桀相立つて秦に畔く。仲、以て來り亦之に效ふ可しと。彭越曰く、兩龍方に鬬ふ。且く之を待たんと。居ること歲餘、澤間の少年相聚まる者百餘人、往いて彭越に從つて曰く、請ふ仲、長となれと。越、謝して曰く、臣は諸君に與するを願はずと。少年、强ひて請ふ。乃ち許す。與に期すらく、旦日明朝日出に會せよ。期に後る、者は斬らんと。旦日日出、十餘人後る、後る、者日中に至る。是に於て越謝して曰く、臣老ゆ。諸君强ひて以て長と爲す。今、期して多く後る。盡く誅す可からず。最も後る、者一人を誅せんと。校長組長をして之を斬らしむ。皆笑つて曰く、何ぞ是に至らん ソレホドニハ。及バヌトノ義 請ふ後は敢てせざらんと。是に於て越乃ち一人を引き之を斬り、壇を設けて祭り、乃ち徒屬に令す。徒屬皆大に驚き、越を畏

れ、敢て仰ぎ視る莫し。乃ち行々地を略し、諸侯の散卒を收めて千餘人を得たり。沛公の豫より北、昌邑を擊つや、彭越、之を助く。昌邑未だ下らず。沛公、兵を引いて西す。彭越も亦其衆を將ゐて、鉅野の中に居り、魏の散卒を收む。項籍、關に入り、諸侯を王とし、還り歸る。彭越の衆、萬餘人、屬する所毋し。漢の元年秋、齊王田榮、項王に畔く。漢乃ち人をして彭越に將軍の印を賜ひ、濟陰を下り以て楚を擊たしむ。楚、蕭公角に命じ、兵を將ゐ越を擊たしむ。越、大に楚の軍を破る。漢王の二年春、魏王豹及び諸侯と東、楚を擊つ。彭越、其兵三萬餘人を將ゐ、漢に外黃地名に歸す。漢王曰く、彭將軍、魏の地を收め、十餘城を得たり。急に魏の後を立てんと欲す。然レドモ 今、西魏王豹も亦魏王咎の從弟也。此レ 眞に魏の後なりと。乃ち彭越を拜し魏の相國と爲し、擅に其兵を將ゐて梁の地を略定せしむ。漢王の、彭城に敗れ、解いて西するや、彭越皆復た其の下す所の城を亡ひ、獨り其兵を將ゐて北、河上に居る。

漢王三年、彭越、常に往來して、漢の游兵と爲り、楚を擊ち、其後糧 背後ノ糧道 を梁の地

に絶つ。漢の四年冬、項王、漢王と滎陽に相距ぐ。彭越攻めて睢陽、外黄の十七城を下す。項王之を聞き、乃ち曹咎をして城皐を守らしめ、自ら東し、彭越が下す所の城邑を收む。皆、復た楚ノ有と爲る。越、其兵を將ゐ、北、穀城に走る。漢の五年秋、項王の南、陽夏に走るや、彭越、復た昌邑の旁の二十餘城を下し、穀十餘萬斛を得、以て漢王の食に給す。漢王敗れ、使をして彭越を召し力を幷せ楚を擊たしむ。越曰く、魏の地初めて定まり、尙ほ楚を畏る。未だ此地ヲ去る可からずと。

漢王、楚を追ひ、項籍の爲めに固陵に敗らる。乃ち留侯に謂つて曰く、諸侯の兵從はず。之を爲す奈何と。留侯曰く、齊王信の立つは、君王の意に非ず。而シテ信も亦自ら其地位ヲ堅しとせず。又彭越は本、梁の地を定め、功多し。始め君王、魏豹の故を以て、彭越を拜し、魏王トセズシテ魏の相國となしたりしが、今、豹、死して後なく、且つ越も亦王たらんと欲す、而るに君王蚤く定めず。イ此兩國を與へて兩人ニ約せば、即ち楚に勝たん。睢陽以北、穀城に至るまで、皆以て彭相國を王とし、陳より以東、海に傅るまでを、

齊王信に與へよ。齊王信の家は楚に在り。此れ其意復た故邑を得んと欲す。君王能く此地を出捐し二人に許さば、二人今ま致招致す可し。即し能はずとならば、天下ノ事未だ知る可からざる也と。是に於て漢王乃ち使を發し、彭越に使はし、留侯の策の如くす。使者至る。彭越乃ち悉く兵を引いて垓下に會し、遂に楚を破る。五年、項籍已に死す。春、彭越を立て、梁王と爲し、定陶に都せしむ。六年、陳に朝す。九年、十年、皆長安に來朝す。

十年秋、陳豨、代の地に反す。高帝自ら往き、擊つて邯鄲に至り、兵を梁王に徵す。梁王、病と稱し、將をして兵を將ゐ邯鄲に詣らしむ。高帝怒り、人をして梁王を讓めしむ。梁王恐れ、自ら往いて謝せんと欲す。其將扈輒曰く、王始めは往かずして、讓められて往く。往かば則ち禽トリコとならん。遂に兵を發して反するに如かずと。梁王聽かず、病と稱す。梁王、其太僕ノ官ニ在ル者を怒り、之を斬らんと欲す。太僕亡げて漢に走り、梁王、扈輒と謀反すと告ぐ。是に於て上、使をして梁王を掩オソはしむ。梁王覺らず。梁

王を捕へ、之を雒陽に囚ふ。有司法す。反形（謀反ノ形迹）已に具はる。請ふ論じて法の如くせんと。上、赦して以て庶人と爲し、傳して獨の青衣（縣名）に處らしむ。（彭越）西、鄭に至る。呂后、長安より來り、雒陽に之かんと欲し、道に彭王を見るに逢ふ。彭王、呂后の爲めに泣涕し、自ら罪なきを言ひ、故の昌邑に處らんを願ふ。呂后許諾し、與に俱に東し雒陽に至る。呂后、上に白つて曰く、彭王は壯士なり。今、之を獨に徙す、此れ自ら患を遺すなり。遂に之を誅するに如かず。妾謹んで與に俱に來る。是に於て呂后、乃ち其舍人をして彭越復た謀反すと告げしむ。廷尉王恬、開奏し、之を族せんと請ふ。上乃ち可し、遂に越の宗族を夷げ、國を除けり。

太史公曰く、魏豹、彭越は、故賤しと雖も、然れども已に千里を席卷し、南面して孤と稱し、血を喋み勝に乘じ、日に聞ゆるあり。畔逆の意を懷き、敗るゝに及んで、死せずして虜囚せられ、身刑戮せられしは、何ぞや。中材已上以、且つ其ノ如キ行ヲ爲スを恥ぢ、況んや王者をや。彼、異故なし（別ニ不思議ハナシ。無イトハ意）。智略、人に絶す、獨り身なきを患ふる耳（身ダニアラバ必ズシモ大國ヲ得ザルモ大ニ爲スベカラズニ足ル可シト自ラ思フヲ云フ）。尺寸の柄を據持（持也）するを得ば、其雲蒸龍變（物ノ變化）を謂フ、其慶に會ふ所あらんと欲す。故を以て幽囚せられて辭せざりしと云ふ。

黥布列傳 第三十一

黥布は、六地名の人也。姓は英氏。秦の時、布衣たり、少年のとき客あり之を相して曰く、當に刑せられて王たるべしと。壯年に及び法に坐し、黥せらる。布欣然として笑つて曰く、人、我を相し、當に刑せられて王たるべしとす。幾んど是かと。人、聞く者あり、共に之を俳笑戲レ笑フす。布、已に論判決せられて、麗驪山に輸オクらる。麗山の徒、數十萬人、布、皆、其徒の長部長豪桀と交通す。廼ち其曹偶同類を率ゐ、亡げて江中に之き、群盜をなす。陳勝の起るや、布、廼ち番君番陽ノ令吳芮に見え、其衆と秦に叛き、兵、數千人を聚む。番君、其女を以て之に妻はす。章邯の陳勝を滅ぼし呂臣の軍を破るや、布、乃ち兵を引いて、北、秦の左右校校尉を擊ち、之を清波に破り、兵を引いて東す。項梁、江東の會稽を定め、江を涉つて西すと聞き、陳嬰、項氏の世々楚の將たるを以て、廼ち兵を以て項梁に屬し、淮南を渡る。英布、及蒲將軍も亦兵を以て項梁に屬す。

項梁の淮を涉つて西し、景駒、秦嘉等を擊つや、布、常に其ノ軍に冠先鋒たり。項梁、薛に至り、陳王、定に死せりと聞いて、廼ち楚の懷王を立つ。項梁、號して武信君となり、英布も亦皆彭城に保聚す。項梁、敗れて定陶に死し、懷王徙つて彭城に都す。諸將及ビ是の時に當り、秦、急に趙を圍む。趙、數々人をして救を請はしむ。懷王、宋義をして上將たらしめ、范增をして末將たらしめ、項籍をして次將たらしめ、英布、蒲將軍をして皆將軍たらしめ、悉く宋義に屬し、北、趙を救はしむ。項籍ガ宋義を河上に殺すに及び、懷王因つて籍を立てて上將軍となす。諸將皆項籍に屬す。項籍、布をして先づ河を涉渡し秦を擊たしむ。布、數々利あり。籍廼ち悉く兵を引き、河を涉つて之に從ひ、遂に秦の軍を破つて、章邯等を降す。楚の兵、常に勝ち、功、諸侯に冠たり。諸侯の兵皆以て楚に服屬せしは、布の數々少を以て衆を敗りしが以也。項籍の兵を引き西、新安に至るや、又、布等をして夜擊つて、章邯の秦卒二十餘萬人を坑にせしむ。

關に至る、入るを得ず。又、布等をして先づ間道より關下の軍を破らしめ、遂に入つて咸陽に至るを得。布、常に軍鋒たり。項王、諸將を封じ、布を立て九江王となし、六に都せしむ。

漢の元年四月、諸侯皆戲下を罷め、各々國に就く。項氏、懷王を立てて義帝となし、徙つて長沙に都せしめ、廼ち陰に九江王布等をして行いて之を擊たしむ。其八月、布、將をして義帝を擊たしめ、之を郴縣に追殺す。漢の二年、齊王田榮、楚に畔く。項王往いて齊を擊ち、兵を九江に徵す。九江王布、病と稱して往かず、將をして數千人を將ゐて行かしむ。漢の楚を彭城に敗るや、布、又、病と稱し楚を佐けず。項王、此より布を怨み、數々使者をして誚讓し布を召さしむ。布、愈々恐れ、敢て往かず。項王、方に北、齊趙を憂へ、西、漢を患ふ。與する所は、獨り九江王のみ。又、布の材を多とし、之を親用せんと欲す。故を以て未だ擊たず。

漢の三年、漢王楚を擊ち、大に彭城に戰ひ、利あらず、梁の地を出でゝ、虞に至り、

左右に謂つて曰く、彼等の如き者は、與に天下の事を計るに足る無しと。謁者隨何進んで曰く、陛下の謂ふ所を審にせずと。漢王曰く、孰か能く我が爲めに淮南に使し、之（九江王布ヲ指ス）をして兵を發し楚に倍かしむるものぞ。項王を齊に留むること數月ならば、我の天下を取る、以て百全なる可しと。隨何曰く、臣請ふ之に使せんと。廼ち二十人と俱に淮南に使し、至り、太宰（食膳ヲ主ルノ官）に因り之を主とす（舍ル也）。三日、見ゆるを得ず。隨何因つて太宰に說いて曰く、王の何を見ざるは、必ず楚を以て强しと爲し漢を以て弱しと爲せばならん。此れ臣の爲めに使する所以なり。何をして見ゆるを得しめよ。若し之を言つて是ならんか、是れ大王の聞かんと欲する所なり。若し之を言つて非ならんか、何等二十人をして、斧質（鐵ナリ）に淮南の市に伏せしめ、以て王の漢に倍いて楚に與するを明かにせよと。太宰廼ち之を王に言ふ。王、之を見る。隨何曰く、漢王、臣をして敬んで書を大王の御者に進めしむ。竊に怪しむ、大王は楚と何の親あると。淮南王（九江王）曰く、寡人、北鄉して之に臣事すと。隨何曰く、大王、項王と俱に列して諸侯

となり、北鄉して之項王に臣事する、必ず楚を以て彊くして以て國を託す可しと爲せばならん。然ルニ項王、齊を伐つや、身づから板牆板築杵也を負ひ、以て士卒の先となる。大王、宜しく淮南の衆を悉し、身自ら之を將ひ、楚の軍の前鋒たるべきに、今廼ち四千人を發して以て楚を助く。夫れ北面して人に臣事する者、固に是の若きか。夫れ漢王、彭城に戰ひ、項王未だ齊を出でず。此時大王、宜しく淮南の兵を驅掃ト通ズ盡ク其兵ヲ、淮ひ率グル也を渡り、日夜、彭城の下に會戰すべきを、大王、萬人の衆を撫し、一人の淮を渡る者なく、垂拱して其の孰れか勝つを觀る手ヲ欲メテ成。敗ヲ觀望ス。夫れ國を人に託する者、固に是の若きか。大王、空名を提げ以て楚に鄉ひ、而して厚く自ら託せんと欲す、臣竊に大王の爲めに取らざる也。然り而して大王の楚に背かざるは、漢を以て弱しと爲せば也。夫れ楚の兵、彊しと雖も、天下、之に負はすに不義の名を以てす。其の盟約に背きて義帝を殺したるを以てなり。然り而して楚王は戰勝を恃み自ら彊しとするも、漢王は諸侯を收め、還つて成皐、滎陽を守り、蜀漢の粟を下し、溝を深くし壘に壁し、卒を

分つて徼邊境を守り塞に乘登也らしむ漢ノ萬全ノ勢ヲ得タルヲ云フ。楚人、兵を還すには、間するに梁の地を以てし項王兵ヲ還シ漢ヲ擊ツニハ必ズ梁ノ地ヲ經ザル可カラザルヲ云フ、深く敵國に入ること八九百里なり。戰はんと欲すれば則ち得ず、城を攻めんとすれば則ち力能はず、老弱は糧を千里の外に轉ず運送スル也。楚の兵、滎陽、成皐に至るとも、漢は堅守して動かず、楚兵進んでは則ち攻むるを得ず、退いては則ち解くるを得ず。故に曰く、楚の兵は恃むに足らずと。萬一楚をして漢に勝たしめば、則ち諸侯自ら危懼して相救はん。夫れ楚の彊きは、適々以て天下の兵を致ムくに足らん耳。故に楚の漢に如かざる、其勢見易き也。今、大王、萬全の漢に與せずして、自ら危亡の楚に託す。臣竊に大王のために之に惑ふ。臣、淮南の兵を以て、以て楚を亡ぼすに足れりとするに非ざる也。夫れ大王、兵を發して楚に倍かば、項王必ず齊ニ留まらん。留まる數月ならば、漢の天下を取る、以て萬全なる可し。臣請ふ大王と劍を提げて漢に歸せん。漢王必ず地を裂いて大王を封ぜん。又況んや淮南をや。淮南は必ず大王の有也。故に漢王敬んで使臣をして愚計を進めしむ。願はくは大王の意

を留めんことをと。淮南王曰く、請ふ命を奉ぜんと。陰に楚に畔き漢に與するを許す、未だ敢て他に泄さゞる也。楚の使者在り、方に急に英布を責め兵を發せしむ。使者傳舍に舍す。隨何直ちに入り、楚の使者の上坐に坐して曰く、九江王、已に漢に歸す。楚、何ぞ以て兵を發するを得んと。布、愕然たり。楚の使者起つ。何、因つて布に說いて曰く、事已に搆成也る。遂に楚の使者を殺して、歸らしむる無くして、疾く漢に走き力を并す可しと。布曰く、使者の教の如くし、因つて兵を起し之を擊たん耳と。是に於て使者を殺し、因つて兵を起して楚を攻む。楚、項聲、龍且をして淮南を攻めしめ、項王は留まつて下邑を攻む。數月、龍且、淮南を擊つて、布の軍を破る。布、兵を引き漢に走かんと欲し、楚王の之を殺さんを恐る。故に間行して何と俱に漢に歸す。淮南王至る。上、方に牀几に踞して足洗ふ。其使布を召し、入つて見えしむ。布、甚だ大に怒り、來りたるを悔い、自殺せんと欲す。出でゝ舍に就けば、帳御帷帳及ビ服御ノ具飲食從官、漢王の居の如し。布、又、大に望に過ぎたるを喜ぶ。是に於て廼ち人をして九

江に入らしむ。楚、已に項伯をして九江の兵を收め、盡く布の妻子を殺さしむ。布の使者、頗る故人布ノ黥幸臣を得、兵數千人を將ゐて漢に歸す。漢、布に兵を益し分ちて、與に俱に北、兵を收めて、成皐に至る。四年七月、布を立てゝ淮南王と爲し、與に項籍を擊つ。漢の五年、布、人をして九江に入らしめ、數縣を得。六年、布、劉賈と九江に入り、大司馬周殷を誘ふ。周殷、楚に反き、遂に九江の兵を舉げて、漢と與に楚を擊ち、之を垓下に破る。項籍死し、天下定まる。上、置酒す。上、隨何の功を折いて謂ふ、何は腐儒たり。天下を爲むる、安くんぞ腐儒を用ひんと。隨何跪いて曰く、失れ陛下、兵を引いて彭城を攻め、楚王未だ齊を去らざるや、陛下、步卒五萬人、騎五千を發し、能く以て淮南を取らんやと。上曰く、能はずと。隨何曰く、陛下、何に二十人を與へ淮南に使せしむ。至りて陛下の意の如くす。是れ何の功、步卒五萬人、騎五千に賢る也。然り而して陛下謂ふ、何は腐儒なり、天下を爲むる、安くんぞ腐儒を用ひんとは、何ぞやと。上曰く、吾、方に子の功を圖らんと。廼ち隨何を以て護軍中尉

となす。布、遂に符を剖いて賜ハリ淮南王と爲り、六に都す。九江、廬江、衡山、豫章郡、黃布に屬す。

七年、淮南王陳に朝し、八年、雒陽に朝し、九年、長安に朝す。十一年、高后、淮陰侯を誅す。布因つて心に恐る。夏、漢、梁王彭越を誅し、之を醢シヒシホにし、其醢を盛つて徧く諸侯に賜ひ、淮南に至る。淮南王、方に獵す。醢を見、因つて大に恐れ、陰に人をして兵を部聚し、旁郡を候伺し、急を警めしむ。布が幸する所の姬、疾み、請うて醫に就く。醫家は中大夫賁赫と門を對す。姬、數々醫家に如ユく。賁赫自ら侍中たるを以て、廼ち厚く餽遺物ヲ贈ルし、姬に從ひ、醫家に飲む。姬、王に侍し、從容として語次話ノ序ナリに、赫の長者なるを譽むるや、王怒つて曰く、汝、安くに從ヨつて之を知るやと。姬具に狀を說く。王、其の與に亂密通するを疑ふ。赫、恐れ、病と稱す。王愈々怒り、赫を捕へんと欲す。赫、變事を言はんとし、傳に乘じて長安に詣る。布、人をして追はしむ。及ばず。赫至り、變を上つり言ふ、布、謀反の端あり。未だ發せざるに

先だち誅す可しと。上、其書を讀み、蕭相國に語る。相國曰く、布、宜しく此れあるべからず。仇怨の妄りに之を誣ふるを恐る。請ふ赫を繫がんと。人をして微ヒッカに淮南王を驗せしむ。淮南王布、赫が罪を以て亡げて變を上つるを見、固より已に、其の國の陰事を言ふを疑ふ。漢の使又來り、頗る驗する所あり。遂に赫の家を族し、兵を發して反す。

反書聞す謀反ノ狀ヲ書シ奏聞スル也。上廼ち賞赫を赦し以て將軍となす。上、諸將を召し問うて曰く、布、反す。之を爲す奈何と。皆曰く、兵を發して之を擊ち、豎子を坑にせん耳。何をか能く爲さんやと。汝陰侯滕公、故の楚の令尹を召し之を問ふ。令尹曰く、是れ固より當に反すべしと。滕公曰く、上、地を裂いて之を王とし、爵を疏分也つて之を貴くし、南面して立ち、萬乘の主たり。其の反するは、何ぞやと。令尹曰く、往年、彭越を殺し、前年、韓信を殺す。此三人は、同功一體の人也。自ら禍の身に及ばんを疑ふ、故に反する耳と。滕公、之を上に言つて曰く、臣の客ナルの故の楚の令尹薛公なる者、其人、

籌筴(ハカリ)の計あり、問ふ可しと。上廼ち召し見て薛公に問ふ。薛公對へて曰く、布の反するは怪しむに足らざる也。布をして上計に出でしめば、山東は漢の有に非ざる也。布中計に出でば、勝敗の數未だ知る可からざる也。下計に出でば、陛下、枕を安んじて臥するをえんと。上曰く、何をか上計と謂ふと。令尹對へて曰く、東、吳を取り、西、楚を取り、齊を并せ魯を取り、燕趙に傳へ、固く其所を守らば、山東は漢の有に非ざる也。上曰(ク)何をか中計と謂ふ。曰(ク)東、吳を取り、西、楚を取り、韓を并せ魏を取り、敖倉(敖庾ト云フ)の粟に據り、成皐の口を塞がば、勝敗の數、未だ知る可からざる也。上曰(ク)何をか下計と謂ふ。曰(ク)東、吳を取り、西、下蔡を取り、重輜(重)を越に歸し、身、長沙に歸らば、陛下、枕を安んじて臥し、漢、事無けんと。上曰く、是の計將に安くに出でんとすると。令尹對へて曰く、下計に出でんと。上曰く、何ぞ上中計を廢(ス)てて下計に出づと謂ふと。令尹曰く、布は故(モト)麗山の徒なり。自ら萬乘の主を致す。此れ皆身の爲めにす。後を顧み百姓萬世の爲めに遠る者にあらざるなり。故に曰く、下計に出

でんと。上曰く、善しと。薛公を千戶に封ず。廼ち皇子長を立てゝ淮南王となす。

上、遂に兵を發し、自ら將として東、布を擊つ。布の初め反する、其將に謂つて曰く、上、老いたり。兵を厭ひ、必ず來る能はず、諸將を使はすべし。諸將(ノ中デハ)獨り淮陰、彭越(ノ兩人)を患へたりしも、今皆已に死す。餘は畏るゝに足らざる也と。故に遂に反す。布果して薛公の之を籌(ハカ)りしが如く、東、荆を擊つ。荆王劉賈、走つて富陵に死す。盡く其兵を劫(カス)め、淮を渡つて楚を擊つ。楚、兵を發し、與に徐僮(兩縣)の間に戰ふ。楚三軍を爲し、以て相救ひ奇を爲さんと欲す。或ひと楚の將に說いて曰く、布は善く兵を用ひ、民素より之を畏る。且つ兵法に、諸侯其地に戰ふを、散地(逃散ノ地)と爲す(諸侯其土地ニ戰ヘバ士卒逃散ストノ意)とアリ。今、別つて三と爲す。彼、吾が一軍を敗らば、餘(ノ)軍(ニ)は皆走らん。安くんぞ能く相救はんと。楚將聽かず。布、果して其一軍を破る。其二軍、散じ走る。遂に西、上の兵と、蘄(蘄鄉)の西、會甄(スボ)に遇ふ。布の兵、精なること甚し。上廼ち庸城に壁し、布の軍を望むに、陳(陣也)を置くこと、項籍の軍の如し。上、之を惡み、布と相望

み見、遂に布に謂つて曰く、何を苦しんで反すると。布曰く、帝とならんと欲する耳と。上怒り之を爲り、遂に大に戰ふ。布の軍敗走す。淮を渡り、數々止まり戰ふ。利あらず。百餘人と江南に走る。布、故、番君と婚す。故を以て長沙の哀王、人をして布を紿き、僞つて與に亡げ、誘ひ越に走らしむ。故に信じて隨ひ番陽に之く。番陽の人、布を茲鄉の民の田舍に殺す。遂に黥布を滅ぼし、皇子長を立てゝ淮南王となし、賁赫を封じて期思侯となす。諸將率、功を以て封せられし者多し。

太史公曰く、英布は、其先祖豈に春秋に見る所の、楚、英六を滅ぼすてふ皐陶の後なる哉。身、刑法を被る、何ぞ其拔與の暴猝也疾也なるや。項氏の坑殺する所の人、千萬を以て數ふ、而して布、常に首虐首惡たり、功、諸侯に冠たり。此を用つて王たるを得たれども、亦、身、世の大僇大戮となるを免かれず。禍の興る、愛姬より殖生し、妒娼嫉、患を生じ、竟に以て國を滅ぼせり。

淮陰侯列傳 第三十二

淮陰侯韓信は、淮陰の人也。始め布衣たりし時、貧にして、行品無く、推し擇ばれて吏となるを得ず、又、生を治め商賈する能はず、常に人に從ひ食飲を寄す寄食。人、之を厭ふ者多し。常嘗ト通ズ て數々其下鄉解の南昌の亭長に從ひ、寄食す。數月にして、亭長の妻之を患へ、乃ち晨に炊ぎ蓐食し臥床ニ在リテ食フル也、食時に、信往けども爲めに食を具へず。信も亦其意を知つて怒り、竟に絶ち去る。

信、城下に釣す。諸母數人ノ老婆 漂す水中ニテ絮ヲ擊チ晒ス也 す飯ヲ食ハセシ也。漂を竟るまで數十日なり。信喜び、漂母に謂つて曰く、吾必ず以て重く母に報ずるあらんと。母怒つて曰く、大丈夫、自ら食する能はず、吾、王孫猪ホ公子トイフガゴトシ を哀れんで食を進む。豈に報を望まんやと。淮陰の屠中狗豚肉ヲ切賣スル仲間 の少年ニ、信を侮る者あり、曰く、若、ナンジ 長大にして好んで刀劍を帶ぶと雖も、中情は怯なる耳と。衆衆人環睹

ノ中にして之を辱しめて曰く、信、能く死さば、我を刺せ。死す能はずんば、我が袴下より出でよと。是に於て信之を熟視し、俛して袴下より出で、蒲伏(匍匐)す。一市の人皆信を笑ひ、以て怯と爲す。

項梁の淮を渡るに及び、信、劒を杖(つエラ)いて之に從ひ、項梁ノ麾下に居る。名を知らるゝ無し。項梁敗れ、又項羽に屬す。羽以て郎中(信)となす。數々策を以て項羽を干せども、羽用ひず。漢王の蜀に入るや、信、楚を亡げて漢に歸す。未だ名を知らるゝを得ず、連敖(官名ヒシキ)となる。法に坐し斬に當す。其輩十三人皆已に斬らる。次(順番)、信に至る。信乃ち仰ぎ視、適々滕公(夏侯嬰)を見て曰く、上、天下に事ナ(ヲ)就さんと欲せざるや。何爲(ナンスレ)ぞ壯士を斬ると。滕公、其言を奇とし、其貌を壯とし、釋して斬らず。與に語り、大に之を說び、上に言ふ。上、拜して以て治粟都尉となす。上未だ之を奇とせざる也。信、數々蕭何と語る。何、之を奇とす。漢ノ軍南鄭に至る。諸將行々道に亡ぐる者數十人なり。信、度るらく、何等、已に數々上に言ふ、而(モ)上、我を用ひずと。即ち亡ぐ。何、

信亡ぐと聞き、以聞するに及ばず、自ら之を追ふ。人、上に言ふあり、曰く、丞相何亡ぐと。上大に怒り、左右の手を失へるが如し。居る一二日、何來り上に謁す。上、且つ怒り且つ喜び、何を罵つて曰く、若(ナンジ)亡ぐるは、何ぞやと。何曰く、臣敢て亡げざる也。臣、亡ぐる者を追ふと。上曰く、若が追ふ所の者は誰ぞと。何曰く、韓信也と。上復た罵つて曰く、諸將亡ぐる者十を以て數ふ。(サレドモ)公追ふ所無し。信を追ひしとは詐ならんと。何曰く、他ノ諸將は得易き耳。信が如き者に至つては、國士、無雙なり。王必ず長く漢中に王たらんと欲せば、信を事とする所なし(信ヲ用ヒズト。然レドモ宜シノ志)。必ず天下を爭はんと欲せば、信に非ずんば與に事を計る所の者なし。願ふに王の策安(イヅ)れにか決する所にある耳と。王曰く、吾も亦、東せんと欲する耳。安くんぞ能く鬱鬱(陰氣臭キ也)として久しく此に居らんやと。何曰く、王の計必ず東せんと欲せば、能く信を用ひよ。信即ち留まらん。用ふる能はずんば、信終に亡げん耳と。王曰く、吾、公の爲めに以て將と爲さんと。何曰く、將と爲すと雖も、信必ず留まらじと。王曰く、以て大將と

爲さんと。何曰く、幸甚しと。是に於て王、信を召し之を拜せんと欲す。何曰く、王、素慢にして禮無し。今、大將を拜する、小兒を呼ぶが如き耳。此れ乃ち信が去る所以也。王必ず之を拜せんと欲せば、良日を擇んで、齋戒し、壇場を設け禮を具へよ。乃ち可ならん耳と。王之を許す。諸將皆喜び、人人各々自ら以爲へらく、大將たるを得んと。大將を拜するに至れば、乃ち韓信也。一軍皆驚く。

信、拜禮畢り、坐に上る。王曰く、丞相數々將軍事を言ふ。將軍、何を以て寡人に計策を教ふると。信、謝し、因つて王に問うて曰く、今、東鄉し權を天下に爭ふは、豈に項王に非ずやと。漢王曰く、然りと。曰く、大王自ら料るに、勇悍仁彊、項王に孰與ぞと。漢王默然たること良久しうして曰く、如かざる也と。信、再拜し、賀して曰く、惟ふに信も亦大王を如かずと爲す也。然れども臣嘗て之項王に事ふ。請ふ項王の人と爲りを言はん。夫項王喑嗚怒氣ヲ發ノ叱咤怒聲ヲ發スル也すれば、千人皆廢倒る。然れども賢將に任屬委也する能はず。此れ特に匹夫の勇耳。項王、人を見る、恭敬慈愛、言語嘔嘔

和好ノ貌、人、疾病あれば、涕泣し、食飲を分てども、使人自分ノ使ツテ居ル人也功ありて當に封爵すべき者には、印ヲ予ヘントシツ、猶ホ決疑手弄シテ其印カ刓弊ツアレ壞レル也するも、忍んで予ふる能はざるに至る。此れ所謂婦人の仁也。項王、天下に霸として諸侯を臣とすと雖も、關中に居らずして、彭城に都す。義帝の約に背くありて、親愛を以て諸侯を王とす。此レ不平不公平なり。諸侯の項王が義帝を遷逐して江南に置くを見るや、亦皆歸り、其主を逐うて、自ら善地に王たり。項王過ぐる所、殘滅せざる者なし。天下多く怨み、百姓親附せず、特に威彊に劫かさゝる耳。名は霸たりと雖も、實は天下の心を失ふ。故に曰く、其彊は弱りし易しと。今、大王、誠に能く其道に反し、天下の武勇に任せば、何くに誅せラざる所アルぞ。天下の城邑を以て功臣を封せば、何くに服せざる所ノ者アルぞ。義兵を以て、東歸を思ふの士を從へば、何くに散敗せざる所ノ者アルぞ。且つ三秦の王章邯、司馬欣、董翳は秦の將たり。秦の子弟に將たる數歲、殺亡する所勝げて計カフ可からず、又其衆を欺き、諸侯に降り、新安に至る。而ルニ項王詐り秦の降卒二十餘萬を坑にす。唯だ獨り邯章、欣司馬

欣、翳（董翳ノ三人）、晩するを得たるのみ。秦の父兄、此三人を怨み、痛み骨髓に入る。今、楚、張ひて威を以て此三人を王とす。秦の民、愛する莫し。大王の武關に入るや、秋毫も害する所なく、秦の苛法を除き、秦の民と約する、法三章耳。秦の民、大王の秦に王たるを得るを欲せざる者なし。諸侯の約に於て、大王、當に關中に王たるべし。關中の民、咸（ミナ）、之を知る。大王、職を失ひ漢中に入るや、秦の民恨みざる者なし。今、大王、擧げて東せば、三秦は檄を傳へて定む可き也（兵ヲ用フルヲ要セザル也）と。是に於て漢王大に喜び、自ら以爲へらく、信を得るや晩かりしと。遂に信の計を聽き、諸將の擊つ所を部署す。

八月、漢王、兵を擧げ、東、陳倉に出で、三秦を定む。漢の二年、關を出で、魏の河南を收む。韓殷の王皆降る。齊趙（二國ノ軍勢）を合せ共に楚を擊つ。四月、彭城に至る。漢の兵、敗散して還る。信、復た兵を收めて、漢王と滎陽に會し、復た擊つて楚を京索の間に破る。故を以て楚の兵、卒に西する能はず。漢ノ兵の、彭城に敗れ卻（シリゾ）くや、塞王

欣、翟王翳、漢を亡げて楚に降る。齊趙（二國）漢に反き楚と和せんと欲す。六月、魏王豹、謁歸し親の疾を視る。國に至れば、即ち河關を絶ち、漢に反き、楚と和を約す。漢王、酈生をして豹に說かしむれども、下らず。其八月、信を以て左丞相となし、魏を擊つ。魏王、兵を蒲阪に盛んにし、臨晉を塞ぐ。信、乃ち益（オホ）多く疑兵を爲（ツク）り、船を陳ね、臨晉を渡らんと欲するがごとくしつゝ、而も兵を伏せ夏陽より木罌缶（瓶ヲ木ニ縛リ附ケル也）を以て軍を渡し、安邑を襲ふ。魏王豹驚き、兵を引いて信を迎ふ。信遂に豹を虜にし、魏を定めて河東郡と爲す。漢王、張耳をして、信と俱に兵を引き、東北、趙ト代トを擊たしむ。後九月、代の兵を破り、夏說を閼與に禽にす。信の魏を下し代を破るや、漢輒ち人をして其精兵を收め、滎陽に詣り以て楚を距がしむ。

信、張耳と、兵數萬を以（ヒキ）ゐ、東、井陘を下り趙を擊たんと欲す。趙王及（ビ）成安君陳餘、漢且に之を襲はんとすと聞き、兵を井陘口に聚む。號して二十萬と稱す。廣武君李左車、成安君に說いて曰く、聞く漢の將韓信、西河を渡り、魏王を虜にし、夏說を禽に

し、新に血を閼與に喋(蹴也)むと。今乃ち輔くるに張耳を以てし、議して趙を下さんと欲す。此れ勝に乘じて國を去り遠く鬪ふ、其鋒當る可からず。臣聞く、千里糧を餽れば、士、飢色あり(糧食ノ繼ギ難キヲ云フ)、樵(薪ヲ取ル也)蘇(草ヲ取ル也)して後爨げば、師、宿飽せず(早ク飢ウル也)と。今、井陘の道、車は軌(車軸)を方ぶるを得ず、騎は列を成すを得ず、行くこと數百里、其勢、糧食必ず其後に在らん。願はくは足下、臣に奇兵三萬人を假せ。間道より其輜重を絕たん。足下、溝を深くし壘を高くし營を堅くして、與に戰ふ勿れ。彼前んでは鬪ふを得ず、退いては還るを得ず、吾が奇兵其後を絕ち、野に掠むる所なからしめば、十日に至らずして、兩將の頭、戲下(麾下)に致す可し。願はくは君、意を臣の計に留めよ。否(シカラ)ずんば必ず二子の爲めに禽にせられんと。成安君は、儒者也、常に義兵と稱し、詐謀奇計を用ひず、曰く、吾聞く、兵法に、十なれば則ち之を圍み、倍なれば則ち之と戰ふと。今、韓信の兵は數萬と號すれども、其實は數千に過ぎず。能く千里にして我を襲ふ。亦、已に罷れ極る。今、此の如きをしも避けて擊たず、後、大者あらば、何を以

てか之に加へん。則ち諸侯、吾を怯なりと謂ひて、輕々しく來つて我を伐たんと。廣武君の策を聽かず。廣武君、策用ひられず。韓信、人をして間視せしめたるが、(間者)其(廣武君ノ策)の用ひられざるを知り、還り報ず。(信)則ち大に喜び、乃ち敢て兵を引いて遂に下る。未だ井陘口に至らざること三十里にして、止まり舍す。夜半に傳發(令ヲ軍中ニ傳ヘシテ發セシムル也)し、輕騎二千人を選び、人ごとに一赤幟を持し、間道より、山に萆(オホ)(蔽也)はれて趙の軍を望ましむ。誡めて曰く、趙、我が走るを見ば、必ず壁(城壁)を空しうして我を逐はん。若(ナンヂ)等(等)疾く趙の壁に入り、趙の幟を拔いて、漢の赤幟を立てよと。其裨將(副將)をして飧(小食)を傳へしめて曰く、今日、趙を破り會食せん(趙ヲ破リテ後共ニ飽食セントナリ)と。諸將皆信ずるも莫きも、佯り應じて曰く、諾と。(信)軍吏に謂つて曰く、趙、已に先づ便地に據り壁を爲す。且つ彼、未だ吾が大將の旗鼓を見ざれば、未だ肯て吾(ガ)前行(前列)を擊たず。(コハ)吾が阻險に至つて還らんを恐るゝなりと。信乃ち萬人をして先づ行き、出でゝ水を背(セ)にして陳せしむ。趙の軍、望み見て(兵法ヲ知ラズトシテ)大に笑ふ。平旦(夜ガ明クルト)信、大將の旗鼓を建て、鼓行(大鼓ヲ鳴ラシ進軍ス)

して井陘口を出づ。趙、壁を開いて之を擊ち、大に戰ふこと良久し。是に於て信、張耳、佯り鼓旗を弃てゝ、水上の軍に走る。水上の軍、開いて之を入れ、復た疾く戰ふ。趙、果して壁を空しうして、漢の鼓旗を爭ひ、韓信張耳を逐ふ。韓信、張耳、已に水上の軍に入る。軍皆殊死して戰ひ、敗る可からず。前ニ信が出しし所の奇兵二千騎、共に趙軍の、壁を空しうし利を逐ふを候ひ、則ち馳せて趙の壁に入り、皆趙の旗を拔き、漢の赤幟二千を立つ。趙の軍、已に勝たず、信等を得る能はず、壁に還歸せんと欲す。壁皆漢の赤幟なり。大に驚きて、以爲へらく漢皆已に趙王の將を得たりと、兵遂に亂れて遁走し、趙の將、之遁走者を斬ると雖も、禁ずる能はざる也。是に於て漢の兵、夾擊して大に破り趙の軍を虜へ、成安君を泜水の上に斬り、趙王歇を擒にす。信乃ち軍中に令す、廣武君を殺す毋れ。能く生得する者あらば、千金に購はんと。是に於て廣武君を縛して戲下に致す者あり。信、乃ち其縛を解き、東鄉して坐せしめ、西鄉して對し、之に師事す。諸將、首虜を効し、休して、畢く賀す。因つて信に問うて曰く、兵

法に、山陵を右にし倍背也にし、水澤を前にし左にすと。而ニ今者今日將軍、臣等をして反つて水を背にして陳陣也せしめて曰く、趙を破り會食せんと。臣等服せず、然れども竟に以て勝てり。此れ何の術ぞやと。信曰く、此れ兵法に在り、顧ふに諸君察せざるのみ。兵法に曰はずや、之を死地に陷れて、而して後に生き、之を亡地に置きて、而して後に存すと。且つ信、素より士大夫を拊循撫循するを得たるに非ず、此れ所謂市人を驅つて之を戰はすもの、其勢、之を死地に置き、人人をして自ら戰を爲さしむるに非ずして、今之に生地を予へば、皆走らん、寧ろ尚ほ得て之を用ふ可けんやと。諸將皆服して曰く、善し。臣が及ぶ所に非ざる也と。

是に於て信、廣武君に問うて曰く、僕、北、燕を攻め、東、齊を伐たんと欲す。何若せば功あらんと。廣武君辭謝して曰く、臣聞く、敗軍の將は以て勇を言ふ可からず、亡國の大夫は以て存を圖る可からずと。今、臣は敗亡の虜なり。何くんぞ以て大事を權るに足らんと。信曰く、僕之を聞く、百里奚は虞に居て虞亡び、秦に在て秦霸たり

きと。蓋に愚にして秦に智なりしには非ず、其君之ヲ用ひたると用ひざりしと、聽きしと聰かざりしと也。誠に成安君をして足下の計を聽かしめば、信が若きは、亦已に禽と爲りしならん。足下を用ひざりしを以て、故に信、侍するを得る耳と。因つて固く問うて曰く、僕、心を委ね計を歸す。願はくは足下、辭すること勿れと。廣武君曰く、臣聞く、智者も千慮に必ず一失あり、愚者も千慮に必ず一得ありと。故に曰く、狂夫狂人の言も聖人は擇ぶと。願ふに恐らくは臣の計未だ必ずしも用ふるに足らざらんも、願はくは愚忠を效さん。夫れ成安君は百戰百勝の計ありながら、一旦にして之を失ひ、軍、鄗の下に敗れ、身、泜の上に死せり。今、將軍、西河を涉り、魏王を虜にし、夏說を閼與に禽にし、一舉して井陘を下り、朝を終へずして、趙の二十萬の衆を破り、成安君を誅し、名、海內に聞え、威、天下に震ふ。農夫は滅亡セントコト久シカラザルヲ恐ルヽガ故ニ耕作を輟め耒耜を釋て、褕衣美衣甘食し、耳を傾け以て命を待たざる者莫し。此の若きは、將軍の長ずる所也。然り而して衆勞れ卒罷れ、其實、用ひ難し。今、將軍、倦弊の兵を舉げ、之を燕の堅城の下に頓らさんと欲す。戰はんと欲するも、恐らくは久しうして力、拔く能はず、倦弊ノ情外ニ見はれ勢屈し、日を曠しうし、糧竭きて、弱燕服せず、齊必ず境を距ぎ以て自ら彊うせん。燕齊相持して下らずんば、則ち劉項劉王項王の權、未だ分つ所あらざる也。此の若きは、將軍の短なる所也。臣愚竊に以て亦過てりと爲す。故に善く兵を用ふる者は、短を以て長を擊たずして、長を以て短を擊つと。韓信曰く、然らば則ち何にか由らんと。廣武君對へて曰く、方今、將軍の爲めに計るに、甲を案じ兵を休め、趙を鎭め其孤を撫し、百里の內、牛酒、日に至り、以て士大夫を饗し、兵士卒に醉ましめ酒ヲ飲マヽ、北、燕路に首ふに如く莫し。而る後辯士をして、呎八寸尺の書を奉じ、其の長ずる所を燕に暴ラ顯ハスはさば燕ヲ以テ威勝ヲ示スルヲ云フ燕必ず敢て聽從せずんばあらじ。燕已に從はゞ、隨言者辯士をして東、齊に告げしめよ。齊は必ず風に從つて服せん。智者有りと雖も、亦齊の爲めに計るを知らざらん。是の如くんば、則ち天下の事皆圖る可き也。兵用兵ニハ固より聲を先にして實を後にするありとは、此を之れ謂ふ也と。韓信

曰く、善しと。其策に從ひ、使を發し燕に使はす。燕、風に從つて靡く。乃ち使をして漢に報じ、因つて張耳を立てゝ趙王と爲し、以て其國を鎮撫せんことを請はしむ。漢王之を許し、乃ち張耳を立てゝ趙王と爲す。

楚、數々奇兵をして河を渡り趙を擊たしむ。趙王耳、韓信、往來して趙を救ふ。因つて行々趙の城邑を定め、兵を發して漢に詣る。楚、方に急に漢王を滎陽に圍む。漢王、南に出で宛葉の間に之き、黥布を得、走つて城皐に入る。楚、又、復た急に之を圍む。六月、漢王、成皐を出で、東、河を渡り、獨り滕公と俱に張耳の軍に修武に從ひ、至り、傳舍に宿し、晨に自ら漢の使なりと稱し、馳せて趙の壁に入る。張耳、韓信未だ起きず、其臥内に卽き、上、其印符を奪ひ、以て諸將を麾召し、之を易置す。聽信耳起き、乃ち漢王の來れるを知り、大に驚く。漢王、兩人の軍を奪ひ、卽ち張耳をして趙の地を備守せしめ、韓信を拜して相國となし、趙の兵の未だ發せざる者を收め、齊を擊たしむ。信、兵を引いて東す。未だ平原を渡らず、漢王、酈食其をして已

に齊を說き下さしめたりと聞き、韓信止まらんと欲す。范陽の辯士蒯通、信に說いて曰く、將軍、詔を受け齊を擊つ。而して漢獨り間使を發し齊を下す。寧ろ詔あつて將軍を止むるか。何ぞ以て行くなきを得んや。且つ酈生は一士なり、軾に伏し三寸の舌を掉ひ、齊の七十餘城を下す。將軍は、數萬の衆に將たる歲餘にして、乃ち趙の五十餘城を下す。將たる數歲、反つて一豎儒の功に如かざるかと。是に於て信、之を然りとし、其計に從ひ、遂に河を渡る。齊、已に酈生に聽し、卽ち留め酒を縱き、漢に備ふるの守禦を罷む。信、因つて齊の歷下の軍を襲ひ、遂に臨菑に至る。齊王田廣、酈生を以て己を賣るとし、乃ち之を烹て、高密に走り、使をして楚に之き救を請はしむ。韓信、已に臨菑を定め、遂に東、廣を追うて、高密の西に至る。楚も亦龍且をして將たらしめ、號して二十萬と稱し、齊を救ふ。齊王廣ト龍且ト軍を幷せ信と戰ふ。未だ合はず。人或は龍且に說いて曰く、漢の兵は遠く鬪ひ窮戰す、其鋒、當る可からず。齊楚は自ら其地に居て戰ふ、兵、敗散し易し。如かず壁を深くし、齊王に令して

其信臣(親信スル所ノ臣)をして亡(ウシナ)ふ所の城を招かしめんには。亡城、其王在(イマ)し、楚、來り救ふと聞かば、必ず漢に反かん。漢の兵は二千里に客居す。齊の城皆之に反かば、其勢、食を得る所なく、戰ふ無くして降す可き也と。龍且曰く、吾、平生、韓信の人と爲りを知る、(彼)與し易き耳。且つ夫れ齊を救ひ戰はずして之を降さば、吾、何の功ぞ。今戰つて之に勝たば、齊の半を得可し。何ぞ止まるをせんと。遂に戰ひ、信と濰(ヰ)水を夾んで陳(陣)す。韓信乃ち夜、人をして萬餘の囊を爲りて、沙を滿盛し、(濰)水の上流を塞がしめ、軍を引いて半ば渡り、龍且を擊ち、佯り勝たずして、還り走る。龍且、果して喜んで曰く、吾固より信の怯なるを知れりと。遂に追うて水を渡る。信、人をして壅囊を決せしむ。水、大に至る。龍且の軍、大半、渡るを得ず、即ち急に擊つて龍且を殺す。龍且の水東の軍、散じ走る。齊王廣、亡げ走る。信、遂に北ぐるを追うて城陽に至り、皆、楚の卒を虜にす。

漢の四年、遂に皆齊を降し平げ、人をして漢王に言はしめて曰く、齊は僞詐にして變多し、反覆の國なり。(且)ツ南、楚に邊す。假王となり以て之を鎮めずんば、其勢、定まらじ。願はくは假王とならん。便ならんと。是の時に當り、楚、方に急に漢王を滎陽に圍む。韓信の使者至る。書を發く。漢王大に怒り、罵つて曰く、吾、此に困しみ、旦暮に若(ナンデ)の來つて我を佐くるを望む。(若)乃ち自立して王と爲らんと欲すと。張良、陳平(人ノ兩)漢王の足を蹈み、因て耳に附き語つて曰く、漢、方に利あらず、寧ろ信の王たるを禁せんや。如かず因つて立てゝ善く之を遇し、自ら爲めに守らしめんには。然らずんば變生ぜんと。漢王も亦悟り、因つて復た罵つて曰く、大丈夫(タル者)諸侯を定めば、即ち眞王と爲らん耳。何ぞ假を以て爲(セ)んと。乃ち張良をして往いて信を立てゝ齊王と爲し、其兵を徵し楚を擊たしむ。楚、已に龍且を亡(ウシナ)ふ。項王恐れ、盱眙(クチ)城の人武涉をして往いて齊王信に說かしめて曰く、天下、共に秦に苦しむこと久し。相與に力を戮せ秦を擊つ、秦已に破れ、功を計り地を割き、土を分ちて之に王とし、以て士卒を休す。今、漢王、復た兵を興して東し、人の分(頒分)を侵し、人の地を奪ひ、已に三秦を破

り、兵を引いて關を出で、諸侯の兵を收めて、以て東、楚を擊つ。其の意蓋く天下を呑むに非ずんば休まじ。其の厭き足るを知らざる、是の如く甚し。且つ漢王は必ず信と、す可からず、身、項王の掌握中に居りしこと數々なり。項王常に憐れんで之を活す。然るに脫するを得れば、輒ち約に倍き、復た項王を擊つ。其の親信す可からざるや、此の如し。今、足下、自ら以て漢王と厚交を爲し、之が爲めに力を盡し兵を用ふと雖も、終には之が爲めに禽にせられん。足下、須臾にして今に至るを得たる所以は、項王の尚ほ存するを以てなり。當今、二王の事、權、足下に在り。足下、右に投せば、則ち漢王勝ち、左に投せば、則ち項王勝たん。項王、今日亡びば、則ち次は足下を取らん亦滅ボサルベキナリ也。足下は項王と故緣故あり、何ぞ漢に反き、楚と連和し、天下を參分して之に王たらざる。今、此時を釋いて自ら漢に必とし、以て楚を擊つ。且つ智者たる固より此の若きかと。韓信、謝辭謝して曰く、臣テ項王に事へしに、官、郎中に過ぎず、位、執戟に過ぎず、言、聽かれず、畫、用ひられず。故に楚に倍いて漢に歸す。漢王、我

に上將軍の印を授け、我に數萬の衆を予へ、衣を解いて我に衣せ、食を推して我に食はせ、言聽かれ計用ひらる。故に吾以て此に至るを得たり。夫れ人深く我を親信するに、我之に倍くは不祥なり。死すと雖も易へじ。幸に信が爲めに項王に謝せよと。武涉、已に去る。齊人蒯通、天下の權の韓信に在るを知り、奇策を爲して之を感動せしめんと欲し、人を相するを以て韓信に說いて曰く、僕嘗て人を相するの術を受くと。韓信曰く、先生、人を相する何如と。通對へて曰く、貴賤は骨法に在り、憂喜は容色に在り、成敗は決斷に在り。此を以て之を參るに、萬に一を失はずと。韓信曰く、善し。先生、寡人を相する何如と。通對へて曰く、願はくは少しく左右ナカレト間ざけよと。信曰く、左右去れと。通曰く、君の面を相するに、封侯に過ぎず、又危ふくして安からず。君の背を相するに、貴乃ち言ふ可からずと。韓信曰く、何の謂ぞやと。蒯通曰く、天下初めて離を發するや、俊雄豪傑、號を建て聲呼し、天下の士、雲合霧集し、魚鱗ノ如ク起ツテ、飛走ハヤ合ズ世し、熛火と至り風と起る。此の時に當つてや、憂、秦を亡ぼすに在

る而已。今、楚漢、分爭し、天下の罪無きの人をして、肝膽、地に塗れ、父子、骸骨を中野に暴さしむる、勝げて數ふ可からず。楚人は彭城に起り、轉鬪し北ぐるを逐うて滎陽に至り、利に乘じて席卷し、威、天下に震ふ。然れども其後兵、京索の間に困しみ、西山に迫られて進む能はざるもの、此に三年なり。漢王は數十萬の衆に將とし、睢(ツイ)に距ぎ、山河の險を阻(ヘダ)て、一日に數戰して、而尺寸の功なく、折北挫ケテ北ゲルコトすれども救ふ(ハ)あらず、滎陽に敗れ、城阜に傷つき、遂に宛葉の間に走る。此れ所謂智勇高祖ト項羽トナリ云俱に困しむ者也。夫れ銳氣、險塞に挫かれて、糧食、內府に竭き、百姓罷れ極まつて怨望し、容容安定セザル貌として倚る所なし。臣を以て之を料るに、其勢、天下の賢聖出ツルに非ずんば、固より天下の禍を息むる能はじ。當今、兩主の命は、足下に縣(カ)る。足下、漢の爲めにせば則ち漢勝ち、楚に與せば則ち楚勝たん。臣願はくは腹心を披き、肝膽を輸(ツク)盡也し、愚計を效さん。恐らくは足下用ふる能はざらんを。足下誠に能く臣の計を聽かば、漢楚兩つながら利して俱に之を存し、天下を三分し、鼎足して居るに若くな

し。其勢、敢て先づ動く莫けん。夫れ足下の賢聖を以てして、甲兵の衆を有し、彊齊に據り、燕趙を從へ、空虛の地に出で、其後を制し、民の欲に因り、西鄉して百姓の爲めに命を請はゞ、則ち天下風と走りて響應せん、孰か敢て聽かざらん。大を割き彊を弱め、以て諸侯を立てん。諸侯已に立たば、天下服聽して、德を齊に歸せん。足下齊の故地を案じ、膠泗の地を有ち、諸侯の德を懷き、深拱高拱揖讓せば、則ち天下の君王、相率ゐて齊に朝せん。蓋し聞く天の與ふるを取らざれば、反つて其殃を受け、時至つて行はざれば、反つて其殃を受くと。願はくは足下之を孰慮せよと。韓信曰く、漢王、我を遇する甚だ厚く、我を載するに其車を以てし、我に衣するに其衣を以てし、我に食はすに其食を以てす。吾之を聞く、人の車に乘る者は、人の患を載せ、人の衣を衣る者は、人の憂を懷き、人の食を食する者は、人の事に死すと。吾豈に以て利に鄉ひ義に倍く可けんやと。蒯生曰く、足下自ら以て漢王に善しと爲し、萬世の業を建てんと欲す。臣竊に以て誤れりと爲す。始め常山王張耳成安君陳餘布衣たりし時は、相與に刎

頸の交を爲し、後、張黶、陳澤の事を爭うて、二人相怨み、常山王は項王に背き、項王を奉じ頭を嬰け竄逃して、漢王に歸し、漢王に兵を借りて東に下り、成安君餘を泜水の南に殺し、頭足、處を異にしつ、卒に天下の笑となれり。此二人の相與する、天下の至驩也、然り而して卒に相禽ふるは、何ぞや。患、多欲に生じて、人心測り難ければ也。今、足下、忠信を行ひ以て漢王に交はらんと欲するも、其交情ハ必ずや常山王成安君二君の相與せしより固き能はざる也。而して事は張黶、陳澤よりも多大ならん。故に臣以爲へらく足下の、漢王の己を危ふくせざるを必とする、亦誤れりと。昔シ太夫種、范蠡ノ輩人は亡越を存し、勾踐を霸とし、功を立て名を成し、而も身死亡せり。野獸已に盡きて、獵狗烹らる。夫れ交友を以て之を言へば、則ち張耳の成安君に與せしに如かざる者也、忠信を以て之を言へば、則ち太夫種、范蠡の勾踐に於けるに過ぎざる也。此二人の者は、以て觀るに足る。願はくは足下之を深慮せよ。且つ臣聞く勇略智勇才略主を震ふ者は身危ふくして、功、天下を蓋ふ者は賞せられずと。臣請ふ大王の功略を言

はん。足下、西河を涉り、魏王を虜にし、夏說を禽にし、兵を引き井陘を下つて、成安君を誅し、趙を徇へ、燕を脅かし、齊を定め、南、楚人の兵を擋くこと二十萬、東、龍且を殺し、西鄉して以て報ず。此れ所謂、功、天下に二無くして、略、不世出なる者也。今足下、主を震ふの威を戴き、賞せられざるの功を挾む。楚に歸せば、楚人、信せず、漢に歸せば、漢人震恐せん。足下、是れを持して安くにか歸せんと欲する。夫れ勢、人臣の位に在り、而も主を震ふの威ありて、名、天下に高し。竊に足下の爲めに之を危ぶむと。韓信、謝して曰く、先生且く休せよ。吾、將に之を念はんとすと。後數日、蒯通復た信ニ說いて曰く、夫れ聽は事の成敗ヲ候フニ在ルなり、計は事の機會ニ投ズルニ在ルなり。聽過まり、計失ひ、而も能く久安なる者は鮮し。聽、一二を失はざれば、亂すに言を以てす可からず、計、本末を失はざれば、紛らすに辭を以てす可からず。夫れ厮養の役に隨ふ者は、萬乘の權を失ひ、僨石ノ重ノ小物ナリを守る者は、卿相の位を闕く小ヲ惜フル者必ズ大ヲ遺ルヽヲ謂フ。故に智は決の斷也、疑は事の害也、毫釐の小計を審にすれば、天下の

大數を遊る。智、誠に之を知り、決して敢て行はざるは、百事の禍也。故に曰く、猛虎の猶豫するは、蜂蠆の螫を致す（毒ヲ行ル也）に若かず、駿驥（千里ノ馬）の踟躕（行カザル貌）するは、駑馬（最下等馬）の安歩するに如かず、孟賁（古ノ勇力者）の狐疑するは、庸夫の必至に如かざる也。舜・禹の如キ智有りと雖も、吟（嗟也）唫（嗚也）して言はざるは、瘖聾（オフシツンボ）の指麾（手ヲ用ヒテ）するに如かざる也と。此れ能く之を行ふを貴ぶを言ふ。夫れ功は成り難くして敗れ易く、時は得難くして失ひ易し。時か時か、再び來らず。願はくは足下詳に之を察せよと。韓信猶豫して、漢に倍くに忍びず、又、自ら以爲へらく、功多く、漢、終に我が齊を奪はじと。遂に蒯通に謝す。蒯通、說聽かれず、已にして佯り狂して巫と爲る。

漢王の固陵に困しむや、張良の計を用ひて、齊王信を召し、遂に兵に將とし垓下に會せしむ。項羽已に破る、高祖襲うて齊王の軍を奪ふ。漢の五年正月、齊王信を徙して楚王と爲し、下邳に都せしむ。信、國に至り、昔テ從食せし所の漂母を召し、千金を賜ふ。及下鄕の南昌の亭長に、百錢を賜うて曰く、公は小人也、德を爲して卒へずと。

己を辱しめたる少年の、己ナシテ胯下を出でしめし者を召し、以て楚の中尉と爲し、諸將相に告げて曰く、此れ壯士也。我を辱しめし時に方り、我寧ぞ之を殺す能はざらんや。之を殺すも名無し。故に忍んで此に就せり（今日ノ功ヲ成就セリ）と。項王の亡將鍾離昧の家ハ伊廬に在り。素より信と善し。項王死し、後亡げて信に歸す。漢王、昧を怨み、其の楚に在るを聞くや、楚に詔して昧を捕へしむ。信、初め國に之き、縣邑を行る、兵を陳ねて出入す。漢の六年、人、上書して、楚王信反すと告ぐるあり。高帝、陳平の計を以て、天子巡狩し、諸侯を會す。南方に雲夢（地名）あり。使を發して諸侯に告ぐ、陳に會せよ。吾、將に雲夢に游ばんとすと。實は信を襲はんと欲す。信、知らず。高祖、且に楚に至らんとす。信、兵を發して反せんと欲す。自ら度るに何等罪なし。上に謁せんと欲す、禽にせらるゝを恐る。人或は信に說いて曰く、昧を斬り上に謁せよ。上必ず喜び、患なからんと。信、昧を見、事を計る。昧曰く、漢の蹔つて楚を取らざる所以は、昧が公の所に在るを以てなり。若し我を捕へ以て自ら漢に媚びんと欲せば、吾、

今日死せん、公も亦手に隨つて亡びんと。乃ち信を罵つて曰く、公は長者に非ずと。卒に自刎す。信、其首を持し、高祖に陳に謁す。上、武士をして信を縛せしめ、後車に載す。信曰く、果して人の言の若し。狡兎死して良狗烹られ、高鳥盡きて良弓藏れ、敵國破れて謀臣亡ぶと。天下已に定まる、我固より當に烹らるべしと。上曰く、人、公の反を告ぐと。遂に信を械繫（カセ（桎）ヲ嵌メ索ヲカケル也）して雒陽に至り、信の罪を赦し、以て淮陰侯となす。信、漢王の其能を畏惡するを知り、常に病と稱して、朝從せず。信、此より日に上ヲ怨望し、居常鞅鞅（志不滿ノ貌）として、絳灌等と列するを羞づ。信、常て樊將軍噲に過る。噲跪き拜し送迎し、言、臣と稱す。曰く、大王、乃ち肯て臣に臨むと。信、門を出で笑つて曰く、生きては乃ち噲等と伍を爲すと。

上常て從容として信と、諸將の能不能（能、不能）を言ふ、各々差あり。上問うて曰く、我が如きは能く幾何に將たらんと。信曰く、陛下は能く十萬に將たるに過ぎずと。上曰く、君に於ては何如と。曰く、臣は多多にして益々善き耳と。上笑つて曰く、多多益々善

くば、何爲れぞ我が爲めに禽にせらるゝと。信曰く、陛下は兵に將たる能はざれども、善く將に將たり。此れ乃ち信の陛下の爲めに禽にせられし所以也。且つ陛下は所謂天授にして、人力に非ざる也と。

陳豨、拜せられて鉅鹿の守となり、淮陰侯に辭す（別辭ヲ告ゲシ也）。淮陰侯、其手を挈（ト）り、左右を辟（シリゾ）け、之と庭を步し、天を仰いで歎じて曰く、子、與に言ふ可きか。吾子と言ふあらんと欲する也と。豨曰く、唯、將軍、之を命せよと。淮陰侯曰く、公の居る所は、天下の精兵のある處也、而して公は陛下の信幸の臣也。假令（人、公の畔くを言ふとも、陛下必ず信ぜじ。再び至らば、陛下乃ち疑はん。三たび至らば、必ず怒つて自ら將たらん。吾、公の爲めに中より起らば（內應スルヲイフ）、天下圖る可き也と。陳豨、素（モト）より其能を知る。之を信じて曰く、謹んで教を奉ぜんと。漢の十一年、陳豨、果して反す。上自ら將として往く。信病んで從はず、陰に人をして豨の所に至らしめて曰く、第（ダイ）兵を舉げよ。吾、此より公を助けんと。信、乃ち家臣と謀り、夜、詔と詐つて、諸官の徒奴

(懲役人)を赦し、發して以て呂后ト太子トを襲はんと欲す。部署已に定まり、豨の報を待つ。其舍人、罪を信に得たるあり、信囚へて、之を殺さんと欲す。舍人の弟、變を上つり、信が反せんと欲するの狀を呂后に告ぐ。呂后、召さんと欲して、其の黨(ヤ)(傅ト通ズ)は就(ナ)らざらんを恐る。乃ち蕭相國と謀り、詐り、人をして上の所より來らしめて言はく、豨、已に死を得たり。列侯羣臣皆來リ賀せよと。相國又信を紿(アザム)いて曰く、疾むと雖も、强めて入つて賀せよと。信入る。呂后、武士をして信を縛せしめ、之を長樂宮の鐘室に斬る。信、斬に方り、曰く、吾、悔ゆらくは蒯通の計を用ひざりしことを。乃ち兒女子の爲めに詐らる。豈に天に非ずやと。遂に信の三族を夷ぐ。

高祖、已に豨の軍より來り、至つて、信の死を見、且つ喜び、且つ之を憐れみ、問ふ、信、死するとき亦何をか言ふと。呂后曰く、信言ふ、恨むらくは蒯通の計を用ひざりしことをと。高祖曰く、是れ齊の辯士也と。乃ち齊に詔して蒯通を捕ふ。蒯通至る。上曰く、若(ナンヂ)淮陰侯に反を敎へしかと。對へて曰く、然り。臣固より之を敎ふ。豎子、臣

の策を用ひず、故に自ら此に夷げしむ。如(モシ)彼の豎子(ニシテ)臣の計を用ひば、陛下安くんぞ得て之を夷げんやと。上怒つて曰く、之を烹よと。通曰く、嗟乎、寃なる哉、烹らるゝやと。上曰く、若(ナンヂ)、韓信に反を敎ふ。何の寃ぞと。對へて曰く、秦の綱絕え維弛ぶ(秦ノ失政ヲ弛フ)や、山東、大に擾れ、異姓竝び起り、英俊烏集す。秦、其鹿(天下)を失ひ、天下共に之を逐ふ。是に於て高材疾足の者、先づ(其鹿ヲ)得たり。跖の狗の堯に吠ゆるは、堯の不仁なるに非ず、狗は固より其主に非ざるに吠ゆ。是の時に當り、臣唯だ獨り韓信を知り、陛下を知るに非ず。且つ天下に、精を說くし鋒を持し、陛下の爲す所を爲さんと欲する者、甚だ衆し。顧ふに力能はざる耳。又盡く之を烹る可けんやと。高帝曰く、之を置けと。乃ち通の罪を釋す。

太史公曰く、吾、淮陰に如く。淮陰の人、余が爲めに言ふ、韓信、布衣たりし時と雖も、其志、衆と異なり。嘗(テ)其母死す、貧にして、以て葬る無し。然るに乃ち行いて高敞(廣袤)の地に母家(ヲ)營み、其旁に萬家を置く(萬家ノ守冢ハ王侯ノ事可からしめたりと。余、其母の冢を

視るに、良に然り。假令韓信をして道を學んで謙讓し、己の功に伐らず、其能に矜らざらしめたらんには、則ち庶幾かりしならんかな、漢家の勳に於て、以て周召太公（周公旦、召公奭、太公望）の徒に比し、後世、血食（祭ル也）す可かりしに。此に出づるを務めずして、天下、已に集まり、乃ち畔逆を謀る。宗族を夷滅せらるゝ、亦宜ならずや。

韓王信盧綰列傳 第三十三

韓王信は、故の韓の襄王の孽孫（妾腹ノ子ノ子也）。長八尺五寸。項梁の楚の後ナル懷王を立つるに及び、燕齊趙魏皆已に前に王たり、唯だ韓のみ後ある無し。故に韓の諸公子ノ一人ナルを以て韓の故地を撫定せんと欲す。項梁敗れて定陶に死するや、成、懷王所に奔る。沛公、兵を引いて陽城を擊ち、張良をして韓の司徒を以て韓の故地を降下せしむ。信を得、以て韓の將と爲し、其兵を將ゐ、沛公に從ひて、武關に入らしむ。沛公立つて漢王と爲る。韓信、從つて漢中に入り、廼ち漢王に說いて曰く、項王は諸將を近地に王とし、而して王獨り此に遠居す。此れ左遷也。士卒は皆山東の人、思ヒ跂テ歸ヲ望ム。其鋒の東に嚮ふ、軍中ノ將士ノ氣鋭クシテ東セント欲スルガ云フ に及ぼば、以て天下を爭ふ可しと。漢王遂つて三秦を定む。廼ち信に韓王と爲るを許し、先づ信を拜して韓の太尉と爲し、兵に將として韓の地を略せしむ。項籍の諸王を封ずるや、

皆國に就かしめしも、韓王成は項籍に從はず功無きを以て、遣つて國に就かしめず、更に以て列侯と爲す。項籍漢が韓信をして韓の地を略せしむと聞くに及び、廼ち故項籍、吳に游びし時の吳令鄭昌をして、韓王と爲り、以て漢を距がしむ。漢の二年、韓信、韓の十餘城を略定す。漢王、河南に至る。韓信、急に韓王昌を陽城に擊つ。昌降る。漢王廼ち韓信を立てゝ韓王と爲す。韓信常に韓の兵を將ゐて從ふ。三年、漢王、滎陽を出づ。韓王信、周苛等、滎陽を守る。楚、滎陽を敗るに及び、信、楚に降る。已にして亡ぐるを得、復た漢に歸す。漢、復た立てゝ以て韓王と爲す。竟に從つて項籍を擊破し、天下定まる。五年春、遂に與に符を剖いて韓王と爲し、潁川に王たらしむ。明年春、上、韓信の材武にして、王たる所、北は鞏洛に近く、南は宛葉に近く、東には淮陽有り、皆天下勁兵の處なるを以て、廼ち詔して、韓王信を徙して太原に王とし、以て北、胡を禦ぐに備へ、晉陽に都せしむ。信、上書して曰く、國、邊を被り、匈奴數々入る。晉陽は塞を去る遠し。請ふ馬邑に治せんと。上之を許す。信乃ち徙り、馬

邑に治す。秋、匈奴王冒頓、大に信を圍む。信數々胡に使はし和解を求めしむ。漢、兵を發して之を救ひ、信の數々間使し二心あるを疑ひ、人をして信を責讓せしむ。信、誅を恐れ、因つて匈奴と約し、共に漢を攻めんとし、反きて、馬邑を以て胡に降り、太原を擊つ。七年冬、上、自ら往いて信の軍を銅鞮に擊破し、其將王喜を斬る。信亡げて匈奴に走り、其將白土の人、曼丘臣、王黃等と、趙の苗裔趙利を立てゝ王と爲す。復た信が敗散の兵を收めて、信及び冒頓と謀り、漢を攻む。匈奴、左右の賢王をして萬餘騎に將とし、王黃等と廣武に屯し、以て南して晉陽に至り、漢の兵と戰はしむ。漢、大に之を破り、追うて離石に至る。後、復た之を破る。匈奴、復た兵を樓煩の西北に聚む。漢、車騎をして匈奴を擊破せしむ。匈奴、常に敗走す。漢、勝に乘じて北ぐるを追ふ。冒頓が代の上谷に居りと聞くや、高皇帝、晉陽に居り、人をして冒頓を視しむ。還り報じて曰く、擊つ可しと。上、遂に平城に至る。上、白登臺に出づ。匈奴の騎、上を圍む。上、乃ち人をして厚く閼氏に遺らしむ。

閼氏乃ち冒頓に說いて曰く、今、漢の地を得るも、猶ほ居る能はず。且つ兩主相厄せすと。居ること七日、胡騎稍〻引き去る。時に天大に霧ふる。漢、人をして往來せしむ。胡覺らず。護軍中尉陳平、上に言つて曰く、胡は全兵なり（弓矛ノミヲ用ヒテ戰伏ナキヲ云フ）。請ふ疆弩に兩矢を傅け、外に嚮はしめんと。徐行して圍を出で、平城に入る。漢の救兵も亦到る。胡騎遂に解き去る。漢も亦、兵を罷めて歸る。韓信、匈奴の爲めに兵に將とし往來して邊を擊つ。漢の十年、信、王黃等をして說いて辯士を誤らしむ。十一年春、故の韓王信、復た胡騎と入つて、參合に居り、漢を距ぐ。漢、柴將軍をして之を擊たしむ。（柴將軍）信に書を遺つて曰く、陛下は寬仁にして、諸侯畔亡するありと雖も、而れども復た歸すれば、輒ち故の位號を復し、誅せざる也。太王（韓信ヲ指ス）の知る所なり。今、王、敗亡を以て胡に走る。大罪あるに非ず。急に自ら歸せよと。韓王信、報じて曰く、陛下、僕を擯んで、閭巷に起し、南面して孤と稱せしむ。此れ僕の幸也。榮辱の事、僕、死する能はず。項籍に囚はる、此れ一の罪也。寇の馬邑を攻むるに及び、僕、堅

守する能はず、城を以て之に降る。此れ二の罪也。今、反つて寇の爲めに兵に將とし、將軍と一旦の命を爭ふ。此れ三の罪也。夫の種蠡（大夫種范蠡）は一罪なくして、身死亡す。今、僕は陛下に三罪あり、而して世に活くるを求めんと欲す。此れ伍子胥が吳に僵れたる所以也。今、僕、山谷の間に亡匿し、旦暮、蠻夷に乞貸す。僕の歸るを思ふ、蓋人（足ナ）の起つを忘れず、盲者の視るを忘れざるが如し。勢、不可なる耳と。遂に戰ふ。柴將軍、參合を屠り、韓王信を斬る。信の匈奴に入るや、太子と俱にす。頹當城に至るに及び、子を生む。因つて名づけて頹當と曰ふ。孝文の十四年に至り、頹當及び嬰、其衆を率ゐ漢に降る。漢、頹當を封じて弓高侯と爲し、嬰を襄城侯と爲す。吳楚の軍の時、弓高侯の功、諸侯に冠たり。子に傳へ孫に至る。孫、子なく、侯を失ふ。嬰の孫は不敬を以て侯を失ふ。頹當の孽孫（ナル）韓嫣、貴幸せられ、名富（名宮貴）當世に顯はる。其弟ノ說再び封せられ、數々將軍と稱し、卒に案道侯と爲る。子、代る。歲餘、法に坐して死す。後歲餘、說の孫曾、拜せられ

て、龍頞侯と爲り、說の後を續く。

盧綰は、豐の人也。高祖と里を同じうす。盧綰の親、高祖の太上皇と相愛す。男を生むに及び、高祖、盧綰、同日に生る。里中ノ人羊酒を持し兩家を賀す。高祖、盧綰、壯なるに及び、俱に書を學び、又相愛す。里中ノ人兩家の親相愛し、子を生むや日を同じうし、壯にして又相愛するを嘉し、復た兩家に羊酒を賀す。高祖、布衣たりし時、吏事あり、爲メ辟匿す。盧綰、常に隨つて出入上下す。高祖初めて沛に起るに及び、盧綰、客を以て從ひ、漢中に入つて、將軍と爲り、常に中に侍す。從つて東し項籍を擊つや、太尉を以て常に從ひ、臥內に出入す。衣被飲食賞賜、羣臣敢て望む莫し。蕭曹等、特に事を以て禮せらるゝと雖も、其親幸に至つては、盧綰に及ぶ莫し。綰、封せられて長安侯と爲る。長安は故の咸陽なり。漢の五年冬、項籍を破り、廼ち盧綰をして別將たらしむ。綰劉賈と、臨江王共尉を擊つて、之を破る。七月、還り、漢王に從つて燕王臧荼を擊つ。臧荼降る。高祖、已に天下を定む。諸侯、劉氏に非

すして王たる者七人。盧綰を王とせんと欲すれども、羣臣の之を望むすべきが爲に、臧荼を虜にするに及び、廼ち詔を諸將相列侯に下し、羣臣の功ある者を擇び、以て燕王と爲さしむ。羣臣、上の盧綰を王とせんと欲するを知る。皆言つて曰く、太尉長安侯盧綰は常に從つて天下を平定す、功最も多し。燕に王とす可しと。高祖詔して之を許す。漢の五年八月、廼ち盧綰を立てゝ燕王と爲す。諸侯王、幸愛を得る、燕王に如くは莫し。漢の十一年秋、陳豨、代の地に反す。高祖、邯鄲に如き、豨の兵を擊つ。燕王綰も亦其臣張勝を匈奴に使はし、豨等の軍破れたりと言はしむ。張勝、胡に至る。故の燕王臧荼の子、衍、出亡して胡に在り、張勝を見て曰く、公の燕に重んぜらるゝ所以は、胡の事に習ふを以て也。燕久しく存する所以は、諸侯數々反し、兵連つて決せざるを以て也。今、公、燕の爲めに、急に豨等を滅ぼさんと欲す。已に豨等盡さば、次は亦燕に至らん。公等も亦且に虜にせられんとす。公何ぞ燕をして且く陳豨を擊つこと

ナ綏うして、胡と和せしめざる。事、寛ならば、長く燕に王たるを得ん。其中ニ卽し漢の急あらば、以て燕國を安んず可しと。張勝以て然りと爲し、廼ち私に匈奴をして豨等を助け燕を擊たしむ。燕王綰、張勝ガ胡と反すと疑ひ、上書して張勝を族滅せんと請ふ。勝還り、具に爲す所以の者を道ふ。燕王寤り、廼ち他人を詐り論じて、勝の家屬を脫シ、匈奴の間を爲すを得しめ、而して陰に范齊をして陳豨の所に之かしめ、陳豨ナシ久しく亡げ、兵を連ねて決する勿らしめんと欲す。漢の十二年、東、黥布を擊つ。豨、常に兵に將とし代に居る。漢、樊噲をして擊つて豨を斬らしむ。其神將降り、言ふ、燕王綰、范齊をして計謀を豨の所に通ぜしむと。高祖、使をして盧綰を召さしむ。綰、病と稱す。上、又、辟陽侯審食其、御史太夫趙堯をして、往いて燕王を迎へ、因つて左右を驗問せしむ。綰、愈々恐れ閉匿し、其幸臣に謂つて曰く、劉氏に非ずして王たるは、獨り我と長沙王と耳。往年春、漢、淮陰侯韓信を族し、夏、彭越を誅す、皆呂后の計なり。今、上、病んで、呂后に屬任す。呂后は婦人、專ら以て異姓の王たる者及び大功臣を誅するを事とせんと欲すと。廼ち遂に病と稱して行かず。其左右者亡匿し、語頗る泄る。辟陽侯、之を聞き、歸つて具に上に報ず。上益々怒る。又、匈奴の降者を得たり。降者、言ふ、張勝亡げて匈奴に在り、燕の使たりと。是に於て上曰く、盧綰果して反すと。樊噲をして燕を擊たしむ。燕王綰悉く其宮人家屬、騎數千を將ゐ、長城の下に居て、候伺し、幸に上の病愈ユエンエンエンえば、自ら入つて謝せんとす。四月、高祖崩ず。盧綰、遂に其衆を將ゐ、亡げて匈奴に入る。匈奴以て東胡の盧王と爲す。綰、蠻夷の爲めに侵奪せられ、常に復歸を思ふ。居ること歲餘、胡中に死す。高后の時、盧綰の妻子亡げて漢に降る。會々高后病んで、見ゆる能はず、燕の邸に舍し、爲めに盛酒して之に見えんと欲す。高后、竟に崩じ、見ゆるを得ず。盧綰の妻も亦病んで死す。孝景中六年、盧綰の孫ナル他之、東胡王を以て降る。封じて亞谷侯と爲す。陳豨は、宛朐の人也。始めに高祖ニ從ふを得たる所以を知らず。高祖の七年冬、韓王信、反して匈奴に入るに及び、上、平城に至つて還り、廼ち豨を封じて列侯となす。趙の

相國を以て將とし、趙代の邊兵を監せしむ。邊兵皆稀ニ屬す。稀常て告げ歸り、趙を過ぐ。趙の相周昌、稀の賓客の之陳稀に隨ふ者千餘乘にして、邯鄲の官舍皆滿つるを見る。稀、賓客を待つ所以、布衣の交の如く、皆客の下に出づ。稀、還り代に之く。周昌廼ち入つて見ゆるを求め、上に見え具に言ふ、稀の賓客の盛んなること甚し。兵を外に擅にすること數歲。恐らく變あらんと。上乃ち人をして稀が客の代に居る者の財物、諸の不法の事を覆案繰リ返シテ取調ベル也せしむ。多く稀に連引す。稀恐れ、陰に客をして使を王黃、曼丘臣二人ハ韓王信ノ將の所に通せしむ。高祖の七年七月、太上皇崩ずるに及び、人をして稀を召さしむ。稀、病甚だしと稱す。九月、遂に王黃等と反し、自立して大王漢書ニハ代王ニ作ル と爲り、趙代を劫略す。上聞き、乃ち趙代の吏人の、稀の爲めに詿誤アヤマラルル也 劫略せられしものを赦し、皆之を赦す。上自ら往いて、邯鄲に至り、喜んで曰く、稀、南、漳水に據り、北、邯鄲を守らず。其の能く爲す無きを知ると。趙の相、常山の守ト尉トを斬らんと奏して曰く、常山三十五城、稀、反して其二十城を亡ふと。上問うて曰く、守尉、反するかと。對へて曰く、反せずと。上曰く、是れ力足らざる也と。之を赦し、復た以て常山の守尉と爲す。上、周昌に問うて曰く、趙も亦、壯士の將たらしむ可き者あるかと。對へて曰く、四人ありと。四人謁す。上、慢罵して曰く、豎子能く將たるかと。四人慙ぢ伏す。上、之を各千戶に封じ、以て將と爲す。左右諫めて曰く、獨漢より入つて楚を伐ち、功未だ徧く行はれず。今、此れ何の功あつて封ずると。上曰く、若ガ知る所に非ず。陳稀反す、邯鄲以北は皆稀の者なり。吾、羽檄を以て天下の兵を徵せども、未だ至る者あらず。今唯だ獨り邯鄲中の兵耳。吾、胡ぞ四千戶を愛まん。四人を封ずるは、以て趙の子弟を慰むるなりと。皆曰く、善しと。是に於て上曰く、陳稀の將は誰ぞと。曰く、王黃、曼丘臣ノ二人ニテ、皆故ハ賈人なりと。上曰く、吾之を知ると。廼ち各千金を以て、黃臣等を購ふ。十一年冬、漢兵擊つて陳稀の將侯敞、王黃を曲逆の下に斬り、稀の將張春を聊城に斬り、首を斬ること萬餘、太尉勃周勃入つて太原ト代トの地を定む。十二月、上自ら東垣を擊つ。東垣下らず。卒、上を罵

る。東垣降る。卒の降りし者は之を斬り、降らざりし者は之を赦し、東垣を更め命名して、眞定と爲す。王黃、曼丘臣、其の主漢王の之を賜賞するを受け、皆生得す。故を以て陳豨の軍遂に敗る。上、還つて、洛陽に至る。上曰く、代は常山の北に居り。趙は廼ち山海より之を有つ、遠しと。廼ち子ノ恒を立てゝ、代王となし、中都に都せしむ。代、雁門、皆代に屬す。高祖十二年冬、樊噲の軍卒、追うて豨を靈丘に斬る。」太史公曰く、韓信、盧綰は、素より積德累善の世に非ず、一時の權變を徼幸して、詐力を以て功を成す。漢の初めて定まるに遭ひ、故に地を列して王となる。然れども南面して孤と稱するを得しも、內、彊大に疑はれ、外、蠻貊に倚り以て援けとなす。是を以て日に疎まれ自ら危ぶむ。事窮まり智困じみ、卒に匈奴に赴く。豈に哀しからずや。陳豨は梁の人、其少時、數々魏の公子無忌を稱慕す。軍に將となし邊を守るに及び、賓客を招致して士に下る。名聲、節に過ぐ。周昌、之を疑ひて、趙の邊に及ぶんを懼る。會邪人、說を進め、遂に無道に陷る。於戲悲しい夫、失れ計の生熟成敗の人に繫ける係甚深し。

田儋列傳 第三十四

田儋は、狄の人にて、故の齊王田氏の一族也。儋の從弟田榮、榮の弟田橫、皆豪雄にして、宗族強く、能く人を得たり。陳涉の初めて起りて楚に王たるや、周市をして魏の地を略定せしめ、北、狄に至る。狄、城守す。田儋、伴り其奴を縛し、少年を從へ廷に之き、謁げて奴を殺さんと欲するまねし、狄の令を見るや、因つて令を擊殺す。而して豪吏の子弟を召して曰く、諸侯皆秦に反いて自立す。齊は、古の建國、儋は田氏なり、當に王たるべしと。遂に自立して齊王と爲り、兵を發して以て周市を擊つ。周市の軍、還り去る。田儋因つて兵を率ゐ東、齊の地を略定す。秦の將章邯、魏王咎を臨濟に圍む、急なり。魏王、救を齊に請ふ。齊王田儋、兵を將ゐて魏を救ふ。章邯、夜、枚を銜み、擊つて大に齊魏の軍を破り、田儋を臨濟の下に殺す。儋の弟田榮、儋の餘兵を收め、東阿に走る。齊人、王田儋死すと聞き、廼ち故の齊王建の弟田假を立

て、齊王と爲し、田角を相と爲し、田間を將と爲し、以て諸侯を距ぐ。田榮の東阿に走るや、章邯、追うて之を圍む。項梁、田榮の急を聞き、廼ち兵を引いて章邯の軍を東阿の下に擊破す。章邯、走つて西す。項梁、因つて之を追ふ。而して田榮は齊の假を立つるを怒り、廼ち兵を引いて歸り、擊つて齊王假を逐ふ。假亡げて楚に走る。齊の相、角、亡げて趙に走る。角の弟田間、前に救を趙に求む。因つて留まり、敢て歸らず。田榮乃ち田儋の子市を立てゝ齊王と爲し、榮、之に相たり、田橫、將たり、齊の地を平ぐ。

項梁既に章邯を追ふ。章邯の兵、益々盛なり。項梁、使をして趙齊に告げ、兵を發し共に章邯を擊たしむ。田榮曰く、楚をして田假を殺し、趙をして田角、田間を殺さしめば、廼ち肯て兵を出さんと。楚の懷王曰く、田假は與國の王。窮して我に歸す。之を殺すは不義なりと。趙も亦、田角、田間を殺し以て齊に市せず（以テ齊ノ歓心ヲ買ハザル也）。齊曰く、蝮（マムシ）手を螫せば則ち手を斬り、足を螫せば則ち足を斬る。何となれば、身を害する

が爲め也。今、田假、田角、田間の楚趙に於ける、直に手足の戚也に非ざる也。何の故に殺さゞる。且つ秦、復た志を天下に得ば、則ち秦ニ對シ事を用ひし者の墳墓を齮齕也せんと。楚趙、聽かず。齊も亦怒り、終に肯て兵を出さず。章邯、果して項梁を敗り殺し、楚の兵を破る。楚の兵、東に走る。而して章邯、河を渡り、趙を鉅鹿に圍む。項羽、往いて趙を救ふ。此に由り田榮を怨む。

項羽、既に趙を存し、章邯等を降し、西、咸陽を屠り秦を滅ぼして、侯王を立つるや、廼ち齊王田市を徙し、更めて膠東に王とし、即墨に治せしむ即墨ニ都スルヲ云フ。齊の將田都、項羽ニ從うて共に趙を救ひ、因つて關に入る。故に都を立てゝ齊王と爲し、臨淄に治す。故の齊王建の孫に田安あり。項羽、方に河を渡り趙を救ふや、田安、齊北の數城を下し、兵を引いて項羽に降る。項羽、田安を立てゝ齊北王と爲し、博陽に治せしむ。田榮は、項梁に負き、兵を出し楚趙を助け秦を攻むるを肯んぜざりしが以に、故に王たるを得ず。趙の將陳餘も亦職を失ひ、王たるを得ず。二人俱に項王を怨む。項王、既

に歸り、諸侯各々國に就く。田榮、人をして兵を將ゐて陳餘を助けしめ、趙の地に反せしむ。而して榮も亦、兵を發し以て田都を距ぎ擊つ。田都、亡げて楚に走る。田榮、齊王市を留め、膠東に之かしめず。市の左右曰く、項王彊暴なれば、王、當に膠東に之くべし。國に就かずんば、必ず危ふからんと。市惑れ、廼ち亡げて國に就く。田榮怒つて追擊し、齊王市を即墨に殺し、還りて濟北王安を攻殺す。是に於て、田榮、廼ち自立して齊王と爲り、盡く三齊の地を幷す。項王、之を聞いて、大に怒り、廼ち北、齊を伐つ。齊王田榮、兵敗れ、平原に走る。平原の人、榮を殺す。項王、遂に齊の城郭を燒夷し、過ぐる所の者は盡く之を屠る。齊人、相聚まり之に畔く。榮の弟橫、齊の散兵を收めて、數萬人を得、反つて項羽を城陽に擊つ。而して漢王、諸侯を率ゐ、楚を敗り、彭城に入る。項羽、之を聞き、廼ち齊を釋てゝ歸り、漢を彭城に擊つ。因つて連りに漢と戰ひ、滎陽に相距ぐ。故を以て田橫、復た齊の城邑を收むるを得、田榮の子廣を立てゝ齊王と爲し、而して橫、之に相たり。國政を專にす。政、巨細と無く、

皆、相に斷ず。

横、齊を定むる三年、漢王、酈生をして往いて齊王廣及び其相國横を說き下さしむ。横、以て然りと爲し、其歷下の軍を解く。漢の將韓信、兵を引き、且に東、齊を擊たんとす。齊初め華無傷、田解をして歷下に軍し以て漢を距がしむ。漢の使至る、廼ち守戰の備を弛め、酒を縱き、且に使を遣はし漢と平がんとす。漢の將韓信、已に趙燕を平げ、襲うて齊の歷下の軍を破り、因つて臨淄に入る。齊王廣、相横、怒り、酈生を以て己を賣るとして、酈生を烹る。齊王廣は、東、高密に走り、相横は博陽に走り、守相田光は城陽に走る。將軍田旣は膠東に軍す。楚、龍且をして齊を救はしむ。齊王、與に合し高密に軍す。漢の將韓信、曹參と、破つて龍且を殺し、齊王廣を虜にす。漢の將灌嬰、追うて齊の守相田光を得、博陽に至る。而して横、齊王死すと聞き、自立して齊王と爲り、還つて嬰を擊つ。嬰、横の軍を嬴下に敗る。田横、亡げて梁に走り、彭越に歸す。彭越、是の時、梁の地に居て中立し、

且つ漢の爲めにし、且つ楚の爲めにす。韓信、已に龍且を殺す。因つて曹參をして兵を進め田旣を膠東に破り殺さしめ、灌嬰をして齊の將田吸を千乘地名に破り殺さしむ。韓信、遂に齊を平げ、自立して齊の假王と爲るを乞ふ。漢因つて之を立つ。

後歲餘、漢、項籍を滅ぼす。漢王立つて皇帝と爲り、彭越を以て梁王と爲す。田横、誅を懼れ、其徒屬五百餘人と海に入り、島中に居る。高帝、之を聞き、以爲へらく、田横兄弟、本、齊を定む。齊人の賢者多く附く。今、海中に在り。收めずんば、後恐らくは亂を爲さんと。廼ち使をして田横の罪を赦さしめて之を召す。田横、因つて謝して曰く、臣、陛下の使酈生を烹る。今聞く、其弟酈商、漢の將と爲つて賓なりと。臣、恐懼し、敢て詔を奉せず。請ふ庶人と爲り海島の中を守らんと。使還り報ず。高皇帝廼ち衛尉酈商に詔して曰く、齊王田横卽し至るも、人馬從者敢て動搖する者あらば、族夷を致さんと。廼ち復た使をして節を持し具に告ぐるに商に詔するの狀を以てせしめて曰く、田横來らば、大なる者は王とし小なる者は廼ち侯とせん耳。來らずんば、且

に兵を舉げ誅を加へんとすと。田横、廼ち其客二人と傳舍（宿次馬車）に乘じ雒陽に詣る。未だ至らざる三十里、尸鄉の廐置（驛也）に至る。横、使者に謝（挨拶）して曰く、人臣、天子に見ゆる、當に洗沐すべしと。止留す。其客に謂つて曰く、横始め漢王と俱に南面して孤と稱す。今、漢王は天子たり、而して横は廼ち亡虜（トリコ）と爲つて北面して之に事ふ。其恥、固に已甚（ハナハ）だし。且つ吾、人の兄を烹、其弟と肩を併べて其主に事ふ、縱ひ彼、天子の詔を畏れ、敢て我を動かさざるも、我、獨り心に媿（ハ）ぢざらんや。且つ陛下の我を見んと欲する所以は、一たび吾が面貌を見んと欲するに過ぎざる耳。今、陛下、洛陽に在り。今、吾が頭を斬り、洛陽（迄）三十里の間を馳するも、吾（カ）形容、尚ほ未だ能く敗れず、猶ほ觀る可けんと。遂に自刎す。客をして其頭を奉じ、使者に從ひ、馳せて之を高帝に奏せしむ。高帝曰く、嗟乎以ある夫（カナ）、布衣より起り、兄弟三人更々（カハルガハル）王たること。豈に賢ならずやと。之が爲めに流涕して、其二客を拜して都尉と爲し、卒二千人を發し、王者の禮を以て田横を葬むる。既に葬むる。二客、其冢旁に孔を穿ち、皆自刎して、

之に下り從ふ。高帝、之を聞き、廼ち大に驚き、以（ゆ）へらく田横の客皆賢なりと。吾聞く、其餘尚ほ五百人、海中に在りと。使を遣して之を召さしむ。至れば則ち田横の死を聞き、亦皆自殺せり。是に於て廼ち田横兄弟の能く士を得るを知る也。

太史公曰く、甚だしいかな、蒯通の謀つて、齊を亂し、淮陰（韓信）を驕らし、其の卒に此兩人（韓信田横）を亡ぼしたるや。蒯通は、善く長短の說を爲し、戰國の權變を論じ、八十二首（ノ文）を爲る。通、齊人安期生に善し。安期生、嘗て項羽に干（ヤト）む。項羽、其筴（策也）を用ふる能はず。已にして項羽、此兩人（安期生蒯通）を封ぜんと欲す。兩人、終に受くるを肯んせず、亡げ去る。田横の高節なる、賓客、義を慕うて横に從ひ死す。豈に至賢に非ずや。余、因つて此（五百人ノ客皆賢ニシテ）に列す。善く（ハカ）謀（ハカリ）ごとを爲（ナ）さざる者無きに、能く圖（謀リテ國ヲ存ス）るノ莫きは、何ぞや。

樊酈滕灌列傳 第三十五

舞陽侯樊噲は、沛の人也。屠狗を以て事と爲す。高祖と俱に隱る。初め高祖に從ひ豐に起り、攻めて沛を下す。高祖、沛公となるや、噲を以て舍人と爲す。從つて胡陵、方與を攻め、還つて豐を守る。泗水の監を豐縣下に擊つて、之を破り、復た東、沛を定む。泗水の守を薛縣の西に破り、司馬尼と碭縣の東に戰ひ、敵を卻け、首を斬ること十五級。爵國大夫を賜はり、常に沛公に從ふ。章邯の軍を濮陽に擊ち、城を攻めて、先登し、首を斬ること二十三級、爵列大夫を賜はる。復た常に從ふ。從つて城陽を攻めて、先登し、戶牖地名を下し、李由の軍を破り、首を斬ること十六級、上間爵名を賜はる。從つて東郡の守尉を成武に攻め圍み、敵を卻け、首を斬ること十四級、捕虜十一人、爵五大夫を賜はる。從つて秦の軍を擊ち、亳の南に出づ。河間の守、杠里に軍す。之を破り、趙賁の軍を開封の北に擊破し、敵を卻け先登し、侯一人、首六十八級を斬り、二十七人を捕虜にしたるを以て、爵卿を賜はる。從つて、楊熊の軍を曲遇に攻破し、宛陵を攻めて、先登し、首を斬る八級、捕虜四十四人、爵封を賜はり、賢成君と號す。從つて、長社、轘轅を攻め、河津を絕り、東、秦の軍を尸地名の南に攻め、秦の軍を犨に攻め、南陽の守齮を陽城の東に破り、宛城を攻めて、先登し、西、酈に至り、敵を卻け、首を斬ること二十四級、捕虜四十人なりしを以て、重封を賜はる。武關を攻め、霸上に至る、都尉一人、首十級を斬り、捕虜百四十六人、降卒二千九百人。

項羽、戲下に在り、沛公を攻めんと欲す。沛公、百餘騎を從へ、項伯に因つて、面り項羽に見え、閉關の事意也ある無きを謝陳述す。項羽既に軍士に饗す。中酒酣にして、亞父范增謀つて、沛公を殺さんと欲し、項莊をして劍を拔き坐中に舞はしむ。沛公を擊たんと欲す。項伯、常に之を肩ニテ蔽す。時に、獨り沛公と張良と入つて坐するを得。樊噲、營外に在り、事の急なるを聞き、乃ち鐵盾を持し、入つて營に到る。營の衛兵噲を止む。噲、直に撞入して、帳下に立つ。項羽、之を目し、問ふ、誰とか爲すと。張

良曰く、沛公の參乘樊噲なりと。項羽曰く、壯士なりと。之に巵酒（巵酒）と彘肩（豚肩肉）を賜ふ。噲、既に酒を飲み、劒を拔いて肉を切り、食つて之を盡す。項羽曰く、能く復た飲まんかと。噲曰く、臣、死も且つ辭せず、豈に特に巵酒をや。且つ沛公先づ入つて咸陽を定め、師を霸上に暴し、以て大王を待つ。大王、今日至り、小人の言を聽き、沛公と隙あり。臣、天下解け、心、大王を疑はんを恐るゝ也と。項羽、默然たり。沛公、厠に如き、樊噲を麾き去る。既に出づ。沛公、車騎を留め、獨り二騎に騎し、樊噲等四人と步從し、間道の山下より歸り、霸上の軍に走る。而して張良をして項羽に辭せしむ。項羽も亦因つて遂に已め、沛公を誅するの心無し。是の日、樊噲肇つて營に入り項羽を誚讓する微かりせば、沛公の事や幾んど殆ふかりしならん。明日、項羽、入つて咸陽を屠る。沛公を立てゝ漢王と爲す。

漢王、噲に爵を賜うて列侯と爲し、臨武侯と號す。遂りて郎中と爲り、從つて漢中に入り、遂つて三秦を定む。別に西丞（西縣ノ丞）を白水の北に擊ち、輕車騎を雍の南に雍擁也し、

之を破る。從つて雍の廢城を攻め、先登し、章平の軍を好時に擊ち、城を攻めて、先登し、陣を陷れ、櫟の令丞各一人、首十二級を斬り、二十人を虜にす。郎中騎將に遂る。從つて秦の車騎を壤（鄭）東に擊ち、敵を卻く。遂つて將軍と爲る。趙賁を攻め、郿、槐里、柳中、咸陽を下す。廢丘に灌ぐ（水攻ニスル也）、其功最第一なり。櫟陽に至り、食邑を杜の樊鄉に賜はる。從つて項籍を攻め、姜棗を屠り、王武、程處の軍を外黃に擊破し、鄒、魯、瑕丘、薛を攻む。項羽、漢王を彭城に敗り、盡く復た魯梁の地を取る。噲、遂つて滎陽に至る。平陰の三千戶を益し食む。將軍を以て廣武を守る、一歲。項羽、引いて東す。高祖に從ひ、項籍を擊ち、陽夏を下し、楚の周將軍の卒四千人を虜にし、項籍を陳に圍み、大に之を破つて、胡陵を屠る。項籍既に死し、漢王、帝と爲る。噲、堅く守り、戰、功ありしを以て、八百戶を益し食ましむ。高帝に從ひ、反ける燕王臧荼を攻め、荼を虜にし、燕の地を定む。楚王韓信、反す。噲從ひ、陳に至り、信を取へ楚を定む。更に爵列侯を賜ひ、諸侯と符を剖き、世世絕つ勿らしむ。舞陽を食み、

號して舞陽侯と爲り、前に食む所を除かる。將軍を以て高祖に從ひ、反ける韓王信を代に攻め、霍人より以往、雲中に至り、絳侯等と共に之を定む。千五百戶を益し食む。因つて陳豨を擊ち、曼丘臣の軍と襄國に戰ひ、栢人を破り、先登し、淸河、常山、凡そ二十七縣を降定し、東垣を殘ふ。遷つて左丞相と爲り、恭母印、尹潘の軍を無終、廣昌に破り、豨の別將胡人王黃の軍を代の南に破る。因つて韓信の軍を參合に擊つ。軍の將ゐる所の卒、韓信を斬る。豨の胡騎を橫谷に破り、將軍趙旣を斬り、代の丞相馮梁、守孫奮、大將王黃、將軍太卜、太僕解福等十人を虜にし、諸將と共に代の鄕邑七十三を定む。其後、燕王盧綰、反す。噲、相國を以て盧綰を擊ち、其丞相を破り、薊の南に抵り、燕の地を定むる、凡そ縣十八、鄕邑五十一。邑千三百戶を益し食む。定めて舞陽五千四百戶を食む。從つて首を斬る百七十六級、虜二百八十八人、別に軍を破る七、城を下す五、郡を定むる六、縣五十二、丞相一人、將軍十二人、二千石已下三百石に至る者十一人を得たり。

噲、呂后の女弟也呂須を以て婦妻也と爲し、子、伉を生む。故に其の諸將に比し高祖ト噲ノ親係最も親し。先に黥布反する時、高祖嘗て病甚だし。人を見るを惡み、禁中に臥し、戶者門番に詔し、羣臣を入るゝを得る無からしむ。羣臣絳灌等敢て入る莫きこと十餘日。噲乃ち闥禁中ノ小門を排して直に入る。大臣、之に隨ふ。上、獨り一宦者を枕にして臥す。噲等、上を見、流涕して曰く、始め陛下、臣等と豐沛に起り、天下を定む、何ぞ其の壯なるや。今、天下、已に定まる、又何ぞ憊るゝや。且つ陛下、病甚だし。大臣震恐す。陛下臣等を見て事を計らず、顧つて獨り一宦者と共ニ居テ息ヲ絕絕息たんとするか。且つ陛下獨り趙高の事を見ずやと。高祖笑つて起つ。

其後、盧綰、反す。高帝、噲をして相國を以て燕を擊たしむ。是の時、高帝、病甚だし。人、噲を惡するヲあり、曰ク噲ハ呂氏に黨す。卽し上、一日、宮車晏駕崩御ヲ謂フせば、則ち噲、兵を以て盡く戚氏戚夫人、趙王如意の屬を誅滅せんと欲すと。高帝之を聞くや、大に怒り、乃ち陳平をして絳侯を載せ噲ニ代り將とし軍中に卽き噲を斬らしむ。陳平、

呂后を畏れ、噲を執へて長安に詣る。至れば則ち高祖、已に崩ず。呂后、噲を釋し、爵邑を復せしむ。孝惠六年、樊噲卒す。謚して武侯と爲す。子、伉、代り侯たり。而して伉の母の呂須も亦臨光侯と爲る。高后の時、事を用ひ權を專にす。大臣、盡く之を畏る。伉、代り侯たる九歲、高后、崩ず。大臣、諸呂、呂須の婚屬を誅し、因つて伉を誅す。舞陽侯、中絕する數月、孝文帝、既に立ち、乃ち復た噲の他の庶子市人者を封じて舞陽侯と爲し、故の爵邑を復す。市人立ち二十九歲、卒す。謚して荒侯と爲す。子の他廣、代り侯たり。其後六歲、侯家の舍人、罪を他廣に得、之を怨み、乃ち上書して曰く、荒侯市人病み、人たる能はず人道ヲ行フ能ハザルヲ云フ其夫人をして其弟と亂姦せしめて他廣を生む。他廣は實に荒侯の子に非ず。當に代り後たるべからずと。詔して吏に下す。孝景中六年、他廣、侯を奪はれ庶人と爲り、國除かる。

曲周侯酈商は、高陽の人。陳勝の起る時、商、少年を聚め、東西、人を略し、數千を得つ。沛公、地を略し陳留に至る、六月餘。商、將卒四千人を以て、沛公に岐に屬す。

從つて長社を攻め、先登す。爵を賜ひ、信成君に封ぜらる。沛公に從ひ繚氏を攻め、河津を絕り、秦の軍を洛陽の東に破る。從つて宛穰を攻め下し、十七縣を定め、別に將として旬關を攻め、漢中を定む。項羽、秦を滅ぼし、沛公を立てゝ漢王と爲す。漢王、商に爵信成君を賜ふ。將軍を以て隴西の都尉と爲り、別に將として北地、上郡を定め、雍將軍を烏氏縣に、周類の軍を栒邑に、蘇駙の軍を泥陽に破る。食邑を武成六千戶に賜ふ。隴西の都尉を以て、從つて項籍の軍を擊つ。五月、鉅野に出で、鍾離昧と戰ひ、疾鬪す。梁の相國の印を受け、食邑四千戶を益す。梁の相國を以て將とし、從つて項羽を擊つ二歲、三月、胡陵を攻む。項羽、既に已に死し、漢王、帝と爲る。其秋、燕王臧荼反す。商、將軍を以て、從ひ荼を擊ち、龍脫に戰ひ、先登し、陣を陷れ、荼の軍を易下に破り、敵を卻く。遷つて右丞相と爲り、爵列侯を賜ひ、諸侯と符を剖き、世世、絕つ勿らしむ。邑を涿の五千戶に食み、號して涿侯と曰ふ。右丞相を以て別に上谷を定む。因つて代を攻め、趙の相國の印を受く。右丞相趙の相國を以て、別に絳

侯等と、代の鴈門を定め、代の丞相程縱、守相郭同、將軍巳下六百石に至るまで十九人を得。還つて、將軍を以て太上皇の衛と爲る一歲。七月、右丞相を以て陳豨を擊ち、東垣を殘ふ。又右丞相を以て高帝に從ひ、黥布を擊つて、其前拒衛を攻め、兩陳を陷れ、以て布の軍を破るを得つ。更に曲周五千一百戶を食み、前に食む所を除かる。凡そ別に軍を破る三、郡を降定する六、縣は七十三、丞相守相大將各々一人、小將二人、二千石以下六百石に至るまで十九人を得たり。

商、孝景、高后の時に事ふ。商、病んで治せず官事ヲ治ムル能ハズ。其子寄、字は況、呂祿と善し。高后、崩ずるに及び、大臣、諸呂を誅せんと欲す。呂祿、將軍と爲り、北軍に軍す。太尉勃、北軍に入るを得ず。是に於て乃ち人をして酈商を劫かさしめ、其子況をして呂祿を紿かしむ。呂祿、之を信ず。故に與に出でゝ游ぶ。而して太尉勃乃ち入つて北軍に據るを得、遂に諸呂を誅す。是の歲、商卒す。謚して景侯と爲す。子の寄、代つて侯たり。天下、酈況、交を賣ると稱す。孝景前三年、吳楚齊趙反す。上、寄を

以て將軍と爲し、趙城を圍ましむ。十月、下す能はず。俞侯欒布の齊を平ぐるより來り、乃ち趙城を下すを得、趙を滅ぼす。趙王自殺す。國を除く。孝景中二年、寄、卒す。原君ノ姊を取ル也り夫人と爲さんと欲す。景帝怒り、寄を吏に下す。罪有り、侯を奪ふ。景帝、乃ち商の他子堅を以て封じて繆侯と爲し、酈氏の後を續がしむ。繆靖侯、卒す。子ノ康侯遂成、立つ。遂成、卒す。子ノ懷侯世宗、立つ。世宗、卒す。子ノ侯終根、立つ。太常と爲る。法に坐し、國、除せらる。

汝陰侯夏侯嬰は、沛の人也。沛の廐ノ司御と爲る。使客を送りて還る每に、沛の泗上亭に過り、高祖と語る、未だ嘗て日を移さずんばあらざる也。嬰、已にして試試驗せられ、縣の吏に補せらる。高祖と相愛す。高祖、戲れて嬰を傷く。人あり、高祖を告ぐ訴フル也。高祖、時に亭長たり、重く人を傷くるに坐す吏トシテ人ヲ傷ク。高祖レバ其罪重キナリ。故より嬰を傷けずと告ぐ。嬰亦之を證す。後、獄鞫判復反復す。嬰、高祖に坐し、繫がるゝこと歲餘。掠笞數百、終に是を以て高祖を脫れしむ。

高祖の初め徒屬と沛を攻めんと欲するや、嬰、時に縣の令史を以て、高祖の爲めに使す。上、沛を降す一日、高祖、沛公と爲り、嬰に爵七大夫を賜ひ、以て太僕と爲す。從つて胡陵を攻む。嬰、蕭何と泗水の監丞卒を降す。卒、胡陵を以て降る。嬰に爵五大夫を賜ふ。從つて秦の軍を碭の東に擊ち、濟陽を攻め、戶牖を下し、李由の軍を雍丘の下に破り、兵車を以て趣かに攻め、戰ふこと疾し。爵執帛を賜はる。常に太僕を以て高祖車に奉ふ。從つて章邯の軍を東阿濮陽の下に擊ち、兵車を以て趣かに攻め、戰ふこと疾く、之を破り、爵執珪を賜はる。復た常に車に奉ふ。從つて趙賁の軍を開封に、楊熊の軍を曲遇に擊つ。嬰從ひ、六十八人を捕虜し、卒を降す八百五十人、印を得る一璽。因つて復た常に車に奉ふ。從つて秦の軍を雒陽の東に擊ち、兵車を以て趣かに攻め、戰ふこと疾く、爵封を賜はり、轉じて滕公と爲る。因つて復た車に奉ふ。從つて南陽を攻め、藍田、芷陽に戰ひ、兵車を以て趣かに攻め、戰ふこと疾し。霸上に至る。項羽、至り、秦を滅ぼし、沛公を立て、漢王と爲す。漢王、嬰に爵列侯

を賜ひ、昭平侯と號す。復た太僕と爲る。從つて蜀漢に入り、還つて三秦を定む。從つて項籍を擊ち彭城に至る。項羽、大に漢の軍を破る。漢王敗れて利あらず、馳せ去る。孝惠、魯元を見て、之を載す。漢王急なり。馬罷る。虜、後に至り。常に兩兒孝惠魯元を蹶り、之を棄てんと欲す。嬰、常に收む。竟に之を載せて徐行し、面雍樹し（二人ヲ自分ノ方ニ向ケテ抱キ掩フナリ）て、乃ち馳す。漢王怒り行々嬰を斬らんと欲する者十餘。卒に脫するを得て、孝惠、魯元を豐に致す。漢王、既に滎陽に至り、散兵を收め、復た振ふ。嬰に賜ひ廣陽を食ましむ。復た常に車に奉ふ。從つて項籍を擊ち、追うて陳に在り、卒に楚を定め、魯に至る。茲氏縣を益し食む。漢王、立つて帝と爲る。其秋、燕王臧荼、反す。嬰、太僕を以て從ひ、荼を擊つ。明年、從つて陳に至り、楚王信を取ふ。更に汝陰を食ましめ、符を剖き世世絕つ勿らしむ。太僕を以て從ひ、代を擊ち、武泉、雲中に至る。千戶を益し食む。因つて從ひ韓信の軍胡騎を晉陽の旁に擊つて、大に之を破り、北ぐるを追うて平城に至り、胡の爲めに圍まれ、七日、通ずるを得ず、高帝、

使をして厚く閎氏に遣らしむ。冒頓、圍みの一角を開く。高帝、出でゝ、馳せんと欲す。嬰、固く徐行す（閑暇ヲ示シテ士心ヲ固クスル也）。弩、皆、滿を持して外に向ふ。卒に脫するを得。嬰に細陽の千戶を益し食ましむ。復た太僕を以て從ひ、胡騎を句注の北に擊つて、大に之を破る。太僕を以て胡騎を平城の南に擊ち、三たび陳を陷る。功、多しと爲す。奪ふ所の邑五百戶を賜ふ。太僕を以て陳豨、黥布の軍を擊ち、陳を陷れ敵を卻く。千戶を益し食む。定めて汝陰の六千九百戶を食み、前に食む所を除かる。

嬰、上の初め沛に起りしより、常に太僕と爲り、高祖の崩を竟め、（終ヲ）太僕を以て孝惠に事ふ。孝惠帝及び高后、嬰の孝惠、魯元を下邑の間に脫せしめしを德とし、乃ち嬰に縣の北第（北闕ニ近キ第）第一を賜うて、曰く、我に近しと。以て之を尊異す。孝惠帝崩ず。太僕を以て高后に事ふ。高后崩じ、代王の來るや、嬰、太僕を以て東牟侯と入つて宮を淸め、少帝を廢し、天子の法駕を以て、代王を代邸に迎へ、大臣と共に（代王ヲ）立てゝ孝文皇帝と爲す。復た太僕と爲り、八歲、卒す。謚して文侯と爲す。子夷侯澤立つ。

七年、卒す。子共侯賜立つ。三十一年、卒す。子侯頗、平陽公主に尙配す。立つて十九歲、元鼎二年、父の御婢と姦する罪に坐して、自殺し、國除かる。

潁陰侯灌嬰は、睢陽の販繒者（帛商）人也。高祖の沛公と爲り地を略し雍丘の下に至るや、章邯、敗つて項梁を殺す。而して沛公は還つて碭に軍す。嬰初め中涓（職名）を以て從ひ、東郡の尉を成武に擊破し、秦の軍に及び、杠里に於て疾鬪す。爵七大夫を賜はる。從つて秦の軍を亳の南、開封、曲遇に攻め、戰、疾くして力む。爵執帛を賜はり、宣陵君と號す。從つて陽武以西、雒陽に至るまでを攻め、秦の軍を尸北に破り、北、河津を絕り、南、南陽の守齮を陽城の東に破り、遂に南陽郡を定めて、西、武關に入り、藍田に戰ひ、疾くして力め、霸上に至る。爵執珪を賜ひ、昌文君と號す。沛公立つて漢王と爲るや、嬰を拜して郎中と爲す。從つて漢中に入る。十日、拜せられて中謁者と爲る。從ひ還つて三秦を定め、櫟陽を下し、塞王を降し、還つて章邯を廢丘に圍む。未だ拔けず。從つて東し臨晉關を出で、擊つて殷王を降し、其地を定め、項羽の將龍

且、魏の相項他の軍を定陶の南に擊ち、疾戰して之を破る。嬰に爵列侯を賜ひ、昌文侯と號し、杜の平鄉を食む。復た中謁者を以て從ひ、碭を降下し以て彭城に至る。項羽、擊つて大に漢王を破る。漢王、遁れて西す。嬰、從ひ還つて雍丘に軍す。秦ノ降將王武、魏公申徒、反す。從ひ擊つて之を破り、攻めて黃を下し、西、兵を收め、滎陽に軍す。楚の騎來るもの衆し。漢王、軍中に車騎の將たる可き者を擇ぶ。皆推すらく、故の秦の騎士、重泉の人、李必、駱甲、騎兵に習ふ。今、校尉たり。騎將と爲す可しと。漢王之を拜せんと欲す。必甲曰く、臣は故秦の民。恐らくは軍、臣を信ぜじ。臣願はくは大王の左右の騎に善き者を得て、之に傳たらんと。灌嬰、少しと雖も、然れども數々力戰す。乃ち灌嬰を拜し中大夫と爲し、李必、駱甲をして左右校尉たらしめ、郎中の騎兵を將ゐ、楚の騎を滎陽の東に擊ち、大に之を破る。詔を受けて別に楚の軍の後を擊ち其餉道を絕つ。陽武に起り襄邑に至り、項羽の將項冠を魯下に擊つて之を破る。將ゐる所の卒ガ右司馬騎將各一人を斬る。擊つて柘公王武の軍を燕の西に

破る。將ゐる所の卒ガ樓煩（騎ノ名、人其騎射ヲ善ス、故ニ射士ヲ名ケテ樓煩ト爲ス也）の將五人、連尹（楚ノ官名）一人を斬る。王武の別將桓嬰を白馬の下に擊ち、之を破る。將ゐる所の卒ガ郡尉一人を斬る。騎を以て河を渡り、南、漢王を送つて雒陽に到る。北に使し、相國韓信の軍を邯鄲に迎へ、還つて敖倉に至る。嬰、遷つて御史大夫と爲る。三年、列侯を以て邑を杜の平鄉に食む。御史大夫を以て、詔を受け、郎中騎兵を將ゐ、東、相國韓信に屬し、齊の軍を歷下に擊破す。將ゐる所の卒、車騎將軍華毋傷、及び將吏四十六人を虜にす。臨菑を降下し、齊の守相田光を得、齊の相田橫を追うて嬴博に至り、其騎を破る。將ゐる所の卒ガ騎將一人を斬り、騎將四人を生得す。攻めて嬴博を下し、齊の將軍田吸を千乘に破る。將ゐる所の卒、吸を斬る。東、韓信に從ひ、龍且、留公を高密に攻む。卒、龍且を斬り、右司馬連尹各一人、樓煩の將十人を生得し、嬰身づから亞將周蘭を生得す。齊の地、已に定まり、韓信自立して齊王と爲る。嬰をして別將となり、楚の將公杲を魯の北に擊たしむ。嬰之を破る。嬰南に轉じ、薛郡の長を破り、身づから騎將一人を

虜にす。博陽を攻め、前んで下相以東南、僮、取慮、徐（共二縣ノ名）に至り、淮を度つて盡く其城邑を降し、廣陵に至る。項羽ハ項聲、薛公、鄒公をして復た淮北を定めしむ。嬰、淮を渡つて、北、項聲、鄒公を下邳に擊破し、薛公を斬り、下邳を下し、擊つて楚の騎を平陽に破り、遂に彭城を降し、柱國項佗を虜にし、留、薛、沛、鄒、蕭、相を降し、苦譙を攻め、復た亞將周蘭を得つ、漢王と頤鄉に會し、從つて項籍の軍を陳下に擊つて之を破る。將ゐる所の卒、樓煩の將二人を斬り、騎將八人を虜にす。食邑二千五百戶を益し賜はる。項籍の垓下に敗れて去るや、嬰、御史大夫を以て詔を受け、車騎を將ゐて、別に項籍を追ひ、東城に至つて、之を破る。將ゐる所の卒五人、共に項籍を斬る。皆爵列侯を賜ふ。左右司馬各一人、卒萬二千人を降す。盡く其軍の將吏を得、東城、歷陽を下し、江を渡つて、吳郡の長を吳下に破り、吳の守を得、遂に吳の豫章、會稽郡を定め、還つて淮北を定むる、凡そ五十二縣。漢王立つて皇帝と爲り、嬰に邑三千戶を益し賜ふ。其秋、車騎將軍を以て皇帝ニ從ひ、擊つて燕王臧荼を破る。

明年、從つて陳に至り、楚王信を取ふ。還つて符を剖き世世絕つ勿く、潁陰の二千五百戶を食み、號して潁陰侯と曰ふ。車騎將軍を以て、從つて、反ける韓王信を代に擊ち、馬邑に至る。詔を受け、別に樓煩以北の六縣を降し、代の左相を斬り、胡騎を武泉の北に破り、復た從つて韓信の胡騎を晉陽の下に擊つ。將ゐる所の卒、胡の白題（胡ノ名）の將一人を斬る。詔を受け、燕趙齊梁楚の車騎を幷せ將ゐ、擊つて胡騎を硰石に破り、平城に至り、胡の爲めに圍まる。總テ從ひ還つて東垣に軍す。從つて陳豨を擊つ。詔を受け、別に豨の丞相侯敞の軍を曲逆の下に攻めて、之を破る。卒ガ敞及び特將五人を斬る。曲逆、盧奴、上曲陽、安國、安平を降し、攻めて東垣を下す。黥布、反する、灌嬰車騎將軍を以て先づ出で、布の別將を相に攻め、之を破り、亞將樓煩の將三人を斬り、又進み擊つて布の上柱國の軍、及び大司馬の軍を破り、又進んで布の別將肥誅を破り、嬰、身づから左司馬一人を生得し、將ゐる所の卒ガ其小將十人を斬る。北ぐるを追うて淮上に至る。二千五百戶を益し食む。布、已に破れ、高帝歸り、定めて嬰に

潁陰五千戶を食ましめ、前に食みし所を除く。凡そ從つて二千石を得る二人、別に軍を破る十六、城を降す四十六、國を定むる一、郡二、縣五十二、將軍を得る二人、柱國相國各一人、二千石十人。嬰、布を破るより歸り、高帝崩ず。嬰、列侯を以て、孝惠帝及び呂太后に事ふ。

太后崩ず。呂祿等、趙王を以て、自ら置いて將軍と爲り、長安に軍し亂を爲さんとす。齊の哀王、之を聞き、兵を擧げて西し、且に入つて王たるべからざる者を誅せんとす。上將軍呂祿等之を聞き、乃ち嬰をして大將と爲し、軍を將ゐ往いて之を擊たしむ。嬰、行いて滎陽に至り、乃ち絳侯等と謀り、因つて兵を滎陽に屯し、齊王に風(諷)するに呂氏を誅する事を以てす。齊の兵、止まつて前まず。絳侯等既に諸呂を誅す。齊王、兵を罷めて歸る。嬰も亦兵を罷めて滎陽より歸り、絳侯、陳平と共に代王を立てゝ孝文皇帝と爲す。孝文皇帝、是に於て嬰を三千戶に益し封じ、黃金千斤を賜ふ。拜せられて太尉と爲る。三歲、絳侯勃、相を免じ國に就く。嬰、丞相と爲る。太尉の官を罷む。

是歲、匈奴、大に北地ノ上郡に入る。丞相嬰をして騎八萬五千に將とし、往いて匈奴を擊たしむ。匈奴去る。濟北王、反す。詔して乃ち嬰の兵を罷む。後歲餘、嬰、丞相を以て卒す。謚して懿侯と曰ふ。子平侯阿、代り侯たり。二十八年、卒す。子彊代り侯たり。十二年、彊、罪あり、絕つこと二歲。元光三年、天子、灌嬰の孫ノ賢を封じて、臨汝侯と爲し、灌氏の後を繼がしむ。八歲、賕(賄賂)を行ひ罪あるに坐し、國、除せらる。

太史公曰く、吾、豐沛に適き、其遺老に問ひ、故の蕭(蕭何)曹(曹參)樊噲、滕公の家を觀て、其素(素行)に及ぶ。異なる哉、聞く所。其の刀を鼓し狗を屠り繒(帛也)を賣るの時に方り、豈に自ら驥の尾に附き、名を漢廷に垂れ、德、子孫に流るゝを知らんや。余、他賓と通交(通)ず。余ノ爲めに高祖の功臣の興る時を言ふ、此の若しと云ふ。

張丞相列傳 第三十六

張丞相蒼は、陽武の人也。書律曆を好む。秦の時、御史と爲り、柱下の方書を主る（常ニ殿柱ノ下ニ居テ四方ノ文書ヲ主ル）。罪あり、亡げ歸る。沛公、地を略し陽武に過るに及び、蒼、客を以て從ひ南陽を攻む。蒼、法に坐し斬に當り、衣を解き質（於質）に伏す。（ノ身、長大肥白、瓠の如し。）時に王陵、見て其美士なるを怪しみ、乃ち沛公に言ひ、赦して斬る勿らしむ。遂に從つて西、武關に入り、咸陽に至る。沛公、立つて漢王と爲り、漢中に入り、還つて三秦を定む。陳餘、擊つて常山王張耳を走らす。耳、漢に歸す。漢、乃ち張蒼を以て常山の守と爲し、淮陰侯に從ひ、趙を擊たしむ。蒼、陳餘を得（獲）て、趙の地、已に平ぐ。漢王、蒼を以て代の相と爲し、邊寇に備ふ。已にして徙つて趙の相と爲り、趙王耳に相たり。耳、卒す。趙王敖に相たり。復た徙つて代王に相たり。燕王臧荼、反す。高祖往いて之を擊つ。蒼、代の相を以て從ひ、臧荼を攻めて功あり。六年中を

以て、封ぜられて北平侯と爲り、邑千二百戶を食む。遷つて計相（會計長官）と爲る、一月、更に列侯を以て主計と爲る、四歲。是の時、蕭何、相國たり。而して張蒼、乃ち秦の時より柱下の史と爲り、天下の圖書計籍を明習し、蒼又善く算律曆を用ふ、故に蒼をして列侯を以て相府に居り、郡國の上計者を領主せしむ。黥布、反し亡ぶ。漢、皇子長を立て、淮南王と爲す、而して張蒼之に相たり。十四年、遷つて御史大夫と爲る。周昌は、沛の人也。其從兄を周苛と曰ふ。秦の時、皆、泗水の卒史たり。高祖、沛に起るに及び、擊つて泗水の守監を破る。是に於て周昌、周苛、卒史より沛公に從ふ。沛公、周昌を以て職志（志ハ幟、旗幟ヲ職ツカサドル官）と爲し、周苛を客と爲す。從つて關に入り秦を破る。沛公、立つて漢王と爲る。周苛を以て御史大夫と爲し、周昌を中尉と爲す。漢王四年、楚、漢王を滎陽に圍む、急なり。漢王、遁出し去つて、周苛をして滎陽城を守らしむ。楚、滎陽城を破り、周苛をして將たらしめんと欲す。苛、罵つて曰く、若（ナンヂ）趣（スミヤカ）に漢王に降れ。然らずんば今虜と爲らんと。項羽怒つて周苛を亨（烹）る。是に於て

乃ち周昌を拜し、御史大夫と爲す。常に從つて項籍を擊破す。六年中を以て、蕭曹等（蕭何曹參）と俱に封せらる。周昌を封じて、汾陰侯と爲す。周苛の子周成、父が事に死せるを以て、封せられて高景侯と爲る。

昌、人と爲り彊力、敢て直言す。蕭曹等より（群臣ニ至ル迄）皆之に卑下す。昌、嘗て（高帝燕居ノ時）入つて事を奏す。高帝、方に戚姬を擁す。昌、還り走る。高帝、遂ひ得て、周昌の項（ウナジ）に騎し（乘ル也）、問うて曰く、我は何如なる主ぞやと。昌仰ぎ曰く、陛下は即ち桀紂の主也と。是に於て上、之を笑ふ。然れども上尤も周昌を憚る。帝が太子を廢して、戚姬の子如意を立てゝ太子と爲さんと欲するに及び、大臣固く（帝ノ意ヲ返シ）之を爭ふ。而レドモ能く得る莫し。上、留侯の策を以て即ち止む。而して周昌、之を廷爭する彊し。上、其說を問ふ。昌、人と爲り吃（ドモル）、又盛んに怒つて曰く、臣、口、言ふ能はず。然れども臣、期、期（口吃スルヲ以テ期期ト重ネテ言フナリ）して其不可を知る。陛下、太子を廢せんと欲すと雖も、臣、期、期して詔を奉ぜずと。上、欣然として笑ふ。既にして罷む。呂后、耳を東廂に側

て（ヒソカニ）之を聽く。周昌を見て、爲めに詭（跪）き謝して曰く、君（ナ）微かりせば、太子は幾んど廢せられたりしならんをと。

是の歲、戚姬の子如意、趙王と爲る。年十歲。高祖憂ふ、即ち萬歲（崩ズルヲ云フ）の後全からざらんと。趙堯（人名）年少く、符璽御史たり。趙人方與公、御史大夫周昌に謂つて曰く、君の史（ナル）趙堯、年、少しと雖も、然れども奇才也。君必ず之を異とせよ。是れ且に君の位に代らんとすと。周昌笑つて曰く、堯、年、少し。刀筆の吏耳。何ぞ能く是に至らんやと。居る之を頃（シバラク）し、趙堯、高祖に侍す。高祖、獨り心に樂しまず、悲歌す。羣臣、上の然る所以を知らず。趙堯、進み、諸ひ問うて曰く、陛下の樂しまざる所爲（ユエン）は、趙王、年少うして、戚夫人が呂后と郤（ヒマ）あり、萬歲の後に備へて、而も趙王自ら全うす能はざらんが爲めに非ずやと。高祖曰く、然り。吾、私に之を憂へ、出づる所を知らずと。堯曰く、陛下、獨り宜しく趙王の爲めに、貴彊の相、及び呂后、太子、羣臣の素より敬憚する所を置かば、乃ち可なるべしと。高祖曰く、然り。吾、之を念ふに

是の如くせんと欲す。而るに羣臣、誰か可なる者ぞと。堯曰く、御史大夫周昌、其人、堅忍質直なり。且つ呂后太子及び大臣より羣臣ニ至ル迄、皆素より之を敬憚す。獨り昌可なるのみと。高祖曰く、善しと。是に於て乃ち周昌を召し、謂つて曰く、吾、固ク必ズ公を煩はさんと欲す。公、彊ひて我が爲めに趙王に相たれと。周昌泣いて曰く、臣、初め起りてより陛下に從ふ。陛下、獨り奈何ぞ中道にして之を諸侯に弃つると。高祖曰く、吾、極めて其左遷を知る。然れども吾、私に趙王を愛ふ。念ふに公に非ずんば可なる者無し。公、已むを得ず、彊ひて行けと。是に於て御史大夫周昌を徙して趙の相と爲す。既に行く。之を久しうし、高祖、御史大夫の印を持し、之を弄して曰く、誰か以て御史大夫と爲る可き者ぞと。趙堯を熟視して曰く、以て堯に易ふるノ無し（堯ノ最モ適任ナルナイフ）と。遂に趙堯を拜して御史大夫と爲す。堯、亦、前に軍功有り、邑を食む。乃御史大夫を以て從つて陳豨を擊ち、功あり。封ぜられて江邑侯と爲る。

高祖崩ず。呂太后、使をして趙王を召さしむ。其相周昌、王をして疾と稱し行かざらしむ。使者三反す。周昌、固く爲めに趙王を遣らず。是に於て高后之を患へ、乃ち使をして周昌を召さしむ。周昌、至り、高后に謁す。高后怒つて周昌を罵る、曰く、爾（ナンジ）、我の戚氏を怨むを知らざるか。而るに趙王を遣らざるは何ぞやと。昌既に徵さる。高后、使をして趙王を召さしむ。趙王果して來る。長安に至りて、月餘、藥を飲んで死す。周昌、因つて病と稱し朝見せず、三歲にして死す。後五歲、高后、御史大夫江邑侯趙堯（ガ）、高祖の時、趙王如意を定むるの籌（ハカリ）を聞き、乃ち堯を罪に抵（イタ）し、廣阿侯任敖を以て御史大夫と爲す。

任敖は故沛の獄吏（ヒト）なり。高祖、嘗て卻（ヒトシ）犯（シ）吏を辟（サ）く亡（ニ）逃。吏、呂后を獄ニ繫ぎ、之を遇するに不謹なり。任敖は素（ヒト）高祖と善ければ、怒つて呂后を主る吏を擊傷す。高祖初めて起るに及び、敖、客を以て從ひ、御史と爲り、豐を守ること二歲。高祖立つて漢王と爲り、東、項籍を擊つ。敖、遷つて上黨の守と爲る。陳豨反する時、敖、堅く守る。封ぜられて廣阿侯と爲り、千八百戶を食む。高后の時、御史大夫と爲る。三歲にして免ず。

平陽侯曹窋を以て御史大夫と爲す。高后崩ず。曹窋大臣と共に呂祿等を誅せず、曹窋免ず。淮南の相張蒼を以て御史大夫と爲す。蒼、絳侯等と、代王を尊立し、孝文皇帝と爲す。四年、丞相灌嬰、卒す。張蒼、丞相と爲る。漢興つてより孝文に至るまで二十餘年、天下初めて定まるに會ひ、將相公卿は皆軍吏なり。張蒼、計相たる時、律曆を緒(ノ)正す。高祖十月始めて霸上に至るを以て、故秦の時、本十月を以て歲首と爲しに因り、革めず、五德(水火土金水)の運を推し、以て漢は水德の時に當ると爲し、黑を尙ぶ故の如く、律音律を吹き樂を調べ、之を音聲に入れ、及比を以て律令を定め、百工を若へ、天下、程品(器物ニ一定ノ尺寸斤兩アル也)を作る。蒼丞相と爲るに至つて、卒に之を就す。故に漢家、律曆を言ふ者は、之を張蒼に本づく。蒼、本、書を好み、觀ざる所無く、通せざる所無し、而れども尤も律曆に善し。張蒼、王陵を德とす。王陵は安國侯也。蒼、貴きに及び、常に王陵に父事す。陵、死して後、蒼、丞相と爲りても、洗沐して、常に先づ陵の夫人に朝し、食を上つり、然る後敢て家に歸る。

蒼、丞相と爲つて、十餘年、魯人公孫臣、上書して言ふ、漢は土德の時(ナリ)、其符(符驗(ハルシ))ニハ黃龍あり、當(ツサ)に見はるべしと。詔して其議を張蒼に下す。張蒼以て是に非ずと爲し、之を罷む。其後、黃龍、成紀に見はる。是に於て文帝、公孫臣を召し、以て博士と爲し、土德の曆を草し、度を制せしめ、元年を更む。張丞相、此に由つて自ら絀(クツ)屈(ト)(遜(ズ))し、病と謝し老と稱す。蒼、人を任(保任)じ中候(官名)と爲ししが、其人大に姦利を爲す。上、以て蒼を讓(セ)む。蒼、遂に病み免ず。蒼、丞相と爲りて十五歲にして免ず。孝景前五年、蒼、卒す。謚して文侯と爲す。子ノ康、代り侯たり。八年、卒す。子ノ類、代つて侯と爲る。八年、諸侯の喪に臨み、後、位に就き、不敬に坐して、國除かる。初め張蒼の父は長(タケ)五尺に滿たず。蒼を生むに及び、蒼長(タケ)八尺餘、侯丞相と爲る。蒼の子康(ヤスシ)復た長(タケ)し。孫類に及び、長(タケ)六尺餘、法に坐し侯を失ふ。蒼の相を免ずる後、老いて口中に齒無く、乳を食ふ。女子、乳母たり。妻妾、百を以て數へ、嘗て孕む者は復た幸(愛幸)せず。蒼、年百有餘歲にして卒す。

申屠丞相嘉は梁の人なり。材官（材幹ノ如シ）蹶張（足ヲ以テ蹶ンデ強弩ヲ張ルコト）を以て高帝に從ひ、項籍を擊ち、遷つて隊率（隊長）と爲る。從つて黥布の軍を擊ち、都尉と爲る。孝景の時、淮陽の守と爲る。孝文帝元年、故の吏士ノ二千石の、高皇帝に從ひし者を舉げ、悉く以て關內侯と爲し、邑を食ましむる二十四人。而して申屠嘉、邑を食む五百戶。張蒼、已に丞相たり。嘉、遷つて御史大夫と爲る。張蒼、相を免ず。孝文帝、皇后の弟ノ竇廣國を用つて丞相と爲さんと欲す。曰く、恐らくは天下、吾を以て廣國に私すと爲さんことをと。廣國は賢にして行あり。故に之を相とせんと欲す。念ふこと之を久しうして不可なり。而して高帝の時の大臣又皆多く死す。餘は見（現）に可なる者無し。乃ち御史大夫嘉を以て丞相と爲し、故邑に因り、封じて故安侯と爲す。

嘉、人と爲り廉直、門、私謁を受けず。是の時、太中大夫鄧通、方に隆んに愛幸せられ、賞賜、巨萬を累ぬ。文帝偃（フセ）に通の家に燕飲（燕飲）す。其寵、是の如し。是の時、丞相、入朝す。而して通、上の傍に居り、怠慢の禮あり。丞相、事を奏し畢り、因つて言

つて曰く、陛下、臣（臣下）を愛幸せば、則ち之を富貴にすとも、（タ）朝廷の禮に至つては、以て肅（フシ）まざる可からずと。上曰く、君、言ふ勿れ。吾、之を私にせん（通ナ公ノ場處ニ在ラシメザルベキヲ云フ）と。嘉、朝を罷め、府中に坐す。嘉、檄を爲り、鄧通を召して丞相府に詣らしむ、（モシ）來らずんば、且に通を斬らんとすと（フ）曰。通恐れ、入つて文帝に言ふ。文帝曰く、汝、（タ）第往け。吾、今、人をして若（ナンヂ）を召さしめんと。通、丞相府に至り、免冠徒跣（冠ヲ脫シ、素跣足（スハダシ）ニナル也）し、頓首して謝す。嘉、坐して自如（若）たり、（コトサラ）故に禮を爲さず、責めて曰く、夫れ朝廷は高皇帝の朝廷なり。通、小臣、殿上に戲る、大不敬なり、斬に當す。吏、今行いて之を斬れと。通、頓首し、首、盡く血を出すも、嘉解かず（釋サヤ）。文帝、丞相の已に通を困しむるを度り、使者をして節を持し通を召さしめ、而して丞相に謝せしめて曰く、此れ吾が弄臣なり、君之を釋せと。鄧通既に至り、文帝の爲めに泣いて曰く、丞相、幾んど臣を殺さんとしたりと。

嘉、丞相たる、五歲、孝文帝崩じ、孝景帝、位に即く。二年、鼂錯、內史と爲り、貴

幸せられて事を用ひ、諸法令、請ひ變更する所多く、議して謫罰を以て諸侯ノ領地を侵削す。而して丞相嘉は、自ら絀し、言ふ所用ひられず、錯を疾む。錯、內史たり、門、東に出づるは不便、更に一門を穿つて、南に出づ。南に出づれば、太上皇の廟の壝垣宮外ノ垣なり。嘉、之を聞き、此に因つて以て錯を法にせんと欲す、擅に宗廟の垣を穿つて門と爲すと。奏して、錯を誅せんと請はんとす。錯の客、錯に語るあり。錯恐れ、夜、宮に入つて上謁し、景帝に自歸す。朝廷に至り、丞相、奏して、內史錯を誅せんと請ふ。景帝曰く、錯の穿つ所は、眞の廟垣に非ず、乃ち外壝垣にして、故他官其中に居る。且つ又我、之を爲さしむ。錯は罪無しと。朝を罷め、嘉、長史に謂つて曰く、吾、悔ゆらくは、先に錯を斬らず、乃ち先づ之を請うて、錯の爲めに賣らるると。舍に至り、因つて血を歐いて死す。謚して節侯と爲す。子共侯蔑、代る。三年、卒す。子侯去病、代る。三十一年、卒す。子侯臾、代る。六歲、九江の太守と爲り、故官太守の送を受くるに坐して、罪あり、國除せらる。申屠嘉、死してよりの後、景帝の時、

開封侯陶青、桃侯劉舍、丞相と爲り、今上の時に及び、柏至侯許昌、平棘侯薛澤、武彊侯莊青翟、高陵侯趙周等、丞相と爲る。皆列侯を以て繼嗣し、婕妤持整ノ祝として廉謹、丞相と爲るも員に備はる而已、能く發明する所の功名ノ當世に著はるゝ者ある無し。」

太史公曰く、張蒼は文學律曆あつて、漢の名相たり。而れども賈生、公孫臣等の、正朔服色の事を言ふを絀けて、明かなるに遵はず、秦の顓頊曆を用ふるは、何ぞや。周昌は木彊直質者質の人也。任敖は舊德を以て用ひらる。申屠嘉は剛毅にして節を守ると謂ふ可し。然れども術學無く、殆んど蕭曹蕭何曹參陳平と異なり。

（已下ハ舍稽ノ褚先生ノ補フ所ニシテ太史公ノ原文ニ非ズ）

孝武の時、丞相甚だ多かりしも記さず、又其行、起居の狀略の錄すべき莫し。且く征和以來を紀せん。

車丞相あり、長陵の人也。卒して韋丞相あり、代る。

韋丞相賢は、魯の人也。讀書術を以て吏と爲り、大鴻臚官名に至る。相工人あり、之

を相す。曰ク當に丞相に至るべしと。聚ニ男四人あり、相工をして之を相せしむ。第二子の其名玄成に至り、相工曰く、此子、貴し、當に封せらるべしと。韋丞相、言つて曰く、我、即し丞相と爲らば、長子あり、是れ安くに從つて之第二子ガ封セラルヲ得ンを得ん何ナ以テ封セラルヲ得ンと。後竟に丞相と爲る。病んで死す。而して長子、罪あり、論せられて嗣ぐを得ず、而して玄成を立つ。玄成、時に佯狂して、立つを肯んぜず。ケレドモ竟に之を立つ。讓國の名あり。後、騎して廟に至る不敬に坐し、詔あつて爵一級を奪はれ、關內侯と爲る。列侯を失ひしも、其故の國邑を食むを得。韋丞相、卒す。魏丞相あり、代る。

魏丞相は、濟陰の人也。文吏を以て丞相に至る。其人、武を好み、皆諸吏をして劒を帶びしむ。劒を帶び前んで事を奏す。或は劒を帶びざる者あり、入つて事を奏するに當れば、乃ち劒を借りて敢て入つて事を奏するに至る。其時、京兆の尹ノ趙君ハ即チ爵ノ丞相ガ奏するに免罪超君ノ罪、爵位ヲ免ズベキを以てせしかば、趙君人をして微カニ魏丞相ノ門內ノ不法ノ事ヲ伺

ハシ魏丞相を執へしめ、己ガ罪を脫るゝを求めんと欲すれども、而も聽かれず。復た人をして魏丞相を脅恐せしむるに、丞相ノ夫人の嫉妬シテ侍婢を賊殺せりとの事を以てし、而して私に獨奏し之を驗吟味せんと請ふ。ソコデ吏卒を發して、丞相の舍に至り、奴婢を捕へ、笞擊して之を問はしむ。實は婢、過アリテ自ラ絞死セルモノニテ丞相ノ夫人ガ兵刃を以て殺したるに不アラズる也。而して丞相の司直ヲ務ハムル繁君、奏すらく、京兆の尹趙君ハ丞相を迫脅し、誣ふるに夫人の婢を賊殺せしを以てし、吏卒を發し、丞相の舍を圍捕す。不道なり。又、擅に騎士を屏くる事を得たりと。趙京兆、法ニ坐し、要斬腰斬せらる。又掾屬官陳平等を以て中尙書天子ノ近臣を劾弾劾せしむるあり。中尙書ハ即ノ疑はしきに敢テ獨擅、事を劫かせしを以て、之を大不敬に坐す。長史以下、皆坐して死し、或は蠶室囚に下る。而して魏丞相は竟に丞相を以て病んで死す。子嗣ぐ。後、騎して廟に至る不敬に坐し、詔あり、爵一級を奪はれ、關內侯と爲る。列侯を失ひたるも、其故の國邑を食むを得たり。魏丞相、卒す。御史大夫邴吉を以て代ふ。

邴丞相吉は、魯國の人也。書を讀み法令を好むを以て、御史大夫に至る。孝宣帝の時、舊故あるを以て、封せられて列侯と爲り、而して因つて丞相と爲る。邴吉事に明かに、大智あり。後世、之を稱す。丞相を以て病んで死す。子ノ顯嗣ぐ。後、騎して廟に至る不敬に坐し、詔あつて、爵一級を奪はれ、列侯を失ひしも、故の國邑を食むを得たり。顯、吏と爲り太僕に至る。官にゐて耗亂敗亂し、身及び子男、姦贓賄賂ヲ受クルコトあるに坐し、免ぜられて庶人と爲る。邴丞相卒す。黃丞相代る。長安中に善相工上手ナ相人田文なる者あり、韋丞相、魏丞相、邴丞相と、微賤の時、客家に會す。田文言つて曰く、今、此三君は、皆丞相たらんと。其後、三人、竟に更々(カハルカハル)相代つて丞相と爲る。何ぞ見の明なるや。

黃丞相霸は、淮陽の人也。讀書を以て吏と爲り、潁川の太守に至る。潁川を治むるに禮義を以てし、條教條書ニシテ教フル也諭告して之を化し、法を犯す者あれば、風曉諷諭して自殺せしむ。化、大に行はれ、名聲聞ゆ。孝宣帝、制を下して曰く、潁川の太守霸、

詔令を宣布し、民を治めルル結果、道ニ遺ちたるヲを拾はず、男女、路を異にし、獄中、重囚重罪人無きを以て、爵關內侯、黃金百斤を賜ふと。徵して京兆尹と爲し、而して丞相に至る。復た禮義を以て治を爲す。丞相を以て病んで死す。子嗣ぐ。後、列侯と爲る。黃丞相、卒す。御史大夫于定國を以て代ふ。于丞相ニ就テハ已に廷尉の傳諸先生ノ作あり、又張廷尉張釋之の語中にも在り。于丞相去り、御史大夫韋玄成、代る。

韋丞相玄成は、即ち前の韋丞相の子也。父に代る。後、列侯を失ふ。其人、少時、讀書を好み、詩、論語に明かなり。吏と爲り衞尉に至り、徙つて太子太傅と爲る。御史大夫薛君名ハ廣德免ぜられて、玄成御史大夫と爲る。于丞相、骸骨を乞うて免ぜらるるや、丞相と爲る。因つて故邑に封ぜられ、扶陽侯と爲る。數年にして、病んで死す。孝元帝、親ら喪に臨み、賜賞甚だ厚し。子嗣ぐ。後、其治、容容四海ノ稱として、世俗に隨うて浮沈す、而して世間カラ諂巧と謂はる。而して相工、本、之を謂ふ、當に侯と爲り父に代つて、後、之を失ふべしと。復た自ら游宦して、起りて丞相に至る。

父子俱に丞相と爲る、世間、之を美とす。豈に天命ならずや。相工、其れ先づ之を知る。韋丞相、卒す。御史大夫匡衡、代る。

丞相匡衡は、東海の人也。讀書を好み、博士に從つて詩を受く。家貧し。衡、傭作して以て食飲を給す。才、下、數々射策して中らず、九たびに至り、乃ち甲乙丙三科に中る。其經學科に中らざりしが以に、故に明習す。平原の文學卒史に補せらる。數年、郡、尊敬せず。御史、之を徵して以て百石の屬に補し、薦めて郎と爲し、而して博士に補す。拜せられて太子少傅と爲りて、孝元帝に事ふ。孝元、詩を好むより匡衡遷して光祿勳と爲す。殿中に居て師と爲り、左右に授教す。而して縣官其旁に坐して聽き、甚だ之を善みす。日に以て尊貴せらる。御史大夫鄭弘、事に坐して免せられて、匡君、御史大夫と爲る。歲餘にして、韋丞相、死す。匡君、代つて丞相と爲り、樂安侯に封せらる。十年の間を以て、長安の城門を出でずして丞相に至る。豈に時に遇うて命なるに非ずや。深く惟

ふに、士の游宦して、封侯に至る所以の者甚だ微く、然して御史大夫に至つて即ち去る者多し。諸を大夫と爲れば、丞相の次也、其心、丞相の物故を冀幸し、或は乃ち陰に私に相毀害し、之に代らんと欲す。然れども之を御史大夫を守ること日久しうして丞相に至ること得ず、或は之を爲すこと日少うして之を得、封侯に至るものあり。眞に命なるかな。失れ御史大夫鄭君は之を守る數年、得ず、匡君は之に居る未だ歲に滿たずして、韋丞相、死して、即ち之に代る。豈に智巧を以て得可けんや。多く賢聖の才あるも困厄して得ざる者、甚だ衆し。

酈生陸賈列傳 第三十七

酈生食其は、陳留縣ノ高陽の人也。讀書を好む。家、貧にして落魄零落シテ産業ナキ也、以て衣食の業を爲す無し。里の監門の吏村里ノ門番と爲る。然るに縣中の賢豪賢人、豪傑、敢て酈生を役使せず、縣中皆之を狂生と謂ふ。陳勝、項梁等起るに及び、諸將、地を徇略也へ高陽を過る者數十人。酈生、其將を問ふ。皆握齱ニコセツク也、小事にして苛禮を好み、自ら用ひ、大度の言を聽く能はず。酈生乃ち深く自ら藏匿す。後、沛公ガ兵を將る地を陳留の郊に略すと聞く。沛公の麾下の騎士は、適々酈生の里中の子也。沛公、時時、邑中の賢士豪俊を問ふ。騎士歸る。酈生、見て、之に謂つて曰く、吾聞く、沛公は慢高慢にして人を易り、大略多しと。此れ眞に吾が、從游を願ふ所。然レドモ我が爲めに先く沛公ニ紹介スル者莫し。若、沛公に見え謂つて曰へ、臣の里中に酈生なるものあり。年六十餘、長八尺。人皆之を狂生と謂ふ。生自らは謂へらく、我は狂生に非ずと。騎士曰く、沛公は

儒を好まず。諸客の儒冠儒者ノ冠を冠して來る者は、沛公、輒ち其冠を解かせ、其中に溲溺ユバリす。人と言ふ、常に大に儒ヲ罵る。未だ儒生を以て說く可からざる也と。酈生曰く、第之を言へと。騎士、從容として言ふ、酈生の誡むる所の者の如し。沛公、高陽の傳舍に至り、人をして酈生を召さしむ。酈生至り、入つて謁す。沛公方ニ牀ニ踞ス也に牀に倨踞し、兩女子をして足を洗はしめ、而して酈生を見る。酈生入り、則ち長揖兩手ヲ胸高ニ上ゲル也して拜せず、曰く、足下、秦を助け諸侯を攻めんと欲するか、且た諸侯を率ゐ秦を破らんと欲するかと。沛公罵つて曰く、豎儒。夫れ天下同じく秦に苦しむ、久し。故に諸侯、相率ゐて秦を攻む。何ぞ秦を助け諸侯を攻むると謂ふかと。酈生曰く、必ず徒を聚め義兵を合せ、無道の秦を誅せんとせば、宜しく倨踞して長者を見るべからずと。是に於て沛公、洗を輟め、起つて衣を攝し、酈生を上坐に延いて之に謝す。酈生因つて蘇秦張儀ノ六國從横の時を言ふ。沛公、喜び、酈生に食を賜ひ、問うて曰く、計、將に安くに出づべきと。酈生曰く、足下、糾合烏合トイフガ如シの衆を起し、散亂の

兵を收め、萬人にも滿たざるを、以て徑に強秦に入らんと欲す。此れ所謂虎口を探る者なり。夫れ陳留は、天下の衝、四通五達の郊也。今、其城又積粟多し。臣、其令に善し。請ふ之に使するを得て、足下に下らしめん。卽し聽かずんば、足下、兵を舉げ之を攻めよ。臣、內應を爲さんと。是に於て酈生をして行かしめ、沛公、兵を引いて之に隨ひ、遂に陳留を下す。酈食其を號して廣野君と爲す。酈生、其弟酈商に言ひ、數千人に將となり、沛公に從ひ、西南、地を略せしむ。酈生は常に說客と爲り、諸侯に馳使す。

漢の三年秋、項羽、漢を擊つて、滎陽を拔く。漢兵遁れて鞏洛を保す。楚人、淮陰侯が趙を破り、彭越が數々梁の地に反すと聞き、則ち兵を分ちて之を救ふ。淮陰、方に東、齊を擊つ。漢王、數々滎陽、成皐に困しみ、計つて成皐以東を捐て、鞏洛に屯し、以て楚を拒がんと欲す。酈生因つて曰く、臣聞く、天の天を知る（已ハ兵人ニ順ツテ王ヲレド民人ハカ食ニ賴ツテ生クルデフコトヲ知ル也）者は、王事、成す可く、天の天を知らざる者は、王事、成す可からず。王者は民

人を以て天と爲し、而して民人は食を以て天と爲すと。夫れ敖倉は、天下粟を轉輸す る久し。臣聞く、其下に廼ち藏粟ある甚だ多しと。楚人、滎陽を拔きしも、堅く敖倉を守らず、廼ち引いて東し、適卒（適卒ハ兵卒）をして成皐を分守せしむ。此れ乃ち天、漢を資ける所以也。方今、楚は取り易くして、而も漢は反つて却き（進取ヲ圖ラズ）、自ら其便を奪ふ。臣窃に以て過てりと爲す。且つ兩雄は俱に立たず、楚漢久しく相持して決せず、百姓騷動し、海內搖蕩し、農夫は耒（ス）を釋て、工女は機（ハタ）を下り、天下の心、未だ定まる所あらざる也。願はくは足下、急に復た兵を進め、滎陽を收取し、敖倉の粟に據り、成皐の險を塞ぎ、大行の道を杜（ト）ち、蜚狐の口を距ぎ、白馬の津を守り、以て諸侯に効實（便利ノ地ニ居リテ敖倉ノ粟アリ地形ヲ以テ敵ヲ制スルコト）の勢を示さば、則ち天下、歸する所を知らん。方今、燕趙の形制已に定つて、唯だ齊のみ未だ下らず。今、田廣、千里の齊に據り、田間、二十萬の衆に將とし、歷城に軍す。諸田宗、强く、海を負ひ河濟を阻（ヘダ）て、南、楚に近くして、人、變詐多し。足下、數十萬の師を遣はすと雖も、未だ歲月を以て破る可からざる也。臣